

From here.

ここからはじめよう。

文部科学省

現代的教育ニーズ取組支援プログラム

「地域創成プログラム」の実践

2007～2009年度 報告書



NGU

名古屋学院大学

NAGOYA GAKUIN UNIVERSITY

はじめに

本報告書は、過去3年間に実践してきた「地域創成プログラム」の内容をまとめ、その成果と課題を整理することを目的としている。この教育プログラムの原型は2001年度にスタートし、2006年度に学部カリキュラムに正式に組み込まれた。それが、2007年度に文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」に採択されたことから、名実ともに学部をあげてこれを遂行してきた。当該プログラムの目的は、学部の教育目標に沿って、地域社会と協働するよき市民、よきビジネスパーソンを育成することである。

本学はキャンパスを瀬戸市と名古屋市に抱えている。両都市は、古くから陶磁器の生産地・消費地という経済的、文化的なつながりがある。そのため本学の学生たちにとって、経済活動の具体的事例を学ぶ際には、陶磁器は身近で格好の教材となる。生産・流通・消費といった現実的な姿のみならず、陶磁器産業の背景にある歴史・文化・地域社会に関わる様々な事象を等身大に学ぶことができる。さらに、陶磁器を両地域のブリッジとして認識させながら、現代的課題である地域の再生と地域間の交流が教材となる。

プログラムの教育課程および方法の特徴は、段階的学習カリキュラム、実践型授業としてのスパイラル型プロジェクト学習、見学・講演＋ワークショップ型学習である。これらを通じて学生たちは地域理解を深め、地域共生の思想を学び、地域を創造する力を身につける。また、地域から大学に求められることは、知のサービス拠点として大学が存立する地域の活性化（ひとづくり・ものづくり・まちづくり）に貢献することである。

3年間の現代GP事業は、ほぼ当初の計画通り実施できた。多くの学生の参加を得て、期待された成果も得られたと考えている。とりわけ、この取組みを通じて形成された地域活動を担うプラットフォームや人的ネットワークは、学部のみならず大学にとっても大きな財産となった。なぜなら、教材を学外に求める地域創成プログラムは、自治体、公共団体や学外専門家たちの協力無くして成立しない。地域貢献は地元住民のニーズや意思に応じて、初めて認識されるからである。

本事業を進めるにあたり、学内外の多くの方々の協力と支援を受けた。学外では、愛知県、名古屋市、瀬戸市、多治見市といった地方自治体の関係者はもとより、商店街やNPO法人の方々には個人的な協力も頂戴した。学内では、学長・理事長をはじめ多くの教職員の積極的な参加と後押しを受けた。個々の氏名を記すスペースは無いが、関係各位に心からお礼申し上げます。現代GP事業が終了した後も「地域創成プログラム」は、さらに拡張・発展させていく予定である。引き続きご支援を願う次第である。

現在、各大学で教育プログラムの改良が進められている。本報告書が多少なりともその参考資料になることが出来れば幸いである。

2010年3月

名古屋学院大学経済学部長

木船久雄

CONTENTS

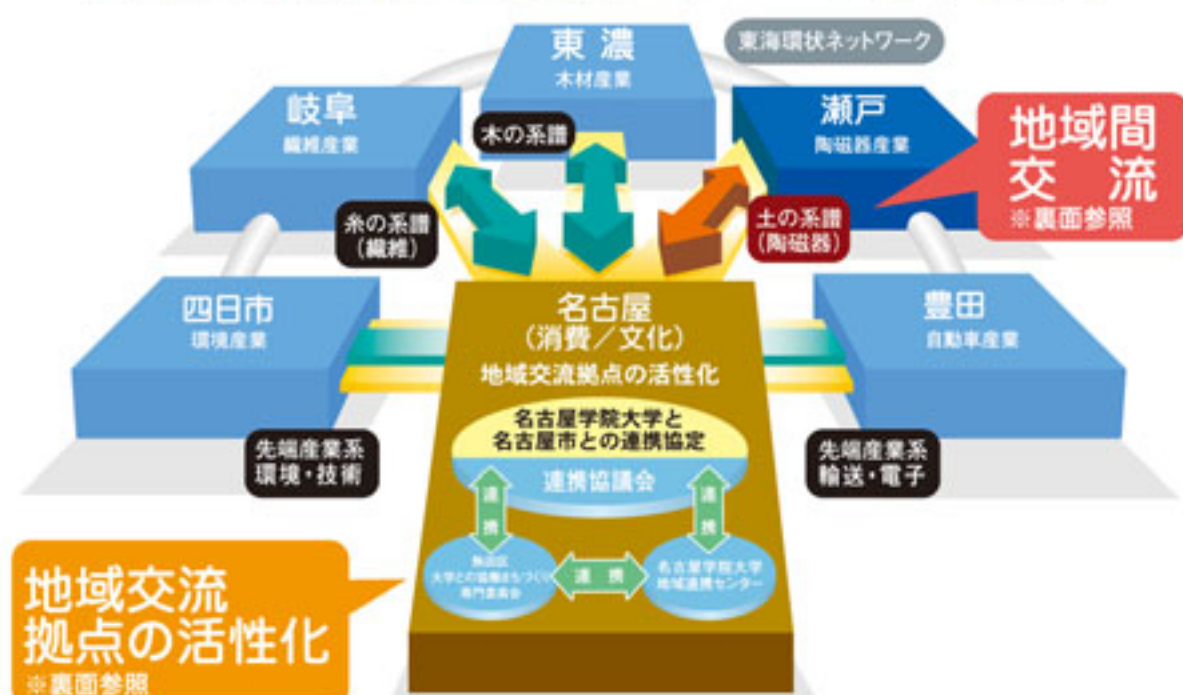
はじめに	1
取組の全体像	3
月次別活動記録	5
「地域創成プログラム」実践授業	
企業研究	13
まちづくり論	15
もの・まちづくり事業	
地域間交流事業	
産地ツアー開催報告・陶街道交流フェスティバル開催報告	19
シンポジウム「瀬戸ノベルティの魅惑！ 陶磁文化のみち」	27
地域間交流事業アンテナショップとしてのマイルポスト	31
木の系譜「木曽川がつなぐ山とまち インターネットフォーラム」	32
拠点活性化事業	
マイルポストプロジェクト、堀川にぎわいづくりプロジェクト、熱田区情報誌	33
地域連携センター活動報告	41
情報発信	
現代GP総括シンポジウム（2009年度）	45
学園祭シンポジウム（2009年度）	61
全国まちづくりカレッジin名古屋2009	73
文部科学省GP採択シンポジウム（2008年度）	75
キックオフシンポジウム（2007年度）	76
補助事業の評価、改善、次年度以降の方向性	
補助事業の評価	79
全体評価及び改善点の提示	87
地域創成プログラムの次年度以降の方向性	91

取組の全体像 「地域創成プログラム」の実践 ～「もの・まちづくり」をテーマとした地域間交流へ～

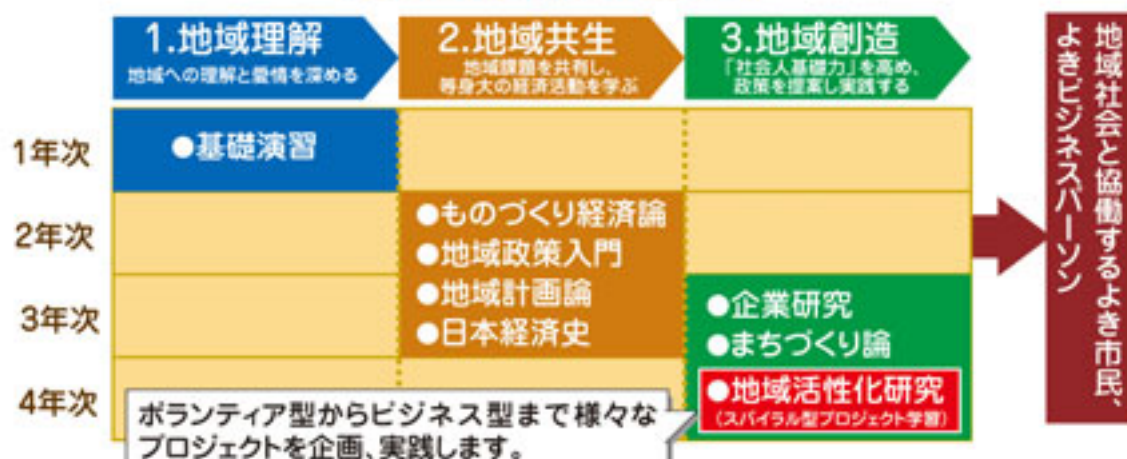
「地域創成プログラム」は地域社会と協働するよき市民、よきビジネスパーソン育成のために作られました。このプログラムは、その原型を含め、すでに愛知県瀬戸市でのまちづくり活動の中で生かされ、多くの実績を積み重ねてきました。

本学は、陶磁器の生産地・消費地の関係にある瀬戸市と名古屋市にキャンパスをおいています。本取組は、両都市を対象に、このプログラムを「もの・まちづくり（ものづくりの蓄積を生かしたまちづくり）」というテーマで実践し、地域の再生と交流を実現しようとするものです。プログラムの教育課程及び方法の特徴は、段階的学習カリキュラムと、実践型授業としてのスパイラル型プロジェクト学習、見学・講演＋ワークショップ型学習であり、これらを通じて、学生たちは地域理解を深め、共生の思想を学び、創造する力を身につけることができます。

名古屋大都市圏の交流ネットワークをめざして



教育目標・カリキュラム



学生運営のまちづくりカフェ

名古屋市熱田区に学生運営の「カフェ＆ベーカリー・マイルポスト」を設置。地域活性化の実践とともに相互の交流を図っています。



あったか交流カフェサロン 熱田区役所 NPO日比野ひとまちネット
NPOと連携して行政出前講座を月1回開催

あったかミニミニ福祉フェスタ 熱田区社会福祉協議会
障がい者福祉施設と地域の交流イベントを開催

日比野商店街「8の日清掃」 日比野商店街振興組合
毎月8日に商店街や地域住民とともに清掃活動を実施

フェアトレードを推進 NPOシャブナール他
店内でフェアトレード・コーヒーや雑貨を販売



地域観光マップの作成

なんじゃもんじゃ通信

熱田区生涯学習センター
学生と市民が協力して
熱田区の情報誌を作成



堀川にぎわいづくりプロジェクト

水上バスボランティアガイド

名古屋市 堀川NPO他
学生がキャンパス近接の堀川の
観光ガイドを企画・運営



白鳥庭園と共催(大学に近接する日本庭園)

陶街道交流フェスティバル

生産地と消費地を結ぶ「陶街道」の相互交流をテーマに美濃の陶芸家が参加するトークセッション、展示販売、ろくろ体験、陶磁器展などを開催しました。



トークセッション
器の感じ方・楽しみ方



トークセッションII
陶磁器ブランドの
これから



オカリナ演奏



陶磁器展示販売
究極の
瀬戸物プロジェクト



ろくろ体験



陶磁器展
こしかたゆくすえ

熱田生涯学習センター連携講座

産地バスツアー

熱田生涯学習センターで地場産業都市と名古屋市との関係の講座を開講し、現地見学を行いました。学生は瀬戸市や多治見市の魅力や見どころを学習、調査し、現地見学の際にガイドを務めました。

2008年11月21日 瀬戸市の「窯場の小径」、「ノベルティ・こども創造館」などをめぐりました。



窯場の小径



ノベルティ・
こども創造館



絵付け体験



水月窯



幸兵衛窯



陶芸体験

2009年11月28日 多治見市の人間国宝の陶芸家・荒川喜蔵氏の「水月窯」などをめぐりました。

2008年
11月22日
開催

2009年
11月21日
11月28日
開催

マイルポスト

日にち	イ ベ ン ト
2007年度	
12/8	8の日清掃参加開始
12/20	国際協力カレッジ～アフリカンウィーク～inなごや
1/25	学内内覧会
1/27	オープン
2/12	アートプラン大沢浩昭氏講演会
2/24	"宮城県松島商工会青年部" 視察来店
3/8	埼玉大学"カフェ プールバール" 視察来店
3/18	香川大学"和カフェ ぐう" 視察来店
2008年度	
4/13	日比野商店街第16回"ひびのコイまつり" 参加 NPO入門トークライブ
4/19	"アースデイ愛知2008" 出店
5/5	"フェアトレードウォーク" 参加
6/1	増田先生蓄音器イベント
6/14	オープンキャンパス出張カフェ
7/1	good!代表磯田浩司氏トークショー
7/6	イベント"キャンドルナイト"
7/9	あったかサロン"パン作り教室"リハーサル
7/19	オープンキャンパス出張カフェ
7/31	"岐阜県立飛騨高山高等学校" 視察来店
8/3	第1回あったかサロン"親子パン作り教室"
8/8～8/9	オープンキャンパス出張カフェ
8/24	第2回あったかサロン"親子パン作り教室"
8/30	オープンキャンパス出張カフェ
9/15	長浜・黒壁視察ツアー

9/23	サラゴサ博報告会
9/27	オープンキャンパス出張カフェ
10/1	エコポイント発行活動始動
10/4	熱田区民まつり出店
10/12	"We love NAGOYA 2008"参加
10/19	"ふるさと清掃運動会"参加
10/21	(有)スロー小澤陽祐氏トークイベント
10/26	ハロウィンパーティ
10/31～11/1	大学祭出店
11/6	日比野商店街活性化委員会始動
11/15～11/16	"全国まちづくりカレッジin摂津"参加
11/20	第1回あったか交流カフェサロン 「転ばぬ先のツエ(骨粗しょう症の話)」
11/22	"日本平和学会"出店
11/30	第3回あったかサロン"親子パン作り教室"
12/3	他大学(7校)交流会
12/14	第4回あったかサロン"親子パン作り教室"
12/17	増田先生蓄音器イベント
2009/1/8	"ひびのタウンズ"創刊準備号発行 (日比野商店街活性化事業第一弾)
1/22	第2回あったか交流カフェサロン 「あま～い誘い、あなたならどうする?(消費生活のトラブルの話)」
2/6	一周年記念パーティ
2/8	みなと出店
2/15	みなと出店
2/21	第1回"GEEK MEETS"イベント
3/4	法政大学学生視察来店
3/5	ピースポートイベント
3/22	第1回あったかミニミニ福祉フェスタ
2009年度	
4/12	日比野商店街第17回"ひびのコイまつり"参加

4/12	"ひびのタウンズ"創刊号発行
4/23	第3回あったか交流カフェサロン「名古屋城本丸御殿」
5/9～5/10	"アースデイ愛知2009"出店
5/28	第4回あったか交流カフェサロン 「名古屋開府400年について」
6/3	入学懇談会出張カフェ
6/13	オープンキャンパス出張カフェ
6/21	"キャンドルナイト イン ナゴヤ 2009"参加(出店あり)
6/25	第5回あったか交流カフェサロン「親子で歌おう!」
6/29	刈谷駅前商店街視察来店
7/4	プライベートキャンドルナイト
7/8	岐阜経済大学(Meister)学生視察来店
7/12	第5回「親子パン作り教室」(男女平等参画推進事業) 留学生インターンシップ受け入れ(7/25まで)
7/19	オープンキャンパス出張カフェ
7/23	第6回あったか交流カフェサロン 「あなたの好きな歌をみんなで歌ってみませんか? 保健師による介護予防の話もあります!」
7/30	日比野商店街活性化事業第二弾「逸品グルメ会議」始動
8/4	日比野商店街活性化事業第三弾「オリジナルプランター付ベンチ」始動
8/5	京都文教大学視察来店
8/8	オープンキャンパス出張カフェ 第2回"GEEK MEETS"イベント 一時閉店(～9/6まで)
9/7	日比野学舎移転プレオープン・内覧会
9/12	第2回あったかミニミニ福祉フェスタ 第7回あったか交流カフェサロン「障害者福祉について」 EXPOエコマネーセンター・キャンパス事業「ECOで行こう!」 マイルポストこれまでの歩み展示会開催(～9/23まで)
9/19	さあ、あなたも雑貨屋さんになっちゃお!

9/24	日比野学舎移転本オープン
9/27	熱田区民まつり参加
10/3	コミュニティビジネス専門講座
10/5～10/24	堀川スケッチ-山田久仁夫水彩画展-
10/10	オープンキャンパス出張カフェ・ここからキャンペーン
10/24	第8回あったか交流カフェサロン 「堀川にぎわいづくり～2010年は堀川開削400年!」
10/31～11/1	大学祭出店
11/14	第9回あったか交流カフェサロン 「COP10に向けて～英語で挨拶してみよう～」
11/14～11/15	全国まちづくりカレッジ2009in名古屋
11/9～11/20	全国まちづくりカレッジ2009in名古屋 パネル展示会
11/26	京都学園大学視察来店
12/5	現代GP総括シンポジウム 成果報告会発表 第10回あったか交流カフェサロン「親子で冬を楽しもう!」
12/12	第6回「親子パン作り教室」(男女平等参画推進事業)
12/17	マイルポスト・フェアトレード・フェスタ2009
12/25	商店街クリスマスミニイベント
1/16	第11回あったか交流カフェサロン「食べることって大切だね!」
2/1～2/13	インターンシップ生受け入れ
2/6	第7回「親子パン作り教室」(男女平等参画推進事業)
2/27	第3回あったかミニミニ福祉フェスタ 第12回あったか交流カフェサロン 「福祉用具を活用した障害のある方への支援について」
2/28	名古屋まちづくり縁・カレッジ 参加
3/6	第8回「親子パン作り教室」(男女平等参画推進事業)
3/13	第13回あったか交流カフェサロン 「名古屋の公園よもやまばなし」
3/27	第3回"GEEK MEETS"イベント

地域連携センター

日にち	イ ベ ン ト
2007年度	
6/1～7/6	熱田生涯学習センター連携講座 「熱田・名古屋の歴史～日本の中心から世界の中心へ～」(全5回)
6/30～9/8	熱田生涯学習センター連携講座 「わたしたちの『あつた』を創ろうvol.3」(全6回)
10/1	「名古屋市との連携協力に関する協定」締結
10/6	熱田区民まつり協力
10/18	熱田生涯学習センター連携講座 「名古屋圏のものづくりを考える～まちづくり活動と市民の役割～」
11/17～12/22	熱田生涯学習センター連携講座 「わたしたちの『あつた』を創ろうvol.4」(全5回)
2008年度	
5/29～7/3	熱田生涯学習センター連携講座 「歴史と伝統から見たアジアの展望」(全6回)
5/31～6/28	熱田生涯学習センター連携講座 「わたしたちで『あつたの情報誌』を創っていこう!」(全5回)
6/18	熱田区・大学との協働まちづくり専門委員会
10/4	あつた区民まつり参加
10/23～11/27	熱田生涯学習センター連携講座 「チャイナ再考～中国の現状から探る～」(全6回)
10/25～12/6	熱田生涯学習センター連携・名古屋都市センター共催講座 「住みよい町を考えていこう!」(全6回)
12/16	熱田区区民のつどい
3/14	まちづくりNPO「日比野ひとまちネット」設立
3/18	熱田区・大学との協働まちづくり専門委員会
3/22	第1回あつたかミニミニ福祉フェスタ

2009年度	
5/13	熱田区まちづくり協議会あったか人まちづくり専門委員会 ※
9/12	第2回あったかミニミニ福祉フェスタ
9/27	あった区民まつり参加
10/31～11/28	熱田生涯学習センター連携講座 「地場産業都市から名古屋を考える～瀬戸・美濃を訪ねて～」(全4回)
10/31～1/16	熱田生涯学習センター連携講座 「熱田の産業を『再発見』しませんか-熱田・産業観光を学ぼう-」(全5回)
11/14～11/15	全国まちづくりカレッジ2009in名古屋
2/27	第3回あったかミニミニ福祉フェスタ
3/12	熱田区あったか人まちづくり専門委員会 ※
3/25	あった産業「再発見」ツアー

※2009年度より「大学との協働まちづくり専門委員会」を「あったか人まちづくり専門委員会」に名称変更

3年間のその他イベント一覧

日にち	イ ベ ン ト
2007/12/22	現代GP選定記念キック・オフシンポジウム
2008/7/26	文部科学省GP採択シンポジウム 「現代の若者気質を活かす教育」
2008/11/22	陶街道交流 フェスティバル
2009/3/5	第1回産業観光研究会
2009/8/5	第2回産業観光研究会
2009/10/31	学園祭シンポジウム
2009/11/14～15	全国まちづくりカレッジ2009in名古屋
2009/12/5	現代GP総括シンポジウム

「地域創成プログラム」実践授業

企業研究



まちづくり論

注) 地域活性化研究については、地域間交流事業 (P.19～32) および
拠点活性化事業 (P.33～40) を参照

■企業研究

I 「企業研究2」開設の経過

経済学部では大学が名古屋市熱田区に移転するのを機会に、日本経済の中心になりつつある名古屋の地において経済界で活躍する企業経営者の生の声を聞き、その生きる姿に触れることによって学生に社会や経済の意味を理解させ、大学で学ぶ意味について考えてもらう機会を作るために本講座を開設した。企業家の力強い話を聞くことによって、物事に対し積極的に取り組む態度を養い、学生の勉学に対する主体的な取り組みを実現することを期待している。

2006年度カリキュラムから導入された本科目は、もともと経済学部の「企業連携プログラム」の関連科目として設置されたものである。現代GP「地域創成プログラム」の申請に当たっては、本科目の趣旨を生かす形で申請プログラムに取り込み、学生の意識の向上に資する目的で展開されることになった。そこで以下では、講義の目的及び具体的開講テーマについて2007・2008年度の講義要項にのっとって説明したい。

II 講義の目的

近年、社会の高度化複雑化によって大学に「キャリア教育」が求められるようになった。学生自身にも自己の適性や能力を把握し、職業と結びついた将来ビジョンを提示する能力の獲得の重要性も高まってきている。そこで「キャリア教育」領域を新たに設け「生き方」や「職業観」を育てることを通じて自ら主体的にものごとに取り組む姿勢を育て、問題発見解決能力の獲得を目指す教育が緊急の課題となってきている。

III 講義概要

2007年度：「流通・金融業界を中心に市場を知る」

2007年9月24日～2008年1月9日 水曜日3時限（13時20分～14時50分）

第1部 テーマ「名古屋経済を語る－流通と経営－」

第1講 「日本における流通の発達と近代的市場経済の成立」 笠井雅直（本学経済学部教授）

第2講 「経済産業省における流通政策について」 辻 信一氏（経済産業省中部経済産業局産業部長）

第3講 「名古屋経済とユニーの企業戦略」 鈴木郁雄氏（ユニー相談役・前会長）

第4講 「名古屋の市場マインドと、サークルK（コンビニ）の社会的意義」 土方清氏（サークルK会長）

第5講 担当教員との質疑応答と「名古屋流通業界の未来と私の提言」受講者小論文作成

第6講 「名古屋における市場の特性と百貨店経営」

松村茂氏（三越百貨店取締役上席執行役員名古屋栄店長）

第7講 「企業の創造と国際交流の意義」 清水勲氏（清水屋代表取締役相談役・前会長）

第2部 テーマ「名古屋経済を語る－金融と経営－」

第1講 「日本・ヨーロッパにおける金融システム発展の比較史」 名城邦夫（本学経済学部教授）

第2講 「最近の金融庁における金融政策について」 吉田英都氏（東海財務局理財部長）

第3講 「名古屋における金融業の特質と三菱東京UFJの企業戦略」

佐々和夫氏（三菱東京UFJ銀行副頭取中部地区担当）

第4講 「名古屋経済と金融業の未来」 加藤千磨氏（名古屋銀行会長）

第5講 「名古屋経済における地域金融の意義」 石渡世紀氏（瀬戸信用金庫副理事長）

第6講 「コミュニティハウスとしての東海地区リテール戦略」 石田建昭氏（東海東京証券代表取締役社長）

第7講 担当教員との質疑応答と「名古屋金融業の未来と私の提言」受講者小論文作成

2008年度：「名古屋圏の経済と経営」

2008年9月24日～2008年1月7日 水曜日3時限（13時20分～14時50分）

第1部「モノづくりに生きる伝統と創造」

第1講 「名古屋の経営の伝統と創造—セラミックス王国・名古屋の秘訣—」 十名直喜（本学経済学部教授）

第2講 「素材づくりの産業と経営—鋳物産業を中心に—」 納富義宝氏（高沢産業㈱ 企画部部長）

第3講 「クルマづくりの技術と経営—知識・技術習得の連続性—」 村瀬眞澄氏（㈱MTCC 代表取締役）

第4講 繊維産業にみる伝統と創造—浜松地域モデル—

渡部いづみ氏（浜松学院大学／愛知新城大谷大学講師）

第5講 「工作機械産業と中小企業の創造」 藤田泰正氏（㈱クリエイティブ・システム取締役部長）

第6講 「会計と経営の新地平—内部統制実務の現状と課題—」 浅沼宏和氏（浅沼会計事務所所長）

第7講 「ものづくりと地域ブランドづくり」

杉山友城氏（㈱アタックス調査研究事業室研究員、法政大学大学院中小企業経営革新研究所客員研究員）

第2部「地域に生きる金融と経営」

第1講 「国際金融の動向と名古屋経済について」

佐久間浩司氏（㈱三菱東京UFJ銀行企画部経済調査室次長）

第2講 「東海地区の金融情勢と金融行政の課題について」

曾根英実氏（東海財務局理財課 金融監督官）

第3講 「地域に生きる流通加工業の経営と環境側面—トータル・コスト低減で貢献するコイルセンター—」

村瀬伸二氏（豊田スチールセンター㈱CSR部グループリーダー）

第4講 「東海経済と金融業の将来」 加藤千磨氏（㈱名古屋銀行取締役会長）

第5講 「名古屋経済における地域金融の意義」 石渡世紀氏（瀬戸信用金庫副理事長）

第6講 「世界の金融波乱と名古屋金融市場について」 石田建昭氏（東海東京証券代表取締役社長）

第7講 「名古屋圏の経済と経営」総括と提言 受講者小論文作成 笠井雅直（本学経済学部教授）

IV 評価

講義では、目的意識を持った学生が多くを占め、さらに名古屋市民への公開講座としたこともあって講義はいたって静かで熱心に聴講する態度が目立った。学生は、それぞれの進路への関心から講義後活発に質問していた。授業時間終了後も熱心に質問する姿は特に印象的であった。市民の皆さんも大変年熱心で、学生と市民による相互の影響は特にいい方向に働いたように思われる。

07年度は、本学出身者以外の講義であったが、08年度は本学OBによる講義も多く含まれたために学生の関心も高く、OBたちの努力による達成感を追体験させることによって、本講座の目的をより実現することができたように思われる。



■まちづくり論

現代GP事業においては、講義課目で幅広く、知識を吸収し、それを実践科目で応用する仕組みが採られている。その中で、まちづくり論が果たした役割は、名古屋を中心として幅広く活動する人々を講師に招き、それぞれの活動の視点から、まちづくりの意義を学生に語りかけてもらったことにある。学生は、毎回、レポートを提出し、それぞれの視点でのまちづくりに対して、考えたことを纏める形式をとった。普段、中々、聞くことのできない講師やテーマでのお話に、熱心に受講している学生が多かった。基本的には講義形式であるが、2009年度には、シンポジウム形式で行った（詳細は、P.61～72頁参照）。学生は、普段、中々、聞くことのできない、まちづくりの実践活動家の話を通じて、まちづくり活動への理解が深まったと思われる。

講座に招聘した外部講師については、以下のとおりである（試験等は除く）。

《2007 年度》

敬称略

	開 講 日	講 師 名	テ ー マ と 概 要
1	9/24	古 池 嘉 和	講座開講にあたってのオリエンテーリング
2	10/1	杉 戸 厚 吉	各地のまちづくりの事例紹介と、まちづくりの意義について
3	10/8	紅 谷 正 勝	高山市や美濃市等の祭りなどの歴史あるまちにおける社会関係資本蓄積とまちづくりについて
4	10/15	井 澤 知 旦	世界のマクドナルドの店舗やファサードの色の違いや、国内外のまちづくりの事例について
5	10/22	佐 藤 久 美	国際博覧会での経験を踏まえた国際交流とまちづくりの関係について
6	10/29	加 藤 達 志	子どもたちの車づくりなど、豊田市の地域特性を活かしたまちづくりについて
7	11/5	菅 谷 由 弥 子 他	多治見市の陶磁器産業を活かしたまちづくりと、NPOが主体となる産業振興について
8	11/19	鈴 木 伸 夫	名古屋市内の事例を中心とした建築や都市計画の視点でのまちづくりについて
9	11/26	野 口 佳 男 他	信長御膳や「もろこ寿司」など津島市に固有の食や、「天王文化塾」における歴史を生かしたまちづくり活動について
10	12/3	秋 元 祥 治	岐阜におけるまちづくり活動グループG-netや、学生と企業をつなぐ「本気系インターンシップ」の紹介などについて
11	12/10	古 橋 敬 一	瀬戸市の銀座通り商店街における学生の店「マイルポスト」の事例紹介や国際博覧会におけるボランティア活動について

《2008 年度》

敬称略

	開 講 日	講 師 名	テ ー マ と 概 要
1	9/23	古 池 嘉 和	講座開講にあたってのオリエンテーリング
2	9/30	井 澤 知 旦	世界のマクドナルドの店舗やファサードの色の違いや、国内外のまちづくりの事例について

3	10/6	森 旬 子	世界各都市の写真を元に、都市景観の違いを概説。景観を通じた文化の相違と景観を活かしたまちづくりについて
4	10/13	小 林 弘 嗣	「ハンザキ（サンショウウオ）」の生息する黒川集落（兵庫県）における環境教育とまちづくり活動について
5	10/20	相 羽 寿 郎	クリエイターズマーケットのイベント内容の紹介と、デザインとまちづくりについて
6	10/27	堀 田 勝 彦	長者町におけるまちづくり活動と、アートトリエンナーレのプレイベントについて
7	11/10	北 川 啓 介	パラサイトシネマの理念、実践活動内容などを通じた、名古屋のまちづくりについて
8	11/17	藤 澤 徹	ユビキタス社会のまちづくりや、ITを活用したまちづくりの事例について
9	11/24	鈴 木 伸 夫	名古屋市内の事例を中心とした建築や都市計画の視点でのまちづくりについて
10	12/1	桑 原 宏 司	サンデーフォークプロモーションの業務内容の紹介や、「栄みなみ音楽祭」の内容など音楽とまちづくりについて
11	12/8	小 出 真 弓	出版者の目線を通じたものの見方、アラフォー世代の世代感覚とまちづくりについて
12	12/22	西 村 公 秀	新聞記者の目線で、まちづくりがどのように見えるのか。飯田市のまちづくりを例に概説。

《2009 年度》

敬称略

	開 講 日	講 師 名	テ ー マ と 概 要
1	9/29	古 池 嘉 和	講座開講にあたってのオリエンテーリング
2	10/5	井 澤 知 旦	世界のマクドナルドの店舗やファサードの色の違いや、国内外のまちづくりの事例について
3	10/19	北 川 啓 介	パラサイトシネマの理念、実践活動内容などを通じた、名古屋のまちづくりについて
4	11/9	加 藤 慎 康	大ナゴヤ大学とは、いかなるコンセプトの元に開講されているのか、について、講座内容と共に概説。
5	11/15	相 羽 寿 郎	クリエイターズマーケットのイベント内容の紹介と、デザインとまちづくりについて
6	11/23	新 見 栄 治	鉄板TVとはどのようなものか。現在、開催されている「なごやトリエンナーレ」のプレイベントである鉄板TVを概説。
7	12/14	桑 原 宏 司	サンデーフォークプロモーションの業務内容の紹介や、「栄みなみ音楽祭」の内容など音楽とまちづくりについて
8	12/19	古 橋 敬 一	瀬戸市の銀座通り商店街における学生の店「マイルポスト」の事例紹介や国際博覧会におけるボランティア活動について
9	12/21	堀 田 勝 彦	長者町におけるまちづくり活動と、アートトリエンナーレのプレイベントについて
10	1/18	水 野 孝 一	名古屋において、「ど祭り」を始めるにあたっての経緯や理念、その運営方法について

もの・まちづくり事業

地域間交流事業

産地ツアー開催報告・陶街道交流フェスティバル開催報告

シンポジウム「瀬戸ノベルティの魅惑！ 陶磁文化のみち」

地域間交流事業アンテナショップとしてのマイルポスト

木の系譜「木曽川がつなぐ山とまち インターネットフォーラム



拠点活性化事業

マイルポストプロジェクト、堀川にぎわいづくりプロジェクト、熱田区情報誌



地域連携センター活動報告

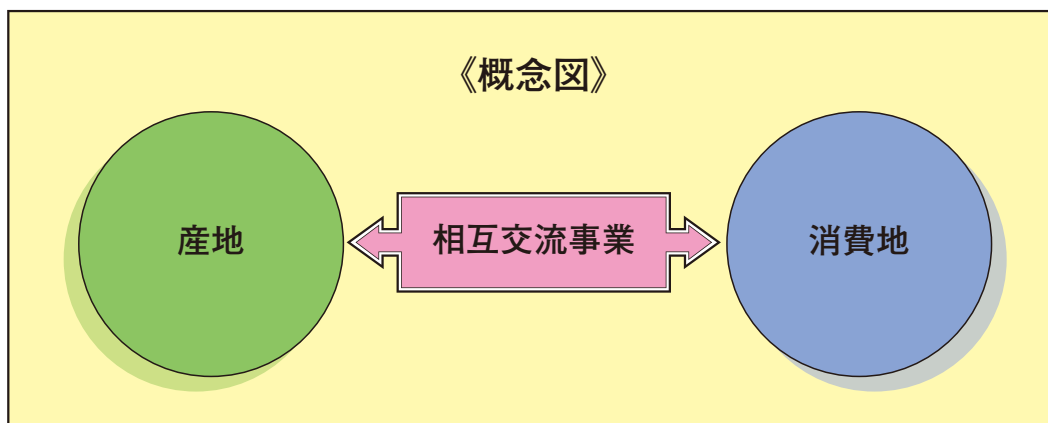
■地域間交流事業

— 産地ツアー開催報告・ 陶街道交流フェスティバル開催報告 —

名古屋圏は、多様な地場産業都市が核都市名古屋を取り囲むように位置している。今回のGP事業では、その中で、陶磁器産業を地場産業として抱える瀬戸市と多治見市をモデルに、陶磁器産業の産地と核都市名古屋市の交流連携事業を実践するものである。

交流事業は、相互の往来が必要となり、消費地では産地の紹介を、産地では消費者の来訪を喚起することが必要となる。

そこで、2008年度には、消費地名古屋において、陶磁器を紹介する交流事業を、また、2009年度には名古屋の消費者を陶磁器産地へ案内するツアーを実施した。消費地における交流事業は①「陶街道交流フェスティバル」であり、消費者の産地への来訪は、②「産地ツアー」である。以下で詳述する。



①陶街道交流フェスティバル

2008年11月22日(土)、23日(日)に、名古屋市熱田区にある「白鳥庭園（しらとりていえん）」にて、本学主催による『陶街道交流フェスティバル』を開催した。現代GP事業の一環として実施したイベントである。

目的は、陶磁器の生産地である瀬戸・美濃と、消費地である名古屋を、今日的な視点でつなぐものである。タイトルである「陶街道」という言葉には“生産地と消費地をつなぐ架空の道”という意味が込められている。

☆トークセッションⅠ「器の感じ方・楽しみ方」(10:30～11:30) 於) 清羽亭

司 会	名古屋学院大学経済学部教授	古池 嘉和
パネリスト	陶芸家	青山 渡氏
	さかづき美術館支配人	今川 祐子氏
	空間デザイナー	三宅 京子氏

トークセッションⅠの様子



☆トークセッションⅡ「陶磁器ブランドのこれから」

第1部 ブランドの作り方

第2部 新せとものブランドへの挑戦

司 会 名古屋学院大学経済学部教授

水野晶夫

パネリスト 株式会社ブランド総合研究所代表取締役社長

田中章雄氏

瀬戸・究極のせとものプロジェクト開発メンバー

鈴木 忠氏、加藤克己氏

名古屋学院大学経済学部

杉瀬さん、梅田君、内田君

トークセッションⅡの様子



☆オカリナ演奏—陶磁器を使った楽器の演奏

『土と炎に育まれたメロディ』

於) 立礼席特設ステージ

オカリナグループ『風夢 (ふうむ)』代表 (塚本 仁氏)

オカリナ演奏の風景



☆陶磁器展 『こしかたゆくすえ』

紅葉茶会が催された清羽亭で、空間デザイナーの三宅京子氏のプロデュースによる美濃焼の器や掛け軸などが飾られ、お茶席に風雅を添えていた。「こしかたゆくすえ」の言葉が示す「今まで来た道、これから先行く道」という意味のとおり、清羽亭内は和と洋が融合した新鮮な雰囲気に包まれており、若い女性や学生たちが展示を楽しむ姿も見られた。

陶磁器展の様子



☆陶磁器の展示販売

庭園内の芝生広場では、瀬戸物の展示販売やカレー皿付きカレーライスの販売が行われた。

展示販売の様子



②産地ツアー

(開催日時)

2009年11月21日(土)と28日(土)に「生涯学習センター連携講座 産地バスツアー」を開催した。

(開催目的)

このツアーは、経済学部地域活性化研究Aの講義の一環として、学生が企画・運営したものであり、熱田区生涯学習センターの講座とタイアップし、受講者の方々をやきもの産地へ案内し、

産地についての理解を深め、生産地と消費地の地域間交流を図る目的で実施したものである。

(瀬戸ツアー)

11月21日（土）に実施したツアーの行き先は愛知県瀬戸市である。19名の参加者の方々と7名の学生が案内し、瀬戸市の観光名所や地元の窯元などをめぐった。バスの車内や見学先などでは、学生が参加者の方々に瀬戸市の魅力や見どころを紹介した。学生と参加の方々が一緒に絵付け体験をしたり、窯垣の小径を散策したりして交流を図った。

訪 問 先	瀬戸ノベルティ子ども創造館⇒瀬戸蔵⇒窯垣の小径（宝泉寺、窯垣の小径資料館、窯垣の小道ギャラリー、陶芸家・水野教雄氏の工房）
-------	---



（多治見ツアー）

産地バスツアー2回目となる11月28日（土）は、岐阜県多治見市を訪ねた。23名の参加者の方々と8名の学生が案内し、人間国宝の陶芸家・荒川豊蔵氏の長男・武夫氏が跡を継ぐ工房「水月窯」や、2008年11月に開催した「陶街道交流フェスティバル」トークセッションにパネリストとしてご参加いただいた今川祐子氏が支配人を務める「市之倉さかづき美術館」のほか「本町オリベストリート」「創造館」などをめぐった。

今回もバスでの移動中、学生による多治見市や見学先などのガイドがあり、参加者の方々が熱心に説明に聞き入っていた。また、陶芸家・加藤幸兵衛先生の工房では陶芸体験も行なわれ、参加者の方々が“手びねり”という作法で湯のみや茶碗などを制作した。

訪 問 先	水月窯⇒創造館・本町オリベストリート⇒さかづき美術館・幸兵衛窯・古陶磁資料館・工芸館
-------	--



総括―今後に向けて

現代GPによる2ヵ年の交流事業により、相互理解の重要性は認識できた。産地と消費地は、距離的に近い関係にあっても、意外と未知のことが多く、相互の情報交換や理解を深めることで、経済や文化の活性化が実現するものと思われる。こうした交流事業を学生が目線で行い、学生自らが圏域の活性化のプログラムを実施する中で成長することが大切であり、地場産業への認識も新たになるものと思われる。

当然ながら、このような交流事業は、継続して実施していくことが重要であり、現代GP事業の終了後も、様々な主体と共に、事業を行っていかねばならない。そこで、GP期間内に学生とともに、各産地取材した内容を含めた、陶磁器産地の情報誌（リーフレット）を作成した。すなわち、当該リーフレットは、産地と消費地の相互交流事業の総括に代えるものであると同時に、今後の活動に向けた活動の契機とすることを狙いとしたものであると理解願いたい。

今後は、現代GPでフィールドとした陶磁器産地における観光・交流事業を、継続的に実施していくとともに、中部圏における他の系譜（糸や木など）の観光・交流事業を展開し、ひいては大学の存在する中部圏の経済活性化を目指した活動を行っていく。

（参考）リーフレット・イメージ



地域活性化研究A

2008年度	
5/12～5/13	(有) 北風写真館杉原氏による講義『資源収集の視点と方法、ものの見方・考え方について』
7/1, 7/7	(株)都市研究所スペース井澤氏による講義『名古屋市周辺にある各陶磁器産地の特徴の学習とイベント計画』
10/ 4	陶磁器産地（多治見）で学習
11/22	陶街道交流フェスティバル
1/ 1	地域住民・学生による熱田情報誌『なんじゃもんじゃ通信』発行
2009年度	
11/21	熱田生涯学習センター連携講座 産地ツアーガイド：瀬戸市
11/28	熱田生涯学習センター連携講座 産地ツアーガイド：多治見市

■地域間交流事業

シンポジウム「瀬戸ノベルティの魅惑！ 陶磁文化のみち」

1 「瀬戸ノベルティの魅惑！ 瀬戸と名古屋をつなぐ陶磁文化のみち」展の開催

「瀬戸ノベルティの魅惑！ 瀬戸と名古屋をつなぐ陶磁文化のみち」展が、2月14～22日に3者（瀬戸ノベルティ文化保存研究会、名古屋陶磁器会館、なごや歴史ナビの会）の主催で、名古屋陶磁器会館にて開催された。

この企画を推進した「瀬戸ノベルティ文化保存研究会」（代表：中村儀朋）は、同産業をモデルにした『現代産業に生きる技―「型」と創造のダイナミズム―』（十名直喜著、勁草書房、2008年）の出版を機に立ち上げたもので、著者も会員の一人である。瀬戸ノベルティの産業文化を継承し、陶磁文化によるまちづくりができればといった思いを共有する陶磁器関係の経営者や職人、デザイナー、商店街経営者、コレクター、一般市民、研究者など多様な人たちで構成されている。

2009年1月半ばに急遽、浮上した展示企画「瀬戸ノベルティの魅惑！～瀬戸と名古屋をつなぐ陶磁文化のみち～」（名古屋陶磁器会館、同2月14日～22日）を詰めるために、1月28日の



夜、10数人が集った。ガランとした工場空間、19時から22時過ぎまで寒さの沁みるなか、熱い議論と思いに包まれた3時間余でした。瀬戸ノベルティの魅力が名古屋の市民に広く知



ってほしい、そうした交流を通して瀬戸の陶磁器産業を元気づけたいとの思いが込められている。

こうした市民の思いは、大きな関心を引き起こし、共鳴と交流の輪を広げていく。当初は、「今どき回顧展などやってどうする」といった声も聞かれた。しかし、「温故知新」の大切さ、とりわけ産業文化として捉え直すことが21世紀型産業としての再生の出発点になるという理解を得るに至る。瀬戸市やとうめい新聞、NPO法人・檀木倶楽部などからの後援に続き、日本陶磁器産業振興協会、愛知県陶磁器工業協同組合、瀬戸陶磁器工業組合、瀬戸原型陶彫会、さらに名古屋や鳥取のNPOやクラブなどからの後援を得て、協力の輪はさらに大きく広がった。

発起から開催まで1ヶ月にも満たなく、まさに走りながらの手づくり準備だった。幸い、瀬戸と名古屋の両都市を中心に多くの関係機関のご後援を得、マスコミや関係者のご協力をいただき、多彩な企画と展示に囲まれるなか1,200人を超える来場者に恵まれるなど、盛況裏に幕を閉じることができた。

2 シンポジウム「瀬戸ノベルティの魅惑！陶磁文化のみち」の企画

シンポジウム「瀬戸ノベルティの魅惑！陶磁文化のみち」は、この展示会の特別セッションとして設けられたものである。開催前日の夕方に開かれた（名古屋学院大学）都市政策プロジェクト研究会で、展示会の紹介をしたところ、「瀬戸と名古屋にキャンパスを持つなど歴史的なつながりの深い本学の研究・教育活動の趣旨と合致するので、期間中にシンポジウムを開催してはどうか」との提案をいただいた。そこで夜中に企画し、関係者に諮って固めたのは翌14日の展示会場（初日）においてである。

シンポジウムは、3者（名古屋学院大学、瀬戸ノベルティ文化保存研究会、名古屋陶磁器会館）の主催という形にした。せっかくの展示会なので、実物を観るだけでなく、その背景に潜む本質的なもの、経営、技術、思いなどを紹介できればというのが、シンポジウムの趣旨であり狙いである。



3 多彩なノベルティとシンポジウムが紡ぎだす知的・文化的な固有空間

2時間以上におよぶシンポジウム「瀬戸ノベルティの魅惑！ 陶磁文化のみち」（2月20日）は30数人の参加を得て、瀬戸ノベルティの秘められた魅力と可能性、課題について、多様な視点から自在に語り合い、知的に交流する得難い場となった。

足りない椅子などは急遽、市内および瀬戸から持ち込んでいただいた。パネリストの布陣も加藤工芸(株)の加藤勇夫会長を加えて、4人への拡充を直前に決めるなど、まさに手づくりで走りながら整備するなか、スタートした。

開会あいさつ（古池嘉和・名古屋学院大学教授）の後、コーディネーター（十名直喜・同左）から、本稿とレジュメ（「名古屋と瀬戸をつなぐ陶磁文化交流」）に基づき、基本的な枠組みと視点を提起した。まず、世界史的な磁器交流の大局（4つの流れ）のなかで、瀬戸ノベルテ



ィの過去・現在・未来を位置づける。次に、瀬戸と名古屋をつなぐ陶磁文化のみちについて、名古屋圏とくに名古屋における近代セラムックス産業の成立・発展、そして名古屋から瀬戸への産業展開を概括する。それらをふまえ、瀬戸と名古屋をつなぐ新たな架け橋とそれが秘める（まちづくりと産業再生の）可能性について提起した。

4人のパネリスト（瀬戸側、名古屋側から各2人）からは1時間余にわたり、瀬戸ノベルティと陶磁文化を軸にして自在に語っていただいた。まず、中村儀朋（瀬戸ノベルティ文化保存研究会代表）さんより、瀬戸ノベルティの魅力について、「集団就職」調査のなかで 発見した経緯、日本のオンリーワンとしての価値、それをどのように生かせるかなどを語っていただいた。次に、池田洋幸（瀬陶工副理事長、池田丸ヨ代表取締役）さんは、当社の歴史的な歩みを俯瞰され、逆風に抗しての新商品（万博のア

アイテムなど）開発、そしてご子息との二人三脚などについて披露された。

名古屋側からは、まず小椋寿紀（名古屋陶磁器会館事務局長）さんが、当会館の歴史的な歩みについて概観され、瀬戸と名古屋の陶磁文化交流を通して会館の難局を乗り越り発展させたいとの抱負を述べられた。次に、79歳にして現役の加藤勇夫（加藤工芸(株)会長）さんから、当社の設立から現在まで60年にわたる経営の歩みとノベルティへの熱い思いを語っていただいた。「型が一番大事」と明言され、今も4人の原型師を社内で抱えておられる。名古屋で原型をつくり、中国でつくらせるという経営方式を維持しつつ、中国での模倣問題などと苦闘されているご様子ガリアルに伝わってきた。

会場の出席者からも、発言を得ることができた。生産停止から20年余の今も、膨大な各種製品や「型」などの保存に努められている加藤豊（丸山陶器(株)会長）さんより、その熱い思いの一端を静かに語っていただいた。また、池田丸ヨ(株)の若き継承者・池田圭（同社企画部長）さんから、逆風のなかノベルティ事業の継承に飛び込んだ思いや、新しい感性と技術をつないで切り開いていきたいとの抱負などを、熱く語っていただくことができた。こうして2時間を越えてなお名残惜しさを感じつつ、盛況裏にシンポジウムを終えた。アフター・シンポのフロアで、「感銘深いシンポジウムでした。展示品も素晴らしく、こうした場を一緒につくっていききたい」（田村哲・愛知陶磁資料館学芸員）との言葉もいただいた。

また、別室にて即席で設けられた茶話会（もう一つのアフター・シンポ）にも、関係者など10数人が集った。シンポジウムで語り残したことや、名古屋陶磁器会館の展示様式に新たな工夫・進展がみられるこの数日間の背景、さらには加藤豊子（当館スタッフ）さんによる修復技術の説明、それを聞いての「内にお願ひしたいものが一杯ある」といった商談話などへと飛び火する。そうしたワイガヤに時間を忘れて盛り

上がるなか、ようやくにして会を閉じ、そのインパクトと余韻のただならぬものを味わいつつ帰途についた。



4 シンポジウム冊子の編集・発行

「シンポジウムの記録を何とか残したい」、「瀬戸と名古屋のまちづくり、そして地場産業再生の活動に少しでも役立つ形にまとめたい」。そうした思いを胸に、パネリストをはじめ関係者のご協力を得て編集を行い、冊子にまとめた。テープ起こしを基に、文章を整え、小見出しを付けるなど、少しでも読みやすいようにと心がけた。臨場感を共有できるようにと、プロカメラマン堀正雄さんの見事な写真も織り込ませていただいた。

この冊子は、文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラムの支援を得て、1千部印刷した。学内の関係者のみならず、瀬戸市や名古屋市の行政機関、図書館、大学、（名古屋陶磁器会館などノベルティの展示に関わる）博物館、（瀬戸ノベルティ文化保存研究会など）研究会・クラブ・NPOなどに、まとまった冊数をお送りし活用していただいた。

5 名古屋キャンパスの玄関を彩る瀬戸ノベルティ

本学白鳥学舎の正面玄関を入ると、すぐ左側コーナーのガラス製ショーケースに瀬戸ノベルティ10数点が陳列・展示され、華やいだ芸術・文化空間を醸し出している。

本シンポジウムで「瀬戸ノベルティ経営60年の思い」について語っていただいた加藤工業(株)会長の加藤勇夫さんより、2009年末に本学へ寄贈していただいたものである。アンティークドール（立型・座型）、古代人形（男女ペア）、古代レース人形トリオ、オーケストラ人形、ハーブとバイオリン引き男女、ロビンと水仙、アメリカ・ノーマンロックウェルのイラストからの作品群など。1960年から80年代にかけて、光和陶器、TK名古屋人形、ヤマサン製陶、山国陶器など瀬戸を代表するメーカーでつくられた傑作群で、今ではいずれも入手の難しいものばかりである。



加藤勇夫さんは、新制名古屋学院高校卒（第1期生）で伊藤信義本学理事長（同第4期生）の3年先輩にあたるなど、本学とも関わりが深い。また、瀬戸と名古屋をつなぐ陶磁文化の生き字引の如き方で、両都市をつなぐ文化の架け橋として地元の熱い期待を担う本学の歩みとも共鳴するところが多く、シンポジウムのご縁で愛蔵品を寄贈していただいた。

また、同社が1981年8月に製作されたノベルティ映画「明日へのうるおい」も、CDでご提供いただいた。ものづくりと経営現場の教材として、シンポジウムの記念冊子ともどもTIESの講義枠「陶磁器の世界」にて全国の大学に配信している。



■地域間交流事業

— 地域間交流事業 アンテナショップとしてのマイルポスト —

学生運営のまちづくりカフェ「カフェ&ベーカーリーマイルポスト」では、名古屋大都市圏交流ネットワークのアンテナショップとしての役割を担っている。その中で「土の系譜（陶磁器産業）」「木の系譜（木材産業）」の商品の販売、ならびに観光パンフレットの陳列・配布を行っている、これらの地域との交流促進事業を行っている。

〈事業内容〉

「新感覚！せともの&きそもの」をコンセプトに、従来からの瀬戸物・陶磁器製品、木材製品にこだわらず、学生らしい発想で、若者にも受けいられる品揃えを意識した。なお、商品の管理は実践授業「地域活性化研究B」プロジェクトチームにて行っている。



「せともの」は、愛知県瀬戸市に本社をおく聖新陶芸株式会社の「キッチンで野菜、育ててみませんか？」をキャッチフレーズとした野菜栽培セットに注目し、委託販売を行っている。また、栽培セットの一部は、店内でも栽培・陳列し、お客様の目を引いている。

「せともの」をインターネット検索エンジンYahoo!JAPANで検索すると63万件ヒットする

一方で、「きそもの」は数件しかない。これは、この授業の中でうまれた言葉であり、長野県木祖村職員の方のご了解を得て、使用している。



現在、マイルポストの「きそもの」は、長野県木祖村を拠点に活動している「ナルカリクラフト」商品を取り扱っており、その代表であるナルカリこと草刈成雄氏は、糸鋸を使ってパフォーマンスショーができる方であり、数々のテレビ番組にも出演されている。

〈事業成果〉

事業が本格化したのが、2009年12月であり、その事業成果はまだ計ることができないが、瀬戸物や木材産業は、堀川との歴史的な関連性があり、これまでの堀川にぎわいづくりプロジェクトとの連携が可能である。また、学生達が商品管理などを通じて、地域間交流の歴史・文化への理解が深まることに期待したい。また、その理解の深まりから、日比野を中心とした熱田地域に向けて、この取組をもっとアピールできるような展開（イベントや販促など）につなげていきたい。

■地域間交流事業

— 木の系譜「木曽川がつなぐ山とまち インターネットフォーラム」—

2008年12月14日、2009年12月13日に、名古屋学院大学名古屋キャンパス白鳥学舎1階ホールにて、「木曽川がつなぐ山とまち インターネットフォーラム」を開催し、その運営協力を実践授業「地域活性化研究B」堀川にぎわいづくりプロジェクトチームが行った。



このフォーラムは、名古屋の水源である長野県木祖村とその恵みを受けている名古屋をインターネット中継で結び、理解と交流を深めることを目的に、2008年より実施している。社団法人中部建設協会、堀川1000人調査隊2010実行委員会、名古屋市堀川総合整備室、木祖村役場、名古屋工業大学秀島研究室、名古屋学院大学「地域活性化研究B」がコアメンバー。



「地域活性化研究B」堀川にぎわいづくりプロジェクトチームでは運営協力のほか、「イン

ターネット版堀川検定」でのブース出展を毎年しており、来場された市民の方々に取り組んでもらっている。

〈事業成果〉

社会的実験でもあり、来客数が200名前後と伸び悩んでいるが、参加団体も年々増加、また、木曽流域地域との交流にも発展してきており、今後の展開に期待したい。このフォーラムへは、堀川にぎわいづくりプロジェクトの活動を通じてできた堀川に関わる市民団体とのつながりがきっかけとなり実現した。



また、ここからさらに、長野県木祖村、さらには、ナルカリクラフト（マイルポスト「きそもの」販売）へとつながった。



■拠点活性化事業

マイルポストプロジェクト、堀川にぎわいづくりプロジェクト、熱田区情報誌

名古屋市熱田区を中心とした拠点活性化事業は、主に「マイルポスト・プロジェクト（まちづくり推進プロジェクト）」「堀川にぎわいづくりプロジェクト」「熱田区情報誌」の3つに分けられる。

1. マイルポスト・プロジェクト

(1) マイルポスト・プロジェクトとは

学生運営のまちづくりカフェ「カフェ&ベーカリー マイルポスト」の運営を通じて社会貢献を推進していく「まちづくり推進プロジェクト」は、2002年から2007年までのマイルポスト・瀬戸プロジェクトと2008年からのマイルポスト・名古屋プロジェクトからなる。

瀬戸プロジェクト（2002-2007）では、活動当初、シャッター通りであった銀座通り商店街が、2006年には経済産業省「がんばる商店街77選」に「大学連携」の評価を受けて入るまでに活性化した。

その実績から、名古屋学院大学では2007年度文部科学省現代G P（現代的教育ニーズ取組支援プログラム）に「地域創成プログラム」が選定され、また、2007年10月には名古屋市との地域連携協定を締結した。そして、マイルポスト・プロジェクトの名古屋での再開を決定し、2008年1月に日比野商店街の空き店舗をお借りして「カフェ&ベーカリー マイルポスト」をオープンさせた。

2009年9月には、まちづくり活動の拠点としてより広いスペースを確保するため、名古屋学院大学名古屋キャンパス日比野学舎1階に移転し、学食機能も担いながら、さまざまな社会貢献型イベントを仕掛け、コミュニティビジネス／ソーシャルビジネスを実践している。



マイルポストでは、レジ袋辞退者にオリジナルECOポイントを発行。EXPOエコマネーセンターとして貯めることも可能。エコバッグ、タンブラーにも交換できる。

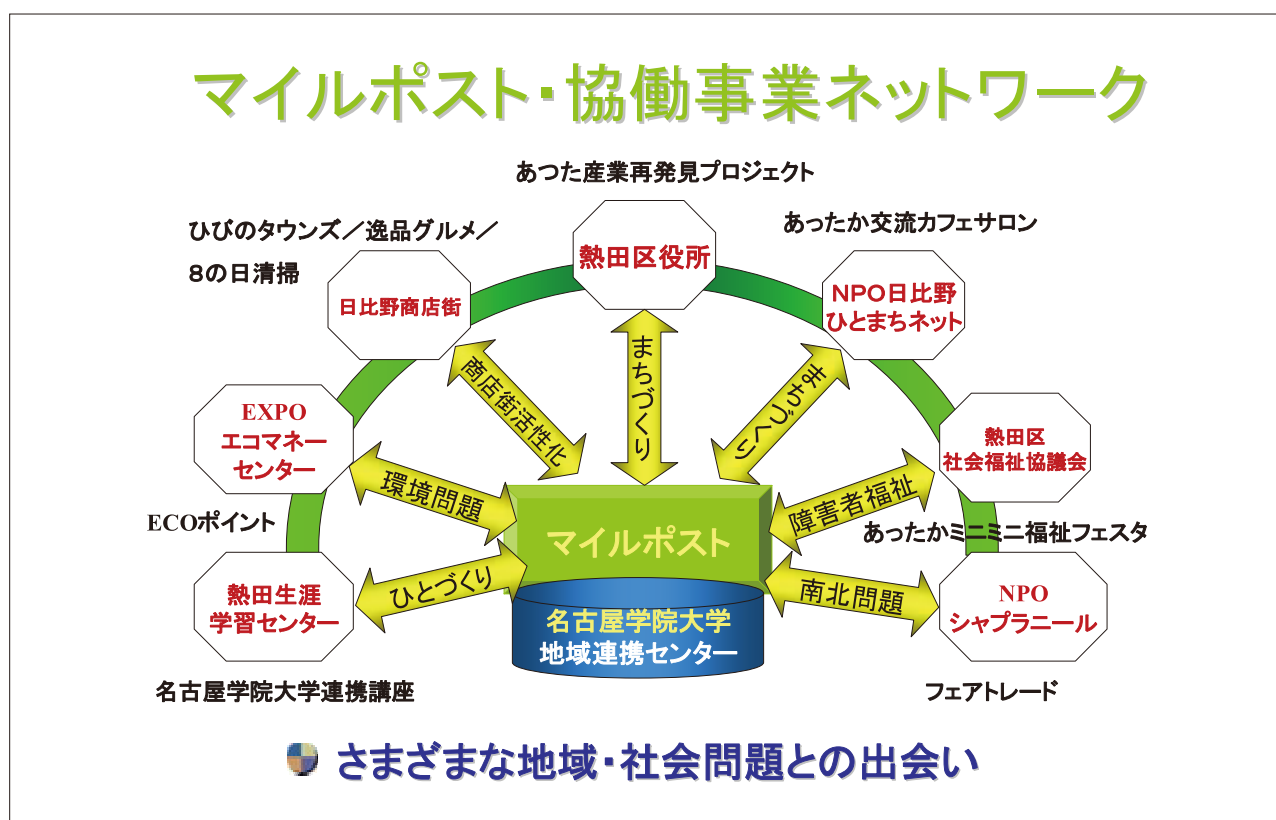
(2) マイルポストの役割・特徴

マイルポストは、「地域創成プログラム」のうち「交流拠点活性化」の中心的な役割を担っている。通常は、カフェ＆ベーカリーの営業を行っているが、まちづくりの視点からさまざまな社会貢献活動を推進している。その事業展開の特徴は以下の3点である。

①さまざまな社会問題に対して、協働事業パートナーと連携して解決に向けての事業展開をしている点があげられる。例えば、障害者福祉では、熱田区社会福祉協議会、熱田区障害者地域生活支援センター他との連携協力により「あったかミニミニ福祉フェスタ」を実施し、「子供も大人も、障害者も健常者も気軽に楽しくふれあう」ことを目的に、授産製品の販売や講演会、マジックなどのパフォーマンスショーを実施している。

②これらのパートナー間の連携ネットワークにより活動の幅を広げている。例えば上述の「あったかミニミニ福祉フェスタ」では、熱田区役所や日比野商店街振興組合も主催者として名を連ね、あつたボランティアねっとや日比野ひとまちネットなど地元のNPOも協力・参加している。

③参加する学生は、特にこれらの社会問題に関心があってマイルポストに加入したわけではなく、事後的にこれらの社会問題に参加することにより、自分の抱く関心・興味にあわせて参加の度合いを強くしている。その意味で、社会問題への新しい啓発アプローチとしての特徴をもっている。



(3) 主な活動概要

①熱田区役所連携事業：あったか交流サロン「パン作り教室」

名古屋市「男女平等参画推進事業」の位置づけのもと、マイルポストクラブの学生が中心となり、年4回ペースで、親子向けのパン作り教室を開催している。



②熱田区役所連携事業・あったか交流カフェサロン

サロニックな雰囲気での「行政出前講座」を月1回ペースで開催。2009年6月より、マイルポストの協力のもと、まちづくりNPO日比野ひとまちネットが企画運営を行っている。



③熱田区社会福祉協議会連携事業・あったかミニミニ福祉フェスタ

「来て・見て・つながる」をテーマに、熱田区、熱田区社会福祉協議会、本学地域連携センターとの協働事業として、年2回ペースで区内福祉施設の自主製品の逸品販売や福祉講演会等を開催している。また、試飲・試食会、子供向け出し物なども併せて実施し、集客・交流を図っている。



④長浜・黒壁視察ツアー 2008年9月15日

日比野商店街・行政・地域の方々と学生との交流を深める目的で、滋賀県長浜・黒壁スクエアの視察ツアーを行った。現地では、まちづくり役場サポーターによる講演を聴き、各班に分かれて散策した。



⑤日比野商店街「8の日清掃」

毎月8日を“8の日清掃”とし、朝8時より、日比野商店街・地域の方々と学生で、日比野交差点周辺の清掃活動を行っている。この活動が評価され、2008年5月、日比野商店街は名古屋市商店街振興組合連合会「地域貢献・特別賞」を受賞した。



⑥ひびのコイまつり参加

日比野商店街振興組合主催の年1回4月第2日曜日の大イベント「ひびのコイまつり」。企画段階からイベント運営まで学生が関わり、まつりの活性に携わっている。



⑦『日比野タウンズ』発行

日比野商店街活性化事業の一環として、年4回ペースで継続的に発行している。買い物客の回遊性を高めるスタンプラリー制が好評で、これにより新規組合加盟店舗が増加した。マイルポスト学生チームが発案、企画している。



(4) 事業成果

マイルポストを拠点とし、さまざまな団体との連携事業を通じて学生が社会問題と向き合うシステムを構築できたことが意義深い。

また、そうした活動が地域の活性化に結びついてきた。日比野商店街活性化では、1991年発足当時61の組合員数だったのが、名古屋学院大学の移転前、2006年には41まで減少していた。しかし移転以降徐々に増加し始め、2009年には69店舗までになった。また、日比野商店街は2009年度愛知県活性化モデル商店街に認定された。

障害者福祉施設からも大いに喜ばれている。これまで販路開拓が難しかった授産製品がミニミニ福祉フェスタにて売上を伸ばしている。また、障害者福祉への啓発活動、健常者と障害者の交流促進にも貢献している。

■主な報道履歴

2008年6月30日(月) 中日新聞

「熱田・地域づくりの専門委 街活性化に学生の息吹」

2008年8月4日(月) 中日新聞

「親子で楽しくパン作り 熱田のカフェで教室」

2008年8月10日(日) 東海テレビ

「夢、未来！」にマイルポスト荒牧さん登場

2008年8月26日(土) 中部経済新聞

「熱田区まちづくり協議会 大学と連携し商店街活性」

2008年12月中旬 ケーブルTV「スターキャットTV」

お店紹介「カフェ&ベーカリーマイルポスト松枝店長」

2009年2月7日(土) 中日新聞

「地域密着学生カフェ 名学院大1周年祝いパーティー」

2009年3月中旬 ケーブルTV「スターキャットTV」

「あったかミニミニ福祉フェスタ」の紹介に古橋くん登場

2009年4月14日(火) 中日新聞

「第17回ひびのコイまつり マイルポスト出店」

2009年12月26日(土) 毎日新聞

「名古屋学院大学で原田さとみさんと学生がフェアトレードイベント」

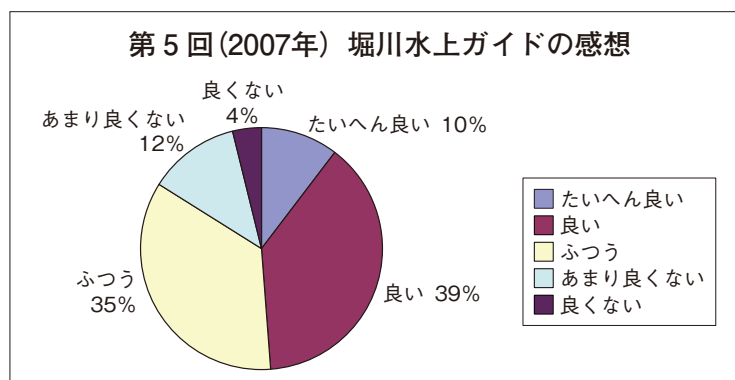
2. 堀川にぎわいづくりプロジェクト

実践授業「地域活性化研究B」では、堀川にぎわいづくりプロジェクトチームによって、(1) 堀川水上バスガイド、(2) インターネット版「堀川検定」企画運営および木曽川流域交流事業、を推進している。

(1) 堀川水上バスガイド

2007年度より、中部経済連合会他主催「堀川ウォーターマジックフェスティバル」に毎年参加し、堀川水上観光バス内で堀川ガイドボランティアを行っている。毎年20数名の学生がガイドとして参加している。

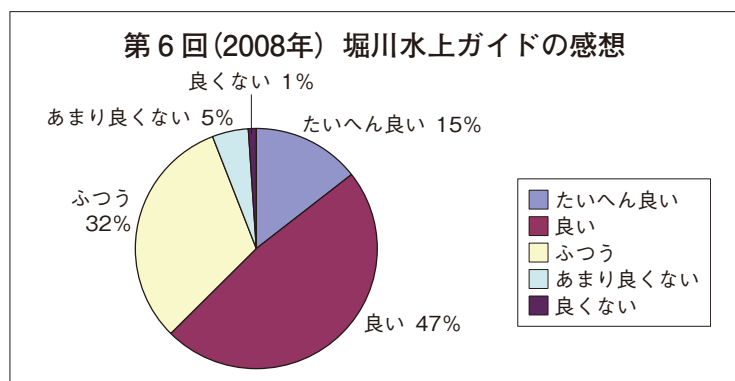
《ガイドに対する評価》



第5回(2007年) 主な自由意見

- ・とても誠実でよかった。
- ・好感がもてた。
- ・声が小さく聞こえなかった。
- ・原稿読んでいるだけ。
- ・予習不足・勉強不足

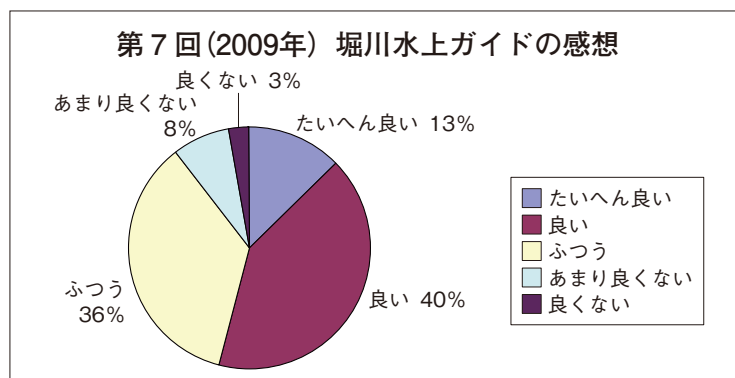
など



第6回(2008年) 主な自由意見

- ・橋などの歴史がよくわかった。
- ・はっきり話してくれたので、わかりやすかった。
- ・よく調べているなあと思いました。
- ・学生のさわやかさに好感を持ちました。

など



第7回(2009年) 主な自由意見

- ・マイクをつかってほしかった。
- ・ガイドさんの勉強不足。
- ・学生さんの一所懸命なガイドがよかった。
- ・プリントを読み上げているだけで声も小さい。

など

2007年度はガイド初挑戦であったこともあり、アンケートでは厳しい意見も少なからずあった。2008年度は、その反省から準備・練習をていねいに実施した結果、昨年の「良い」評価が49%であったのが、今年は62%にまで上昇した。

しかし、2009年度は残念ながら53%に下がってしまった。この一つの要因として、これまで無料であった水上バスへの乗船が、2009年度は有料（500円）となったため、乗船されるお客様の要求されるレベルが高まった可能性が考えられる。このため今後、さらに研修レベルを高める必要がある。

《学生による自己点検評価》

当日ガイドを通じての所感として、「人前に出ることはとても緊張したし難しかった」「勉強不足のところが多かった」などの意見が見受けられる。また、少数だが「お客さんに楽しんでもらえた事が嬉しかった」と答えた学生もいる。

また、自分の成果として感じられた点として、「今まで人前で話すことがなかったのでいい経験になった」「存在しか知らなかった堀川を実際にガイドをして関わった体験は大きな成果だと思う」をあげるものが多い一方で、自分の課題として見出した点・反省すべき点として、「プリントを見すぎってしまった」「事前にもっと調べておけばよかった」「しっかり練習をしてはしっかりと喋れるようにしておけばよかった」の回答が多かった。

それぞれ実践・体験を通じて学ぶことが多かったと思われる。



(2) インターネット版「堀川検定」

堀川にぎわいづくりプロジェクトでは、ガイド練習用に開発した本学C C S「自学自習」機能を活用した「堀川検定」を、2008年度より一般向けH P「N G U学びの広場」にオープンした(<http://noc.ngu.ac.jp/OpenCourse/scripts/JO100.asp>)。また、木曽川がつなぐ山とまちインターネットフォーラムへの参画など、木曽川流域へのイベント展開を始めた。

3. 熱田区情報誌

(1) 熱田区情報誌「なんじゃもんじゃ通信vol.1」作成

交流拠点活性化、交流基盤整備を目的に2008年度「地域活性化研究A」で、熱田区情報誌「なんじゃもんじゃ通信vol.1」を作成した。

学生の収集した情報は、主にキャンパス周辺情報（地域に開放するキャンパスを目指し、住民の利用を促進するため）である。地域活性化研究の授業の一環として、取材活動も実施した。一方、住民の収集活動は、2008年度熱田区生涯学習センター主催講座（名古屋学院大学連携講座）で行っ

た。地域活性化研究の受講生も加わって、キャンパス情報の説明も行った。官・民・大学（教員・学生）のコラボレーションによる情報誌活動が始まった。

なお、情報誌作成に際して、幅広く情報収集することが必要となり、関連するブログを立ち上げ、この情報集積のひとつの成果として「なんじゃもんじゃ通信vol.1」を発刊（2009年1月）した。

（2）熱田産業再発見「なんじゃもんじゃ通信vol.2」作成およびツアー企画運営

2009年度には、まちづくりに産業観光的アプローチを取り入れ、地域の産業を再発見・再評価を行う情報誌とツアーを計画・実施した。

2009年度熱田区生涯学習センター主催講座（名古屋学院大学連携講座）後期講座にて「熱田の産業を再発見しよう」を開催し、その受講生有志と学生によって、あつた再発見ツアーの企画実施（2010年3月25日）と、「あつた再発見―熱田の産業・施設を知ろう！（なんじゃもんじゃ通信vol.2）」を編集・発刊（2010年3月）した。



（なんじゃもんじゃ通信1号写真）



（なんじゃもんじゃ通信2号写真）

《事業一覧》

2008年度	
9/20	堀川ウォーターマジックフェスティバル 堀川ガイドボランティア
10/ 4	あつた区民まつり堀川ガイドボランティア
11/22	陶街道交流フェスティバル
12/14	木曽川がつなぐやまとまち・インターネットフォーラム参加
2009年度	
9/27	あつた区民まつり 堀川ガイドボランティア
10/10	堀川ウォーターマジックフェスティバル 堀川ガイドボランティア
12/ 5	現代GP総括シンポジウム 成果報告会発表
12/13	木曽川がつなぐやまとまち・インターネットフォーラム参加

■地域連携センター活動報告

2007年4月に名古屋キャンパス（名古屋市熱田区）を開設するにあたり、地域連携センターは同年1月、名古屋市・瀬戸市等との地域貢献を目的に設置された。

キャンパス開設後まもなく、地域連携センターは名古屋市とまちづくりを推進していくために協議を開始し、同年10月1日、大学と名古屋市との間で、商店街の振興、観光の推進、まちづくりなどに関する包括的な連携協力協定を締結した。協定に基づき、名古屋学院大学・名古屋市地域連携協議会が設置され、2008年6月には、実際の活動の場となる熱田区において、熱田区まちづくり協議会のもと「大学との協働まちづくり専門委員会」（2009年度よりあったか人まちづくり専門委員会に名称変更）が設置された。

委員会の設置目的は、熱田区の魅力向上、安心安全で快適なまちづくり活動を通して、情報交換や人の交流、事業の実施によって相互に連携協力して、地域社会の発展に寄与することである。高齢化が顕著な熱田区において初めて開設した大学として、本学に対する地域の期待は大きい。本学が市民に対して知的資源の提供・開放を行う一方、まちづくり活動やプロジェクト授業を通して、地域からは学生の学びや人間的成長を支援していただいている。

委員会のメンバーは、区や区民、地元ボランティア団体、本学の教職員・学生からなる総勢27名である。本学からは、教員4名、事務職員2名、学生3名（学生自治会・大学祭実行委員会・マイルポスト店長）が参加し、委員会の3分の1を占め、専門知識をもった大学の教員とアイデアと行動力のある若者に期待する構成となっている。

2009年度の大きな変化として、熱田区日比野商店街におけるまちづくり活動の拠点である、学生運営のカフェ「マイルポスト」を日比野学舎1階に移転した。これによって、現代GP補助期間の終了後も、継続的にまちづくり活動を展開していく態勢を整えたのは大きな成果である。

2009年度における委員会の活動で、本学が直接関わった事業は次のとおりである。

（1）あつたの魅力向上・魅力発信事業

①大学と熱田生涯学習センターとまちづくり連携講座（後期2回）

なごや学講座／地場産業都市から名古屋を考える

～瀬戸・美濃を訪ねて（4回）

なごや学マイスター講座／熱田の産業を「再発見」しませんか

～熱田・産業観光を学ぼう～（5回）

以上の2つのテーマ講座について、本学の教員・教室を中心に開催した。

②熱田区区民まつり

9月27日に開催した。総勢30人の学生が、会場設営、スタンプラリー受付、ステージ演奏、堀川ガイドボランティア、会場警備・清掃ボランティアで活動した。

③熱田区役所各委員会等への参画、協力

昨年に引き続き、熱田区の「熱田区まちづくり協議会」、「まちづくり専門委員会」、「熱田区周遊サイクリングロード検討委員会」や、白鳥庭園の「白鳥庭園運営協議会」に教員・学生が出席した。また、熱田児童館から熱田児童館ホームページの立ち上げを依頼され、学生を中心に協力した。

④全国まちづくりカレッジ2009 in名古屋

11月14・15日に本学が担当校となり開催した。全国のまちづくり活動をしている学生のネットワークとなるために、全国から、まちづくり活動を実践している16の大学・高校のゼミ生・クラブなどが集まった。本学教員がコーディネータ、学生がパネリストとなり、熱の入った事例発表・トークセッションを繰り広げた。また、熱田区をフィールドワークし熱田区の魅力および、あつたまちづくり活動を伝えた。また、マイルポストにて、まちづくりの実績をパネル展示コーナーで紹介した。

(2) 異世代交流・次世代育成事業

①夏休みこどもスポーツ体験教室

8月6～8日に開催した。区内小学校4～6年生各30人が参加。体育館において、希望する「空手・卓球・バドミントン」のうちの1種目を、本学の各クラブ学生および関係者が指導した。

②まちづくりイベントの開催（マイルポスト）

その事業は「親子パンづくり教室」「ミニミニ福祉フェスタ」「カフェサロン」に分けられるが、すべて本学のアンテナショップ「カフェ&ベーカリー マイルポスト」で開催された。「カフェサロン」は、昨年度、創設した“日比野ひとまちネット”が企画・運営を担当することになり月1回開催している。その他、「日比野商店街清掃活動」「ひびのコイまつり参加」「日比野商店街活性化事業検討委員会／日比野タウンズ発行、プランター付ベンチ設置、逸品グルメ企画」など地元商店街の活性化事業を展開した。



③木曽川がつなぐ山とまち インターネットフォーラム

昨年に引き続き、12月13日に白鳥学舎で開催した。堀川ボランティアガイド育成用として大学のCCS「自学自習」でも配信している「インターネット版堀川検定」を一般公開し、そのブースを担当した。

④産地ツアーガイド

熱田生涯学習センターと協同開催の産地（陶磁器）ツアーガイドを、11月21日に瀬戸市へ、11月28日に多治見市で開催した。各日20名の一般市民が参加し、経済学部地域活性化研究Aの学生がツアーガイドとして引率した。ツアーの内容は、有名窯の見学や、現地指導員による作陶体験などを実施した。

※ 地域連携センターは、委員長はじめ、経済学部・商学部・外国語学部・人間健康学部から各2名の教員、および総合政策部（担当部署）と瀬戸キャンパス事務局からの職責事務職員の計12名で構成される。

情報発信

現代GP総括シンポジウム(2009年度)



学園祭シンポジウム(2009年度)



全国まちづくりカレッジ in名古屋2009



文部科学省GP採択シンポジウム(2008年度)



キックオフシンポジウム(2007年度)

文部科学省 現代GP総括シンポジウム（後援／名古屋市）

ものづくり／まちづくり

～“やきもの” でつなぐ地域の未来～

開催概要

日時：2009年12月5日（土） 14時00分～16時30分

場所：名古屋学院大学 名古屋キャンパス白鳥学舎201教室

参加者：141名（大学関係6名、一般50名、学生85名）

プログラム

第1部 現代GP成果報告会

第2部 トークセッション

第1部 現代GP成果報告会

パネリスト／名古屋学院大学学生代表

石井 敬訓さん（経済学部 経済学科3年）

脇田小百合さん（経済学部 政策学科2年）

道家 基彰さん（経済学部 政策学科4年）

鈴木 芳実さん（経済学部 経済学科3年）

松枝 美帆さん（経済学部 経済学科4年）

杉本 成さん（商学部 商学科2年）

コメンテーター／木船 久雄（名古屋学院大学 経済学部長）

コーディネーター／水野 晶夫（名古屋学院大学 経済学部教授）

□成果報告1

陶磁器産地と消費地をつなぐ試み

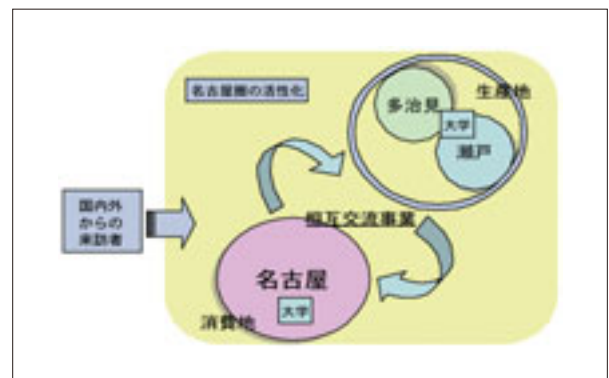
「地域活性化研究A」受講生

石井 敬訓さん

脇田小百合さん



私たちは、瀬戸と名古屋にキャンパスがあるという特徴を活かして、陶磁器の生産地と消費地である名古屋をつなぐことにより名古屋圏の活性化を図ることを目指し、相互交流事業を実施してきました。



●産地から消費地へ

まず、産地（瀬戸／多治見）から消費地（名古屋）へ関係者の方々を招き、2008年秋、白鳥庭園で「陶街道交流フェスティバル」と名づけたイベントを企画・運営しました。

そのイベントでは、美濃焼きの楽しみ方や瀬戸の新しい器作りについてのトークセッション、白鳥庭園のしつらえを活かした美濃焼きの展示を実施しました。また、「瀬戸・究極のせとものプロジェクト」として、カレーの食べやすい器、ろくろ体験、陶器の販売などについて提案しました。なお、陶磁器製の楽器であるオカリナによる演奏も行いました。

●消費地から産地へ

次に、消費地から産地を訪れるということで、瀬戸と多治見へのツアーを実施しました。

[瀬戸ツアー]

- ・実施日：2009年11月21日（土）
- ・ルート：白鳥学舎→ノベルティ子ども創造館→瀬戸蔵→窯垣の小径
- ・参加者：熱田区生涯学習講座への参加者19名、本学学生8名
- ・内容：バスの中では学生が調べたことを紹介しました。子ども創造館では来年の干支の寅の絵付けを体験しました。窯垣の小径では、地元の陶芸作家の水野教雄先生が案内してくださいました。

このツアーを通して、やきものや瀬戸のまちの魅力をますます発見できました。

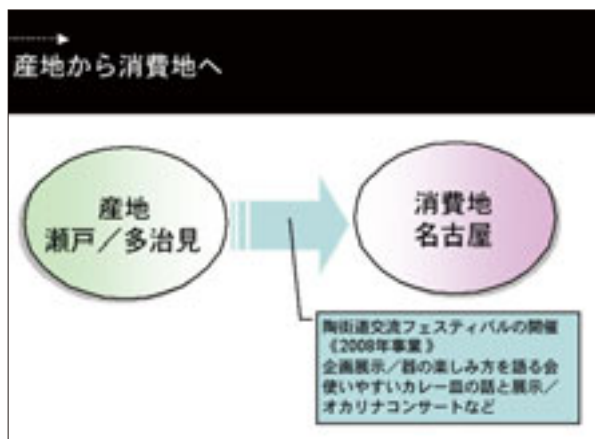
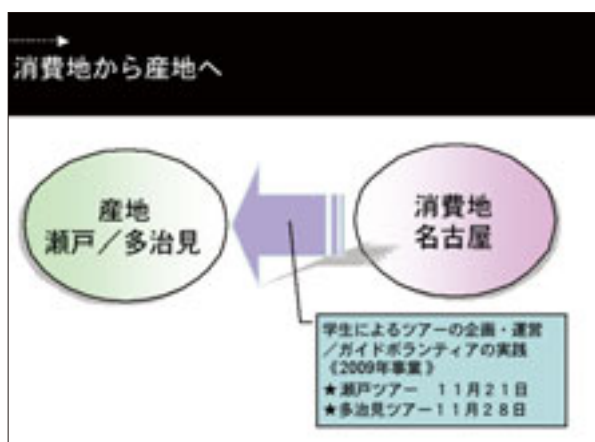
[多治見ツアー]

- ・実施日：2009年11月28日（土）
- ・ルート：白鳥学舎→水月窯→本町オリベストリート（創造館）→さかづき美術館→幸兵衛窯
- ・参加者：熱田区生涯学習講座への参加者20名、本学学生7名
- ・内容：バスでの移動中は、目的ごとに学生がガイドしました。人間国宝の故荒

川豊三氏の長男、武夫氏が主宰する水月窯は、今もなお登り窯を使い続けている貴重な窯元で、実際に作陶しているところを見学しました。七代加藤幸兵衛先生の窯、幸兵衛窯は開窯して200年という由緒ある窯です。

さかづき美術館では、支配人の今川さんにご案内いただきました。参加者には作陶を体験していただきました。幸兵衛先生が直接作陶指導をしておられたので驚きました。

このツアー実施において私たちは、消費地と産地をつなぎ、かつ学生がパイプ役となつてつないだのですが、地域を活性化させるためには今後とも積極的に取り組んでいかなければならないと感じました。産地のことをもっと知り、さらに活発に交流していくことがこれからの目標です。



□成果報告2

堀川にぎわいづくりプロジェクト 「地域活性化研究B」受講生 道家基彰さん



地域活性化研究Bの「堀川にぎわいプロジェクト」について、成果報告いたします。

●「堀川にぎわいづくり」への参加のきっかけ

このプロジェクトへの参加のきっかけは、2006年9月に開催された「第4回堀川ウォーターマジックフェスティバル」です。これに地域活性化研究Bチームは初参加し、「堀川水上バス体験」についてアンケートをとり、その効果を検証しました。

「堀川水上バス体験」というのは、堀川の舟運を体験することで堀川を基とした地域発展の可能性を探ろうということで計画されたイベントです。このときは名古屋城（朝日橋）から名古屋港まで、4隻の屋形船が往復し、1日のみの運行でしたが、延べ450名の定員は満席状態でした。

●「2006年 堀川水上バス体験」アンケート結果

2006年の「堀川水上バス体験」のアンケート結果では、8割以上の利用者から「楽しかった」という評価をいただきました。また、「堀川再生に必要なものは何か」という質問に対しては、多くの方から「水質浄化」という回答をいただ

きました。

さらに、今後の水上バス発展に向けての意見等をお聞きしたところ、実はこの時は観光ガイドが実施されていなかったため、「観光ガイドがほしい」という要望がありました。他には、「船着場にベンチやトイレの設置」、「川の両側を花壇・桜並木に」という要望等が寄せられました。それを踏まえて、2007年度から本学学生による観光ガイドを実施することになりました。

●2007年度の堀川プロジェクト

2007年9月22日に開催された「第5回堀川ウォーターマジックフェスティバル」において、我々は堀川観光ガイドを実施しました。「朝日橋－納屋橋－宮の渡し－名古屋港」を運行し、延べ680名の利用者がありました。

また、10月6日の熱田区民祭りでも子ども向けのガイドボランティアを実施しました。「堀川を使って名古屋港まで運んだ瀬戸物を世界へ輸出した」という歴史などを子どもたちに説明しました。

●2008－2009年度の堀川プロジェクト

2008～2009年度は、観光ガイドのブラッシュアップに力を注ぎながら、熱田区の堀川イベントに協力しました。また、学内のCCS自学自習「堀川」が、一般向けのインターネット版「堀川検定」へと発展しました。これには我々が作った問題も載っています。さらに、新プロジェクト「木曽川堀川交流イベント」ということで、「木曽川がつなぐやまとまち・インターネットフォーラム」に参加しました。

●「堀川観光ガイド」への評価

2007年度の「堀川観光ガイド」への評価については、49%の方が満足してくださる一方で、「勉強不足、原稿の棒読みだ」という厳しい意見がありました。そうした評価を踏まえてガイドの訓練に励んだところ、2008年度は62%の方

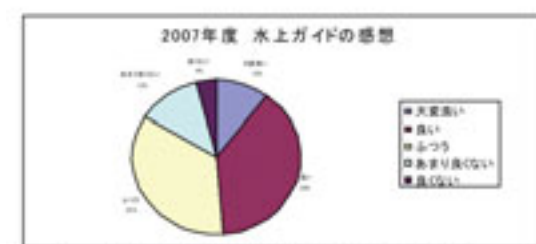
が満足していただきました。しかし3回目の今年は、満足度は53%ということで前回より低い結果となりました。これは、水上バスが有料化したことに伴い、ガイドに求める質が高まったのが原因と思われます。

来年度は、観光ガイドの内容をより深め、多くの利用者に満足していただけるよう活動していきたいと思っています。

熱田区民祭り(2007年10月6日)



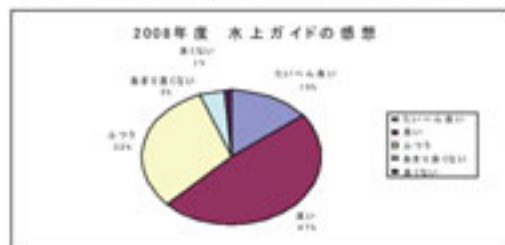
検証と改善(堀川ガイド2007)



アンケートには、勉強不足、原稿棒読みの意見も

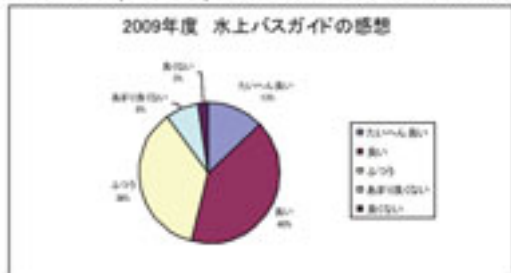
検証と改善(堀川ガイド2008)

良い評価: 49%(2007年度)→62%(2008年度)



検証と改善(堀川ガイド2009)

良い評価: 49%(2007年度)→62%(2008年度)→53%(2009年度)



□成果報告3

マイルポスト まちづくり・ 地域連携活動について ーこれまでとこれからー カフェ&ベーカリー マイルポスト 杉本 成さん



「マイルポスト まちづくり・地域連携活動について ーこれまでとこれからー」と題し、我々が携ってきたまちづくりについてご紹介します。

2007年4月、名古屋学院大学は瀬戸市から名古屋市熱田区に3学部が移転しました。同年10月には名古屋市と本学との間に地域連携協定が結ばれ、熱田区でのまちづくり活動が本格的にスタートしました。

2008年1月、日比野商店街の空き店舗を利用して、我々の活動拠点となる「カフェ&ベーカリー マイルポスト」がオープンしました。そして2009年9月、マイルポストはより広いスペースを求め、本学の日比野学舎1階に移転しました。

●マイルポストの主な活動

現在、マイルポストの運営母体となっているクラブのメンバーは約30名います。

マイルポストでは、カフェ営業のほか、フェアトレード商品や「せともの」、「きそもの」を店頭販売したり、イベント開催を通じて地域貢献活動やコミュニティビジネス推進など、さま

ざまな活動を展開しています。また、エコへの取り組みの一環として、EXPOエコマネーセンターと協働でエコポイントを発行しています。

2009年11月14～15日には名古屋学院大学主催で「全国まちづくりカレッジ2009 in名古屋」が開催され、マイルポストも参加しました。マイルポストのようなまちづくり活動をしている全国の団体が一堂に会するイベントで、今年で10回目になります。北は北海道から南は佐賀まで、14大学148名の学生や教職員が参加し情報交換などいたしました。

●協働まちづくり事業

次に、さまざまな機関との協働によるまちづくり事業をご紹介します。

- ・熱田区との協働事業として、「親子パン作り教室」(4回／年)、行政出前講座の「あったか交流カフェサロン」(1回／月)を開催しています。
- ・熱田区社会福祉協議会との協働事業として、「あったかミニミニ福祉フェスタ」(2回／年)を開催し、熱田区内の助産施設で作ったものを販売したり、イベントを実施しています。
- ・日比野商店街との協働事業として、毎年4月に商店街で開催される「ひびのこイまつり」にはマイルポストも出展したりお手伝いしています。また、毎月8日の朝8時から、「8の日清掃」と称し、日比野商店街や地域の方と学生と一緒に日比野商店街周辺の清掃を行っています。また、2008年9月には、商店街の方や学生、そして熱田区など行政の方と一緒に滋賀県長浜市の黒壁スクエアへ視察旅行に行きました。そこで現地の方たちの講演を聴いたりフィールドワークを行い、日比野商店街のさらなる発展を関係者一同再確認しました。なお、来年10月には白鳥地区にある名古屋国際会議場でCOP10が開催されます。日比野地区はホストエリアになるので、日比野商店街、マイルポスト、学生も一緒になって何かしらの事業を展開していきたいと考えて

います。

●日比野商店街活性化に向けて

2009年度、日比野商店街は「名古屋市くらしとにぎわい事業」と「愛知県・活性化モデル商店街」に選定されました。それを受けて、情報紙「ひびのタウンズ」の発行、日比野逸品グルメ、オリジナルプランター付きベンチの開発など、現在さまざまな事業が進んでいます。月に1～2回ほど商店街の方々と学生で会合を持ちながら、今後も商店街のさらなる活性化に向けて活動していきたいと思っています。



大学・学生のまちづくり活動推進

2007年8月、文部科学省現代GPF地域創成プログラム選定
2007年10月、名古屋学院大学と名古屋市との地域連携協定
熱田区でのまちづくり活動が本格的に開始



熱田区・大学との協働まちづくり
専門委員会

まちづくりカフェ「マイルポスト」

2008年1月、学生運営のお店
「カフェ＆ベーカリー マイルポスト」オープン



通常のカフェ営業の他、
フェアトレード商品の取扱、
イベント開催などを通じた
社会貢献活動を推進

熱田区との協働まちづくり事業

親子パン作り教室
(年4回開催)



あったか交流カフェサロン
(月1回開催)



ディスカッション

1. さまざまな地域活動を通じて、何を得たか



【石井】 「人に伝える事の難しさ、楽しさ」を学びました。授業は人から伝えてもらうばかりですが、「地域活性化研究」に参加することで初めて自分から人に伝えることを経験しました。それは非常に難しかったけれど、やってよかった、楽しかった、と思います。

【脇田】 私が大切だと思ったのは、「積極的」な態度です。受身で授業を受けるだけでなく、自分で調べたり実際に活動するなど、自分から食らいついていくぐらいの姿勢で何かを学ぶ、そして発信する姿勢の大事さを学びました。

【道家】 僕は、「糸という考え」を得ました。「人と人の関係」ということを考えたときに、「糸」を思いついたわけです。同じような考えがまとまれば強靱な糸になるし、いろいろな人の考えが繋がって、やがて布になり、より大きなものになると思います。

【鈴木】 「堀」ということです。私は静岡出身で、名古屋のことも堀川のこともよく知りませんでした。それで、通学路として何気なく堀川の横を歩いていましたが、「掘ってみたら何か出てきた」という感じで、「こうした歴史があってこの川が今流れているのだ」ということを知ることができました。目を向けると発見が

あることがわかりました。

【松枝】 私は、「動くことの大切さ」を学びました。イベントを実施する際にはいろいろ問題が発生することもありましたが、動くことで新たな発見をしたり、達成感も満足感も得ました。それは講義では得られないことで、動くことによって身についたと思います。経験してみないとわからない、ということです。

【杉本】 私は、「人と人のつながり」です。もともとはマイルポストに興味を持って参加したのですが、そこで「まちづくり」ということを知りました。活動の中で交友関係も広がり、熱田区や名古屋市、社会福祉協議会の皆さんと親しく話せるほどのつながりもできました。まちづくりだからこそ、そういうつながりができたのだと思います。

2. 今後、活動をどのように発展させていきたいか

【石井】 僕は、「他のジャンルに幅広く」です。今年度は瀬戸のやきものについて取り組みましたが、この経験をいろいろな地域の別のものにも活かしたいと思っています。

【脇田】



これは、「学校に窯を造った」という絵です。学生がより理解を深められる仕組みを学校につくりたいと思います。例えば、窯を造って部活やサークルで取り組めば、より一層学生の理解は深まると思います。

【道家】 私は、「サークル化」です。今回、堀川のガイドボランティアを実施しましたが、学生それぞれの考えや企画を活かすには、授業の一環では限界があります。ならば、「学生がつくる」ということでサークル化してはどうか、と考えました。

【鈴木】 私は、「チーム」として働きたいと思いました。ボランティアとしてガイドをするだけでなく、企画の段階から携って、ボランティアや学生という立場ではなくて、堀川を盛り上げるチームとして取り組んでいきたいと思っています。

【松枝】 私の夢は「フェアトレードタウン」を名古屋につくることです。マイルポストでの活動を通して、フェアトレードに興味を持ちました。さらにフェアトレードを普及させ、多くの方々にフェアトレードのものを買ってほしいと考えています。

【杉本】 「マイルポストのさらなる発展→連携の強化」ということで、熱田区や名古屋市との連携強化も大事ですが、例えば当地域にある国際会議場などの施設とも連携して事業展開できるといいと思っています。

3. 講評

【木船】



実体験に基づいた意見、感想というのは、座学や本から学んだ時とは全く違う気がしまし

た。新しい目標に向けて邁進していただきたい。大学としてはそれを吸収して、発展させられるものは教育プログラムの中に取り込んでいきたいと考えています。

【水野】



失敗は多々ありますが、失敗して自信なくして終わりではなくて、そこから課題を見つけて次へつなげていこうという思いを感じました。

第2部 トークセッション

パネリスト／河村たかし氏（名古屋市長）

加藤幸兵衛氏（陶芸家 七代）

中島 幸子氏（名古屋リビング新聞社 リビング編集長）

コーディネーター／古池 嘉和（名古屋学院大学 経済学部教授）

【古池】



本学経済学部は、瀬戸キャンパスにある頃から陶磁器に関する調査・研究、あるいは商店街活性化への取り組みなど、ものづくりとまちづくりに関する活動を進めてまいりました。そして3年前、キャンパスが一部名古屋へ移転したのをきっかけに、より広域的な視点を持ち、本学が中心となって名古屋と瀬戸・多治見地方をつないでいくための活動を始めました。そこで、本日は生産地の代表として多治見を取り上げ、「いかに陶器の産地である瀬戸・美濃地方と消費地である名古屋市をつなぐことができるか」というテーマで、パネリストの皆さんからアイデアを頂戴したいと思っています。

では、トークセッションに入る前に、多治見にある市之倉という陶磁器産地について、簡単に紹介させていただきます。

■**陶の里 市之倉**／市之倉は、本学の瀬戸キャンパスからすぐ近くにある、非常に自然豊かな窯元の集落です。50軒ほど窯元がありますが、歴史はたいへんふるく、2千年以上前から続いているとのこと。

■**幸兵衛窯**／市之倉には、開窯200年という、美濃でも最もふるい窯元の1つである幸兵衛窯があります。人間国宝の加藤卓男先生の窯元でもあり、最近ではミシュラン・グリーンガイドの2ツ星を獲得し話題になりました。

■**市之倉さかづき美術館**／市之倉は「さかづき」の産地です。市之倉さかづき美術館は8年ほど前に開館して以来、多治見の産業観光の拠点となっています。地元の窯元、あるいは商社の有志で運営している私立の美術館で、1500点ほどのさかづきが展示されています。

■**陶器祭**／陶器祭は毎年4月と10月に、市之倉の窯元が集まって開催します。窯元めぐり、工場見学、お茶会など、さまざまな催しがあります。

■**セラミックパークMINO**／セラミックパークMINOは磯崎新さんの設計による、2002年に開館した陶磁器に関する複合施設です。岐阜県現代陶芸美術館もこの中に入っています。

■**国際陶磁器フェスティバル美濃**／美濃で開催される国際的な陶磁器の展示会です。トリエンナーレということで、1986に第1回が開催され、2008年で8回目を数えます。

■**JR多治見駅**／2009年11月、JR多治見駅の駅舎が新しくなりました。外観のタイルは地元の産品などが利用されていますが、最大のポイントは駅舎内にある幅10m、高さ4mの陶壁です。加藤幸兵衛さんの作品で、「響き合う声」というテーマです。

1. 陶磁器産地と名古屋の関係は？

【古池】 では、トークセッションに入ります。3人のパネリストをご紹介します。陶芸家の加藤幸兵衛さんです。続いて、河村たかし名古屋市長です。そして、消費者を代表いたしまして、名古屋リビング新聞社編集部長の中島幸子さんです。

さて、名古屋市の周辺にはたくさんの窯業地がありますが、それらの産地と名古屋をうまくつなぎ交流することによって、この地域をもっともっと元気にするためのアイデアをいただきたいと思っています。河村市長、やきもののご関係はいかがですか。

【河村】



私は大学を出た後、瀬戸窯業高校の専攻課程ができた時に1期生として入りました。昼間はうちの仕事をやっていたので卒業はできませんでしたが、1年半ぐらい通いましたね。死んだ親父はやきものが好きで、瀬戸の赤津の加藤舜陶さん、河本五郎さん、鈴木青々さんらと仲が良かったんです。私もやきものは好きですよ。

●かつて名古屋では、美濃の白磁に絵付けをしていた

【加藤】 ありがとうございます。やきものの応援団長としてこれほど心強いことはないです。かつて名古屋の東区は、やきものの絵付け加工の一大産地だったんです。美濃で作られた白磁が東区に持ち込まれて、明治の頃から絵付

けがされていました。時代を象徴するような非常に繊細な上絵付けの技術があって、輸出用のやきものが生まれ、それが舟運で名古屋港に運ばれて全国に出て行きました。ところが、現在は絵付け工場も大幅に減り、産業としてほとんど形が残っていません。もう一度なんらかの形で蘇らすことも可能性としてはあると思いますが…。

【河村】 東区には名古屋陶磁器会館という古い建物もありますね。この地域は今でこそ自動車威張っとなりますが、陶磁器産業というのは輸出産業の原点ですからね。

【古池】 歴史的にはかなり関係の深い瀬戸・多治見と名古屋ですが、最近は生産面ではつながりが少なくなってきました。そこで、文化とか交流という側面から何か展開できないでしょうか。中島さんは、多治見などは生産地としてどう思われますか。

【中島】



多治見は心落ち着くまちです。ただ、点として何かあるだけで、「やきもののまち」という面的な広がりがわかりにくいまちですね。ギャラリーなど1つ1つを見れば本当に素晴らしいのに、もったいないと思います。それに、駅前も、またオリベストリートまで歩く道も寂しい。駅を降りた瞬間に「陶磁器のまちに来た」というワクワク感がもっと感じられるといいですね。

【加藤】



それは、多治見を語るときには最初に指摘されるべき点だと思います。

美濃は巨大な生産地であるがゆえに、産業としては非常にきめ細かく組織化されており、原材料者から卸売業者までありとあらゆる業者によるネットワークができています。ただ、残念なことに、彼らは消費者をまったく意識していなかった。消費者と接点があるのは最終的な商社だけで、多治見も瀬戸も一般社会とのつながりは非常に薄かったわけです。ただ、昔はそれでよかったけれど、今日のように産業観光とか相互交流という話になると、これが弱点になるわけです。そういう意味では、東海地方では常滑、全国的には有田、備前、信楽は先進地と言えます。これらは産業基盤が小さいゆえに早くから観光という側面に力を入れてきましたからね。

【古池】 多治見駅に降りると、「こっって本当に窯業地なの？」みたいな感じですよ。

●名古屋駅を地場産業の情報発信拠点にしたい

【加藤】 まったくそのとおりです。短時間しか滞在されない観光客に対しては、駅前に販売所なり陶芸館なり歴史館なりが2つ3つないと「やきもののまち」としてはまずいと思うけれど、今はまったくありません。

ということで今日は、日本一暑い多治見から、日本一熱い名古屋市長さんをお願いしようと思っています。名古屋は愛知県の県庁所在地とい

うだけでなく、東海3県のことも考えていただきたいんです。名古屋周辺にはいろいろな地場産業がありますが、そういうところにも積極的な働きかけをしていただきたいと思います。市之倉には大きな団地があって4~5千人住んでいますが、その8割は名古屋に通勤しています。私たちは「かくれ名古屋市民」ですからね（笑）。

【河村】 うまいこと言うね。名古屋は陶磁器のメッカとして少し考えんといかんね。

【加藤】 まず、名古屋駅のコンコースに多治見の観光案内所を設置していただくことを提案します。名古屋駅は名古屋市民のものだけではありません。

【古池】 名古屋駅というのは地域の玄関なので、いろいろな情報を発信していく場として、多治見だけでなく常滑や四日市など周辺の陶産地について積極的に紹介して、名古屋からそれらの地域へ日常的に出かけていくようになるとういいますね。

【中島】 せっかくいろいろな文化があるのに、発信されないのは本当にもったいない。絵付けの技術があることも知られていないわけですよ。何とかしたいですね。

【河村】 そうだね、名古屋駅が三重も岐阜も含めた情報発信の拠点になるようにね。



2. やきものの文化を名古屋に浸透させるには？

【古池】 この地域のやきものは日常的に使われていますが、あまりに身近過ぎて意識されていないように感じます。もっと浸透させるようなアイデアはありませんか。

●ものと人とまちをつなぐ「こと」が必要

【加藤】 名古屋学院大学が取り組んでおられる現代GPには「もの」、「人」、「まち」という3つのキーワードがありました。それで、この3つをつなぐもの、つまりバインダーが必要だと思いますが、それは「こと」だと私は思っています。「こと」というのは、人間が考えたり動いたり関係を持ったりする行動の足跡ですが、お祭りとかイベントとか勉強会という「こと」をやきものというステージの上でどのように展開していくかを提案できるといいですね。作る側として提案するなら、作陶体験。ユーザー側なら、料理と器をコーディネートするイベントや、新しい器を積極的に活用するパーティを開くというのはどうでしょうか。また、お茶やお華の世界は当然やきものを媒介にしています。そういうことを積極的に進めることによって、「人」、「もの」、「まち」が結束していくように思います。

●学校給食の食器を陶磁器にする

【中島】 私としては、名古屋市の小・中学校の給食の器を全部、陶磁器に替えていただきたいですね。小さい頃から陶磁器に触れるようにすることは大切だと思います。

【古池】 陶磁器に触れて育つことは、「伝承する」という意味でも大切なことだと思います。最近では学生たちを見ていると、トレイに盛ったままものを食べたりしますからね。地域として、「やきものの文化を大事にしているよ」という発信力があるといいですね。

【河村】 この地域は何故こんなに「ものづくりの地域」と言われるのか。実は、戦災で焼けた名古屋城は国宝第1号だったんですが、木曾のヒノキがあったからこそなんです。当時は非常にいい森林があって、そこから木材が木曽川を下ってきたわけです。木曽という木材のベースがあって、そこでものづくりの原点が生まれたということなんですね。

【加藤】 やきものは土が材料です。土といっても、名古屋の土、多治見の土、ヨーロッパの土、みな違います。土が違っていると、そこに生える植物が違ふ。植物が違ふと、人間の食べ物が違ってくる。結局、文化が違ってくる。木のある地域は木造家屋を造る。木のない地域では石や泥の家を造る。つまり、人間は土から恵みを受けて生活態度を決めているわけです。それが文化の土着性ということで、最も典型的な例がやきものです。だから、やきものを知ることは、地域の風土を知ることになる。また、三重県には林業があり、高山には温泉があるなど、その土地にしかない風土があります。それを知るとは、逆に言うと、自分の風土を見つめ直すことになりますね。それは非常に大切なことだと思います。



3. この地域をものづくり圏域としてアピールするためには？

【古池】 この地域はものづくりの文化が凝縮されています。その真ん中にある名古屋市はデ

ザイン都市宣言をし、最近はユネスコ・クリエイティブ・シティズ・ネットワークにも加盟し、「デザインという切り口でものづくりを高度化するまちづくり」という視点も持つようになっていきます。ならば、名古屋市が拠点となって、デザインという切り口で引っ張っていくイメージを描きたいのですが、いかがですか。

【河村】 名古屋というと、質素で泥臭いイメージ。あんまりデザインということを標榜する土地柄ではないと思うんだけど……。むしろ、ものづくりの技とかならわかる。名古屋は質素で真面目そうな、侍のイメージ。武家文化の雰囲気を感じるけどね。

【中島】 名古屋の人はこつこつとやるけれど、すごくPR下手だと思います。

【加藤】 まさに職人気質ということです。からくり人形、お菓子、むすめ歌舞伎など、1つ1つは非常に小さなグループだけど、地道に活動して大地に根を張っている。ただ、そういう人たちは発信力が弱い。そういうところに光を当てることが大事だと思います。

●玄関口の名古屋駅は大事

【河村】 名古屋駅の持つ意味合いは大きいね。

【加藤】 その家の雰囲気は玄関を見ればわかりますよね。この地域の第1番の玄関口である名古屋駅を、是非すかつとした、しかもそこに住んでいる人の心映えが推し量られる玄関にしていきたい。

【古池】 名古屋駅は機能的ではあるけれど、外から来た人に対するもてなしという点ではまだ十分ではないと思います。

さて、掘り起こせばまだまだ名古屋市も、また名古屋周辺もいろいろな資源が出てくると思います。それをいかにうまく編集して伝えるか。

中島さんはそういう役割を担っておられるわけですね。

●身近な情報を伝えることが大切



【中島】 今はインターネットが普及しているので、欲しい情報にはすぐに行き着けるわけですが、私たちはネットに入る前の情報を大事にしたいと思っています。例えばリビング新聞を見て、「今回はカレーの特集か。カレーのお店を調べてみよう」という段階があってネットに入れるように、アナログな部分を大事にしながら市民目線に立った情報をお届けしたいと思っています。

実は、「タジン鍋」というモロッコの家庭料理で使うスチームポットの特集をしようと思って調べていたら、多治見でたくさん作っていることがわかりました。しかも、海外製よりもリーズナブルで色もかわいいんです。そういうものを身近なところで作っているということを、やはり皆さんに伝えていかなければいけないと思っています。

【古池】 産地と消費地がお互いに情報交換することが必要だと感じています。お祭りとかイベントだけでなく、日常的に行ったり来たりできるといいんですが、受け入れ側の産地の方には多少努力が要るかもしれませんね。

●よそから訪れる人を受け入れる態勢づくりが必要

【加藤】 市之倉は産業のまちなので土日は休

みなんです。ただ、よそからお客様が来られる時代に土日に休んでいては話にならないので、土日もショップぐらいは出そうということで、少しずつですが変わってきています。しかし、信楽、備前、有田に比べたらまだまだ遅れている。いわゆるビクターズ産業とか産業観光という言葉に代表されるような受け入れ態勢が必要だと思います。これまでは問屋の方だけ向いていれば飯が食えた窯元が多いので、まちづくり整備みたいなことに関しては二の足を踏んでいる人が多いんです。

4. やきものの文化を存続させるためには？

【会場から】 幸兵衛先生にお尋ねします。僕は瀬戸の生まれで、やきものが好きです。窯業が衰退していることは理解していますが、今後、日本の窯業はどうすれば発展・振興していくのか。先生のお考えとか実際になさっていることをお聞かせください。

【加藤】 美濃・瀬戸は大量生産のまちだったため、大量生産が求められる時代はよかったのですが、今や大量に作っても売れません。本当にいいもの、こだわりのあるもの、よそにないいものが求められる時代です。では、どうするか。

私は、「歴史と先人に学ぶ」、「大自然の真理に深く頭を垂れる」という2つを作陶のモットーとしています。この2つからは、ありとあらゆることを汲み取ることができると思います。やきものも、自分たちの文化や歴史や足元に根ざしたものを作っていくということです。これは非常に抽象的なことですが、大切なことだと思っています。

【河村】 ドイツなんかだと、おばあちゃんが使っていたコーヒーカップをずっと大事にしているでしょう。

【加藤】 ヨーロッパでは結婚して新しい家をつくると、新しい家のシンボルとして食器のフルセットを購入します。これが代々伝わっていく「おばあちゃんの器」です。それで、例えばウェッジウッドのコーヒーカップが1つ欠けたとしても、200年前のデザインのもので今でも作られていて補充がきくんです。会社が存続する限りは作り続ける、という会社の大黒柱といえる商品のラインナップがあるわけです。

【古池】 今後は大量生産ではなくて、デザインなり付加価値が大事だということですね。特に名古屋という大消費地に住む人たちがそういう文化を理解して、周囲の生産地のものを評価して、付加価値の高いものを日常的に使って暮らしの質を高めてくことが広まっていけば、今の話とつながっていくと思います。何かいい方法はないでしょうか。

●やきものに触れさせることが必要

【河村】 やはり教育が大事だと思う。幸兵衛さんのところに生徒を行かせるとかね。

●やきものを媒介にして「こと」を起こす

【加藤】 どうしたら皆さんがやきものに関心を持ってくれるか。やきものを中心にして人間交流の輪が広がっていくことは非常に重要で、そのための5つのキーワードを申し上げます。それは、「見る」、「買う」、「それで食べる」、「体験する」、「使う」です。少なくともその5つの切り口からやきものを捉えると、先ほどお話しした「こと」が生まれてくるんです。これをより細かく分析してイベントや交流につなげられるといいですね。



●食育の中で、やきものを取り上げる

【中島】 現在これだけ「食育、食育」と授業でも取り上げられているにもかかわらず、そこに器が出てこないのはおかしいですね。

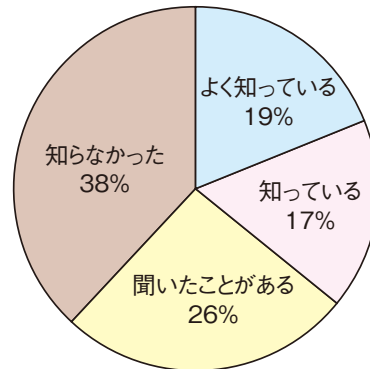
【古池】 この地域には、やきもの以外にも、東濃の木材、岐阜の繊維・和紙、さらに四日市の環境・技術など、種々のものづくりの系譜があります。それで、我々は名古屋を中心にそれらの交流ネットワークの絵を描きました。そして、まずは「やきもの」について3年間取り組んできたわけですが、実はこれからが大事だと思っています。名古屋と周辺部をつないで元気にしていこうというとき、我々には何ができるのでしょうか。

【加藤】 先ほど学生さんの発表をお聞きして、学生さんたちがここまで地域のことに踏み込んで関わりを持っておられることに驚きました。東海3県にはまだまだこの地域にしか味わえない面白い景色、食べ物、風土があると思います。是非、今後もフィールドワークを続けて、書物からは味わえない自分の肌で感じた現場の印象を大切する姿勢を堅持していただきたいと思います。

【古池】 今日は、具体的に名古屋駅のあり方について話が出ました。名古屋駅が変われば、そこを拠点として東海3県に情報が広まっていくことも可能だと思います。そのなかで我々としてはさらに頑張って、地道にまちづくりともものづくりに励んでいきたいと思っています。今後ともご協力をお願いいたします。ありがとうございました。

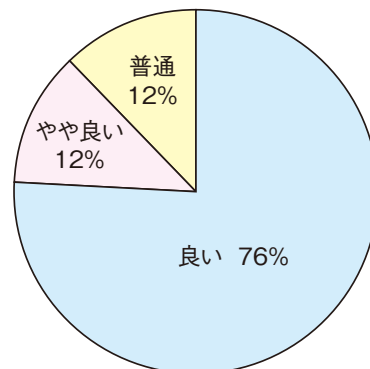
アンケート集計

1. 文部省が行っている「GP」の活動について

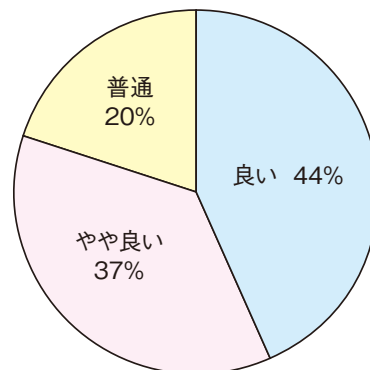


2. 当シンポジウムに参加した印象

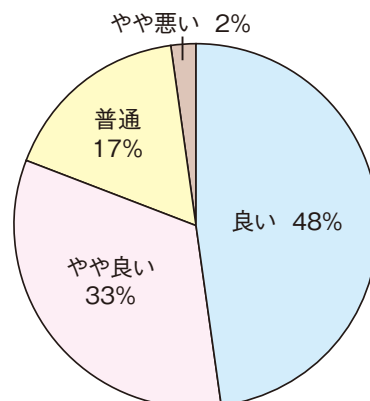
①シンポジウムのテーマ



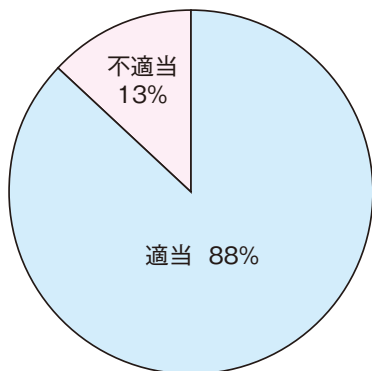
②全体の構成



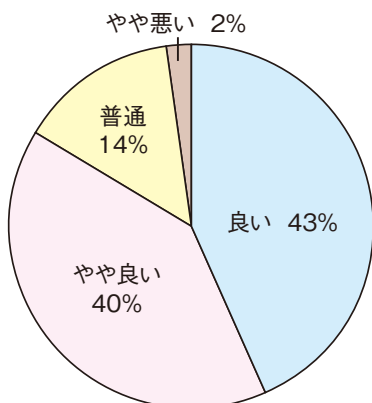
③全体の運営



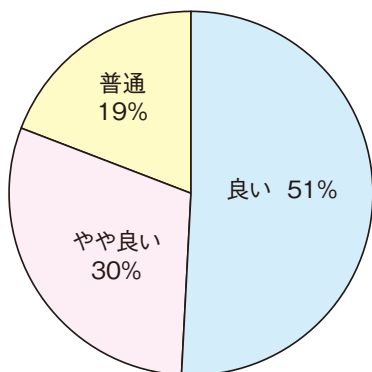
④フォーラムの開催時期



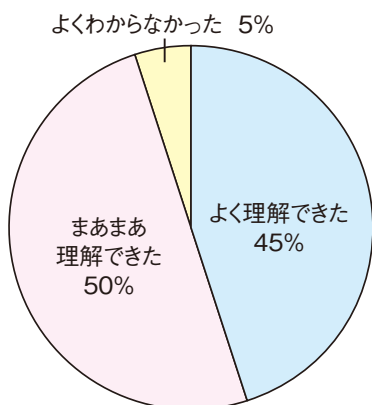
⑤現代GP成果報告会の内容



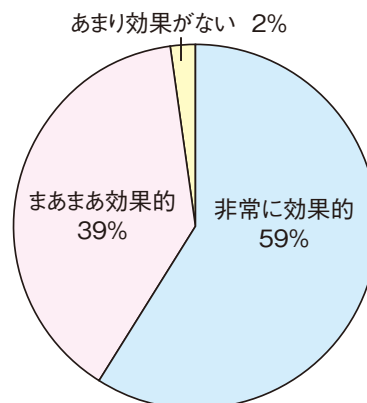
⑥トークセッションの内容



⑦当シンポジウムに参加して、本学の現代GPの取組を理解することができましたか



⑧本学の取組は地域活性化に貢献しているでしょうか



3. 自由記述

- ・名古屋学院大学自体について知る事ができた。
- ・GPの活動について初めて知った。是非行政に働きかけて継続してほしい。
- ・学生が非常に頑張っている事や、新しい授業のあり方を知った。
- ・産・学・民の連携が大きな可能性を秘めていることに対して益々期待する。
- ・今後もこのような機会を設けてほしい。
- ・学生と地域とのかかわりの実感を知ることができた。また市長の生の声を聞くという貴重な体験ができ大変良かった。
- ・瀬戸に住み、まちづくりにかかわっていきたいと思っているので、学生の話、トークセッションでの話を聴き刺激を受け、いろんなアイデアをいただくことができた。
- ・マイルポスの活動が商店街活性化にとどまらず他の地域の課題解決に貢献が広がることを願う。
- ・「地域活性化」の一環で名古屋近郊地域を含めた名古屋圏として捉えてもらい、是非わが町の商店街の空き店舗で「マイルポスト」の様な取組みをしてもらいたい。
- ・学生の活動内容について興味があったため、発表時間をもう少し長くして欲しかった。

まちづくり論公開講座 学園祭シンポジウム 名古屋の魅力再構築する ～白い街から、面白いまちへ～

開催概要

日時：2009年10月31日（土）14時00分～16時00分

場所：名古屋キャンパス白鳥学舎6階 602教室

参加者：94名（大学関係51名、一般30名、学生13名）

プログラム

基調講演：「時代を貫くナゴヤの心技体とナゴヤの魅力」

講師 北川 啓介氏（名古屋工業大学大学院准教授）

トークセッション：

パネリスト 原田さとみ氏（タレント・大ナゴヤ大学副学長）

井村 里美氏（財団法人名古屋都市センター 調査課研究主査）

北川 啓介氏（名古屋工業大学 大学院准教授）

古池 嘉和氏（名古屋学院大学 経済学部教授）

モデレーター 井澤 知旦氏（株式会社都市研究所スパーシア 代表取締役）

基調講演

「時代を貫くナゴヤの心技体とナゴヤの魅力」

1. ナゴヤの文物多様性

●「白い街・ナゴヤ」の戦後の文化



学園祭とハロウィンの為、仮装で講演

今日は学園祭でもありますし、時期的にハロウィンですので、こういう恰好をさせていただ

きました。

講演は大きく3つに分けてお話をさせていただきます。1つめは「ナゴヤの文物多様性」。ナゴヤが生み出した日本一や日本初、世界初というモノやコトやトキについてお話しします。2つめは「ナゴヤ400年の遺伝子」。これからのナゴヤを考える際に、300年～400年前から今に至る文化や風習を考えます。3つめは「ナゴヤ生まれの寄生の実践」。私がナゴヤで実践している建築や、まちづくりなどのプロジェクトを紹介します。

私は名古屋市北区の和菓子屋に生まれました。幼稚園から小学生ぐらいまで、父の運転する配達に乗って料亭や遊郭や芸小屋を回っ

ていましたが、だんだん料亭がなくなっていきました。そのかわりに白い大きな建物ができ、その中に料亭が入ってしまいました。30年ほど前、ナゴヤの街並みが少しずつ消えてしまうのを、小学生ながらに感じていた記憶があります。

最初のテーマは「ナゴヤの文物多様性」について。100m道路は戦後に防火帯という目的をもって作られ、石原裕次郎さんが歌った『白い街』のような光景が繰り広げられていました。石原裕次郎さんは『白い街』を、ギリシャ神殿のように美しい街というふうに歌いました。でもナゴヤの人は、そっけない「白い街」と捉えたと言われています。ナゴヤの100m道路の上に高速道路が走っているというのも特徴です。

日本には国宝のお城が3つありますが（姫路城・松本城・犬山城）、消失前の名古屋城はランク付けとしては一番高いものでした。それが昭和20年の名古屋大空襲で焼けてしまい、今は鉄筋コンクリートでできています。エレベーターのあるお城と言われますが、建築の観点からすると、これほどの重要文化財を鉄筋コンクリート造で作った建物としては、戦後最初期のものとしてはとても評価が高いです。ですから現在の名古屋城も1つの価値を持っているということです。

JRセントラルタワーは、世界一大きな駅ビルということでギネスブックにも登録されています。100m道路や地下街や駅の大開発といった都市基盤を作っていくという手法は、今も名古屋に根付いているわけです。

パチンコを普及させた第1号と言われている正村ゲージは西区の浄心にありました。戦後、身の回りを見てみると、ベニヤ板とガラス板とクギとベアリングの玉しかないの、それを使って一般大衆のみなさんが楽しめるようにということで考えられたものです。

東海地方には全国の7割の質屋さんが集まっています。日本で唯一の質屋組合が大須にあります。名古屋仏壇もナゴヤ独特の文化で、300

年前ぐらいから続いている冠婚葬祭の1つです。

● “ナゴヤらしさ”を表すモノやコト



ここからはナゴヤ独特のモノにフォーカスを当てていきます。ナゴヤの大正琴は、琴にタイプライターの原理を使って弾きやすくしたと言われています。楽譜も数字が書いてあるだけで、そこを押すだけでどんな人でも音楽を奏でることができるということで、琴が一般大衆に広がった1つのきっかけになっています。

ナゴヤ初のモノをいろいろ紹介します。温水洗浄便座はナゴヤのイナックスが一番はじめに国内で販売したと言われています。万年スタンプ、シャチハタのモノづくりもナゴヤが生んだプロダクトです。コンタクトレンズを日本で初めて大量生産したのはメニコンです。このように見ていくと、ナゴヤは私たちの日常に近いモノを発明してきました。

白菜はナゴヤが生んだものということをご存知でしょうか。明治40年ごろ、名古屋市中川区の野崎徳四郎さんという方が改良してできました。それまでの白菜は葉が開いた状態だったので、霜にあたると枯れてしまいました。ほんのちょっと工夫を加えて球の状態にしたことで、今の白菜ができたわけです。全部変えてしまうわけではなく、自然のものに、ほんのちょっとだけ仕掛ける、変えるだけで、そのものが持っている価値をほんの少しだけ上げています。愛知県は食材の地産地消率が、北海道に次いで第2位です。ほんのちょっとだけ栽培や養殖をす

ることで、地元のものを地元の人が食べるという習慣が昔から根付いています。

美容整形でも、ほんのちょっとだけ変化を与えてあげること、みなさんハッピーになるわけです。美容整形の特許の数は、東京と比べて圧倒的に愛知県が多いです。

ナゴヤは蒸しものがけっこう有名で、日本一大きな和菓子「蓬莱山」があります。日本一大きな和菓子ということは、世界一大きな和菓子になります。高さが約50cmで、通常の和菓子は45gぐらいですが、これは約8kgあります。通常の上用饅頭は15分ぐらいで蒸せますが、これは中まで火を通さないといけないので24時間かかります。ただ蒸せばいいというわけではなく、縁起ものですから、しずくが落ちたり割れが生じたりしないよう15分単位で圧力を抜いて、24時間調整しながら作っていきます。いろいろ・ないろも蒸しものの一種ですが、ナゴヤの和菓子職人は蒸しものがとても上手です。

ナゴヤを象徴するコトについてお話しします。愛知県警は警察の不祥事として表立って出てくるものは、毎年日本一です。たとえば、愛知芸大の中に勘違いで標識を付けてしまい警察の人が摘発されたとか、警官が居眠りの隙に留置人病院から逃走などといった話が中日新聞によく出てきます。警察の不祥事が多いのは確かですが、よく見ていくと再犯率がすごく低いです。つまり、愛知県警の人は更生させる術というのを持っているのです。愛知県警察以外の警察は通常、少年警察と交通警察とは別々です。つまり、暴走族を取り締まるのは交通警察で、それを更生させる少年警察とは別です。愛知県警は5年ほど前からそれを一緒にして、暴走族を少年警察の人が更生させるシステムができています。

東別院にあったお東幼稚園という幼稚園で、大正13年に日本で初めてのPTAが生まれました。PTAは戦後GHQが日本に入ってきてから、教育の1つのシステムとして日本に周知しましたが、お東幼稚園では戦前からそのシステムを

続けています。東別院は大須から近いため、大須の職人さんが子どもを迎えに行ったときに先生と話しているうち父母会のようなものが生まれ、それが今の日本のPTAの原点とされています。つまり、親と子の愛情というのがナゴヤは非常に深いんです。



2. ナゴヤの400年の遺伝子

●徳川宗春の時代に生まれたナゴヤ独自の風土

次のテーマは「ナゴヤの400年の遺伝子」です。今までお話ししてきたこと、ナゴヤの過去、昔のできごとを調べていくと、遺伝子に関係がありました。消失する前の名古屋城は、日本でも群を抜いて、姫路城よりもレベルの高いお城でした。御殿の内部は格天井という格の高い建築があり、梁もとても気太いです。こういった建築が、ナゴヤには多くありました。つまり、武将が多かったということです。

江戸時代に目を向けると、尾張・紀伊・水戸という徳川の3つの藩がありました。江戸で第8代将軍徳川吉宗のときに、尾張名古屋で藩主を務めていたのが徳川宗春です。江戸時代は最初は景気が良かったのですが、のちには不景気になりました。そこで将軍吉宗は、自分の食事を3食から2食にし、税金を貯め、贅沢をしないという政策をとりました。それに対して尾張の宗春は、まったく反対のことをします。着るものは派手で、かぶるものも唐様という中国のかぶとを持ち込みました。吉宗は白い馬に乗っていましたが、宗春は白い牛に乗って3mのキセルをふかし、まちを練り歩いたとされています。

宗春は、行きすぎた儉約は返って庶民を苦しめる結果となる、と言っています。規制を増やしても違反者を増やすのみとも言っていて、規制やルールを減らしていく政策をとりました。当時、日本は不景気の真っ只中だったため、吉宗は享保の改革という質素儉約を基本方針とする厳しい不景気対策をとりました。それに対し宗春は、開放政策を基本方針とする「温知政要」というマニフェストを刷って市民に配りました。当時の絵巻物を見ると、芸小屋や遊郭、お寺や神社など、とにかく何でも作っていました。不景気真っ只中の日本の中で、尾張名古屋だけが景気が良くなったので、全国から漆職人や金箔職人、彫師など、いろいろな職人さんが名古屋に集まってきました。そのためナゴヤには、300年前に生まれた文化が多くあるわけです。たとえば名古屋仏壇は、全国から集まった職人さんが腕を競い合ったことから生まれました。



●現代にも通じる「温知政要」の精神

宗春のマニフェスト「温知政要」は鶴舞図書館に写しがあります。宗春の直筆で、第21条まで書かれています。これをもとに、300年前から今のナゴヤに至る価値づくりについてお話しします。温知政要の第1条は「慈と忍の2文字を心の戒めとする」。つまり、愛と絆を大事にしないと宗春は言っています。離婚率を都道府県別で見ると、ナゴヤは大都市の中では最も低く、いわゆる幸せな家庭を築いている割合が高いということです。逆にパラサイトシングルの率が高いという現代的な問題がありますが、家族愛や隣人愛を大切にすることにつながって

いると思います。第3条で「千万人のうちに1人でもあやまり刑しても国持ち大名の恥である」と言っています。吉宗はスパイや忍者を使って、悪いことしているだろうと思われる人をどんどん殺してしまいました。それに対して宗春は、悪いことをしているかもしれないけど、実はその人は根底には良い心を持っているのではないかという見方をするわけです。それが先ほどの、交通警察と少年警察の合体組織が日本で初めてできた、つまり更生率が日本一高いというところにつながっているのではないかと思います。第6条「すべての物にはそれぞれの能力がある」と宗春は300年前に言っています。これは先ほどの、ほんのちょっと工夫を加えて白菜を作ったことで地産地消の率を高めたとか、美容整形なども該当すると思います。

規制が多いのは良くないというのは、人の心の積極性が失われるということです。ナゴヤは都市条例というのが大都市の中では圧倒的に低いです。犯罪の温床になりそうなところなど、東京都は一番に条例で禁止しますが、ナゴヤはそれがすごく遅い。規制を緩和することで可能性を見出すということにつながっています。たとえばナゴヤの派手な結婚式ですが、他県の友人と話しをすると、結婚式にたくさんお金を使うと相続税がかからないと言います。遺産には相続税がかかるけれど、結婚式という冠婚葬祭の場でのご祝儀には税金がかからないんです。そういう合理的な考え方が、ナゴヤの派手婚の中には含まれていると言われています。

17条には「たとえ千金を溶かした物でも軽い。人間ひとりの命には代えられない」とあります。リストラが話題になりましたが、不景気真っ只中でも、ナゴヤの企業はリストラをした率が日本一低かったんです。親会社、子会社、孫会社というシステムの数もナゴヤが一番多く、親会社でリストラされそうな人は、親会社が気を配って子会社か孫会社に次の職場を紹介してあげるといったシステムができています。人間ひとりの命はすごく大事だということを、尾

張名古屋はずっと培ってきたと言えると思います。

「社会の変革は時間をかけて、急な用件はいそいで解決しなければならない」と言っています。システムチックだけではなく、いそがなければいけないときは先決しなさいということです。たとえば、名古屋オリンピックを誘致して断念しましたが、その数ヵ月後にデザイン博を打ち立てて開催して成功させました。また、ゴミ処理場建設が中止になった数ヵ月後に、ゴミ分別先進都市と世界から言われました。つまりそうしたDNAが、300年前からナゴヤにはあったのではないかということです。

「家臣に分け隔てなく同情の念を加えること」と21条で言っていますが、ナゴヤは外国人比率が高く、外国人労働者の方も多いです。外国の文化をナゴヤの文化に根付かせるということが得意で、パチンコも欧米の遊びを日本の、特にナゴヤのパチンコとしてインポートしたものですし、台湾ラーメンも、ナゴヤの人が作ったラーメンに台湾という名前を付けてナゴヤの名物にしています。異邦の文化もナゴヤの文化に根付かせてしまうという、懐の広さがあるように思います。



3. ナゴヤ生まれの寄生の実践

●パラサイトシネマ

～始まりから海外進出まで～

最後のテーマは「ナゴヤ生まれの寄生の実践」です。一般的に世界の大都市というのは、競争が激しいというか、肩肘を張っているような世

の中です。今まで見てきたナゴヤのものはゼロから作ったものばかりでなく、今まであったものをちょっとだけ変化させたり、価値を付けたりすることで、存在価値を高めるというやり方で作っています。そういった「寄生」というキーワードをポイントにして、私がやっているまちづくりをご紹介します。

パラサイトシネマというプロジェクトです。パラサイトとは、まさに寄生すること。居心地のいいところにくっついて、寄りすぎるように生きていくことです。そういったシネマの上映をやっています。

ナゴヤは、大きな規模で、大きなスケールで開発が進められてきたので「白い街」と言われてきました。無表情という言い方をされてきましたが、それを白いキャンバスと捉え、ちょっとした仕掛けをするだけでいろいろなことができます。原理は単純で、空いた公共のスペースにプロジェクタとスピーカーを置いて映像を流すだけです。流すコンテンツによっていろいろな人が集まってきます。たとえば、若者向けにヒップホップなどダンスの映像を流すと、興味のある人たちが集まってきますし、囲碁の教室の映像を流すと、囲碁の得意な年配の方が集まってきます。囲碁の映像を流したときは塾帰りの小学生が入ってきたんですが、その子は小学生の囲碁チャンピオンだったので、年配の方たちの中で次の手を教えていて、新しい出会いもできていました。

そもそも、このプロジェクトは今から6年ほど前、万博前の2003年に始まりました。ナゴヤは白い街ですが、夜はライトアップもされていなくて黒い街でした。小さなプロジェクタを持って市街に行き、当時乗っていた車に投影するとけっこう映るんです。パルコの渡り廊下で映したら、ジベタリアンと呼ばれる人たちが200人ぐらい集まりました。オアシスの床面にボールが跳ねる映像を流すと、子供たちが来て、映像のボールを使って新しいゲームを作っていました。ナゴヤの都市にはいろいろなことができ

るスペース、すきまがいっぱいあるんです。

最初は許可もなくやっていたので怒られたりして大変でしたが、公の行事として認められ、次第にいろいろなところから招待をいただくようになりました。たとえばオアシス21の階段です。オアシス21にはたくさん階段がありますが、建築の基準法で幅や数が決まっています。でも、イベントなどが行われていないとき、つまり夜は、オアシス21を使う人が少ないので非常階段として必要な幅が狭くなります。その幅だけ取っておき、それ以外の部分を座席として使わせてもらって映像を流しました。準備を始めてから流すまでは10分ぐらいですが、どんどん人が集まってきます。韓国からの留学生の子に韓国語講座をやってもらったときは、韓国ブームだったので、すごい人だかりになってしまいました。夜のナゴヤの都市空間にあるすきまに、ほんのちょっと仕掛けを持って行くだけで、いろいろ出会いの場が生まれるわけです。

こうしたプロジェクトを東京のような密度の高い大都市でやろうとしても、すきまがどこにもないんです。ナゴヤはすきま、つまり寄生する余白があちこちあるんです。ナゴヤから生まれたまちづくりの手法ということで、経済産業省のプロジェクトにも宣伝され、海外からも呼

ばれ始めました。2年前に、ポルトガルリスボンで国際建築祭があり、ナゴヤが都市計画を基盤にして進めているまちづくりプロジェクトということで招待をいただきました。ポルトガルのまちなかの広場で投影すると、いろんな人が集まってきてくれました。展示会のオープニングでは、ポルトガル大使ご夫妻にも説明しました。

すきまへの仕掛けは、ただプロジェクトで投影して人を集めるだけでなく、いろいろな提案をしています。たとえば今、鉄道の吊革メーカーと一緒に共同開発を進めているのが、握るだけで血圧や血糖値、脈拍が測れる健康維持装置のようなものが入っている吊革です。また、エスカレーター脇で日本の文化であるマンガを紹介してはどうかなど、さまざまな提案をしています。

今日はナゴヤのDNAを探るということで宗春を紹介させていただきましたが、ゼロから作るのではなく、もともとあったものを少し変えるだけで必要なものにするというDNAが、ナゴヤのモノづくり、コトづくり、人と人のつながりの中にあっただのではないかとということで、締めさせていただきます。ありがとうございました。

トークセッション

【古池】 第1部の基調講演で北川先生から多くの素材を掘り起こしていただきましたので、トークセッションではそれをもとに、これから名古屋を面白くするアイデアを語り合っていきます。

【井澤】 基調講演で北川先生のほうからパラサイトシネマを中心に、こんな面白い場が名古屋にいっぱいあるということをお話ししていただきました。それを踏まえ、パネリストの方々に名古屋の魅力をご紹介いただきたいと思います。

海外から名古屋を眺め、 初めて魅力に気付く

【原田】



私は深夜の「ラジオdeごめん」というテレビ番組に出て、モデル・タレント業を10年していました。10年やったら一掃したくなって、振り出しに戻したくなったんです。レギュラーもいっぱいいただいて、原田さとみがやっと認められた頃だったんですが、私の中ではもう終わっていたので、環境を変えるため、当時興味のあったパリに留学することにしました。ここで私は、名古屋のことを意識するようになるんです。パリに行ったときに、「名古屋で生活をしていても名古屋のことを何も知らないし、何も魅力を発信してなかった」ことに気付いたんです。「あなたの街の特徴は？何が名物なの？」と聞かれても、何1つ答えられなかったので、早く帰って名古屋の勉強をしたいと思いました。

最初に勉強したのは徳川宗春についてでした。勉強するうちに、私は生粋の名古屋っ子だということに気付いて、それをとても愛すようになったんです。今度パリに行ったときには、みんなに名古屋のことを良く言えるようにと、ちゃんと準備をしました。海外の人は名古屋のことを知らないので、当時は悔しくて勉強しましたが、勉強していくうちに日本の伝統的なことが大好きになっていきました。



地域とのふれあい、 「大ナゴヤ大学」との出会い

パリから帰ってからは名古屋に根を張っていますが、さらに大きな転機は子どもを産んでからです。子どもが幼稚園に行くとお母さんたちとの交流が始まりました。小学生になると

PTAをやり、子ども会や地域委員さんもやるようになりました。そんなふうに関わりがふれあひが多くなったんです。私は海外旅行が好きでしたので、アジアやアフリカなど途上国への海外協力・支援に興味を持ち、海を越えた支援をしていましたが、こんなに近くにボランティアでできることがいっぱいあったんだと思い、地域での活動に進んで参加したり、学校で子どもたちに絵本の読みきかせをしたり、良い意味でのお節介が始まりました。そんな私に「大ナゴヤ大学」のお話があったのが去年の暮れでした。

大ナゴヤ大学の母体は、東京の「シブヤ大学」です。3年前に渋谷でスタートしたNPOの活動なんですが、大学といっても本物の大学とは違い、コミュニティー活動の名称です。シブヤ大学に名古屋出身の人がいて、名古屋でもやりたいということで私のところに相談にきました。私も大賛成で、まずメンバー集めから始まり、賛否両論ある中で「大ナゴヤ大学」という名前を付け、シブヤ大学、京都カラスマ大学に続いて名古屋が3校目にスタートしました。

「「街」のいいところと「大学」のいいところ、どっちも取り入れる」というのが大ナゴヤ大学の活動です。土地のつながりではなく、心の空間的なつながりを表現したくてカタカナの「ナゴヤ」にしました。大ナゴヤ大学は校舎がありません。名古屋のまち全部が私たちの校舎だと思っているので、駅やテレビ塔などいろいろなところにパラサイトしていきます。3月におこなった開校前のオープンキャンパスでは、テレビ塔とサンシャイン栄の観覧車を教室に見てました。もう1つ、うしろの授業ということで、雀おどり總本店さんの店内を教室にしました。このように、どこでも教室になってしまうというわけです。

9月12日「大ナゴヤ大学」開校！ 誰もが先生、誰もが生徒

先生も生徒も同じ目線で学びあう、交流しあう場であることを大きなコンセプトにしている

ので、誰もが先生になれ、誰もが生徒になれます。自分の得意分野を一生懸命勉強して人に伝えるというのが、大ナゴヤ大学なんです。9月12日に開校式があり、そのときは8つのミニ講座を作りました。名古屋のまちに8つのコースで飛び出しました。覚王山のコース、B級コンクリート仏像を巡るコースなどがあり、私がつくったのは小倉トーストのコースです。



私は食いしん坊なので、美味しい小倉トーストの店を4か所めぐりました。お店の店主さんが先生なので、そのときは4人の先生に登場していただきました。ある店主の方が、こうおっしゃったのがとても嬉しかったです。「私は今まで20年小倉トーストやってきたけど、特別だと思って作ったことはなかった。でもあなたが“これが授業になるんです”と言ってくれたのがとても嬉しくてあらためて小倉トーストのことを勉強してみたの！おかげで今日はワクワクしてます」。こんなふうに先生も生徒もワクワクできるような時間・関係を作る、これがまさに私たちがやりたかったことなんです。さて、8つのコースをめぐる生徒たちは、終わると開校式のために1つの会場に帰ってきました。帰ってきたら、今度は学んできた生徒さんが先生になって発表をしたんです。まさに先生と生徒が入れ替わるということを開校式で表現できました。

授業もとても魅力的です。大ナゴヤ大学は、入り口が「エッ?!」と思うような、ちょっとおバカなところから授業に入ることもあります。たとえば観覧車の授業。サンシャイン栄の

観覧車にはゴンドラが28付いているので、28カ国の外国の方に先生として乗っていただき、生徒も28人乗りました。観覧車に乗っている15分間に交流し、降りたら今度は、自分がその国の大使になったつもりでレッスンを受けたことを話すんです。そんなふうに、観覧車で授業というと「エッ?!」と思うけれど、そのあととても仲良くなって愛情が深まり、その国のことに興味を持つというわけです。大ナゴヤ大学はいろいろなコトの入り口として存在していけたらと思います。そのあとのプロフェッショナルなことはまた、意欲を持って次へと進んでいただければいいわけです。

たとえば、ういろ講座というのをやりました。大須ういろさん、青柳ういろさん、餅文総本店さん、雀おどり總本店さんの競合4社が集まったディスカッションでした。生徒はういろが好きな人だけでなく、ういろを食べたことがない人も集まっていて、こんなういろが欲しいというのをプレゼンしました。すると、先生役のはずの会社の方々がメモをとりはじめたんです。そのあと、それぞれの会社で私たちが提案したういろが商品化される可能性があるということになり、生徒さんも1回参加するだけでは終われないということで、ゼミやサークルという形でどんどん活動が広がっています。

大ナゴヤ大学は、小さい子どもさんから年配の方まで参加してくださってOKです。小学生のための大学にもなるし、中学生のための大学にもなります。ボランティアスタッフという人たちが70名サポートしてくれていて、当日の運営をしたりするんですが、その中にも私たちよりもずっと高齢の方が楽しんで参加してくださっています。マラソンコースを作る方、グランパスの応援に行く方など、いろんなゼミができています。そしていつまでたっても卒業はなく、ずっと学び合うことができます。

大ナゴヤ大学は月1回、第2土曜に開催しています。今日はみなさん「大ナゴヤ大学」を覚えていただいて、ぜひ学生登録をしてください。

もちろん登録無料ですし、参加費も無料です。名古屋という地域に関わる人たちみんながつながることで気持ちが優しくなって、元気になって、名古屋のまちをもっともっと盛り上げていきたいということで、大ナゴヤ大学は頑張っています。どうぞみなさんも、ボランティアスタッフや授業などに参加していただければと思います。

【井澤】 ナゴヤの魅力ある場所で、ナゴヤの魅力となるテーマを取り上げて、魅力ある人々が先生になりながら、魅力ある人々を育てていくという、ナゴヤの魅力そのものを拡大再生産していくような場が大ナゴヤ大学ということです。続いて、井村さんから名古屋の魅力を紹介していただきます。

清須越し～大正デモクラシー 名古屋のまちのはじまり

【井村】



私は名古屋にしか住んだことがなくて名古屋が大好きで、大ナゴヤ大学の学生でもあります。現在は、名古屋都市センターで名古屋のまちづくり、調査研究の仕事をしています。今日は名古屋のまちがどのようにできたかというお話しをします。

名古屋は400年前に清須越しで城下町ができました。1660年の地図を見ると、城下町がどんな形をしていたか分かります。北側にお城があって、逆三角形の形でした。きれいな碁盤の目

のまちになっていて、お城の周りに武家屋敷があり、碁盤の目のあたりが町人街になっていました。もしお城を攻める人がきたら、武士の人たちが広いお寺の境内に集まって戦えるようにということで、まちの周りにお寺がありました。

道の幅は6mか8mで格子状ですが、当時は木造住宅だったので火事になると広がってしまいます。それを何とかしなければということで、道幅を6mから26mに広げ、広小路になりました。

宗春の時代の地図を見ると、まちの形は変わりませんが、縦のラインが南に延び、賑わいストリートになっていました。江戸時代も終わりに近づいた1784年ごろですが、まちの形はほとんど変わりません。1910年には関西府県連合共進会という万博のようなイベントが鶴舞公園でありました。このころを境に、まちが現代化し、広小路の周りに商店が集まっていきます。1923年、大正デモクラシーの時代には、まちが少しずつ広がっています。鉄道が東京から来て名古屋駅ができました。

戦後～現在 名古屋のまちの未来像

1955年、太平洋戦争のあとの地図を見ると、名古屋は市域の4分の1が燃えてしまっています。お城も燃え、まちを再建しなければならないときに区画整理、地元の人たちが自分たちの土地を出し合ってまちを良くしようということで、まちができました。このときに100m道路が作られます。若宮大通と久屋大通が、防火帯の役割として作られました。ちなみに、100m道路は日本で3本しかありません。そのうちの2本が名古屋にあるので（もう1本は広島）、100m道路は名古屋の資産だということを覚えてほしいと思います。

次に、まちの中の道路がどのように使われていたかです。江戸時代には人が歩き、カゴが通り、大八車のようなものが通り、馬が通るといって使われ方をしていました。防火帯として広くした広小路通りは、屋台が出て人が賑わっていました。やがて市電が通り、まちの中の道路が

市電用になりました。戦後には車が増え、道路の中を市電と車が通り、人が隅に押しやられます。そして現代の道路は、市電はもちろんなくなり、かわりに地下鉄ができ、道路には車がたくさん通っています。人は隅のほうを歩いている状況です。

私が思うのは、江戸時代には道路を人が自由に歩き、出店も出て楽しんでいたのに、なぜ今は人が隅っこを歩かなければいけないのかと感じています。この先の名古屋を考えると、車よりも人が楽しいまちになるといいと思っています。9月20日にカーフリーデーというイベントがあり、久屋大通の車の通行を止めて人が自由に歩いたり、自転車が自由に走ったりできました。そういうまちの姿に、将来の名古屋がこうなるといいなというヒントがあると思います。



【井澤】 歴史的な視点から名古屋のまちづくりを紹介いただき、名古屋の資産と言える100m道路をどのように有効活用していくのかという問題提起をしていただきました。続いて古池先生から名古屋の魅力をお話しいたします。

名古屋の楽しいもの、ことを探す 【古池】



私は名古屋で生まれて10年過ごし、小学校3年生から滋賀県で8年、学校時代は京都、つくば、横浜で15年過ごしてまた名古屋に戻ってきました。昭和34年生まれで、中村区の遊郭が近くにあった辺りで育ったので、幼少期の記憶はすべて中村界限です。当時の名古屋の印象は決して白くなく、ただ、名古屋駅の向こうに行くところと都会なので、親から「向こうに行くな」と言われてこっち側で遊んでいました。駅の向こうに行くときは花電車に乗るのが楽しみで、子供時代は駅の西側の、わりとすきまだけのところに寄生しながら遊んでいた記憶があります。そのあと2年間つくばにいましたが、ここは今の名古屋以上に近代都市で、穴もすきまも全くないコンクリートだらけで、道はまっすぐでビルだらけというところでした。窒息しかけて15年後に名古屋に戻ってきましたが、名古屋も似てきたなという気がしています。私の記憶の中では、名古屋はもっといろいろなものがあって、もっと楽しかった記憶があるので、見えるところを掘っていくとまだ残っているのではないのかと思い、いろいろなところを探すのが今のライフワークの1つになっています。

名古屋の可能性を掘り起こしたい

もう一つライフワークがあります。名古屋でデザイン博があったときに、道にいろいろなパブリックアートを置いたんですが、どうもそれだけでは名古屋のすきまを埋められない気がし

て、そのあと各地のアートイベントに行くようになりました。ついこの間は、別府の「混浴温泉世界」というイベントを見てきました。古いアパートに若いアーティストが長期滞在し作品を作ったり、商店街の中の店舗で作品を展示したり、古い別府のまちなみの中にすきまや穴を作るというイベントでした。同じようなことを名古屋という「場」を使って北川先生がいろいろ取り組んでおられるので、何か可能性が開けるような気がしています。これからできる範囲ですきまを探して紹介するなど、私なりに名古屋の魅力を掘り起こしてと思っています。

【井澤】 名古屋のすきまや穴、それに魅力づけをどうしていくのか、まさに北川先生の問題提起と重なるところです。ここまでの話を聞かれて北川先生からひとことお願いします。

【北川】



先ほどお話に出てきた市電は、私が生まれた昭和49年3月に廃止になってしまったので、私は見ていません。中村遊郭の花電車も見ていませんし、そういった資料を大学で調べていると、すごくうらやましく思います。その一方で、そういう時代を見ていない私から見ると、今のナゴヤはすきまがたくさんあるまちです。仕掛ける方策がいっぱいあり、そういったところがナゴヤが大事にしてきた出会いや愛だと思えます。ナゴヤは出会いに満ち溢れているまちです。とても上手く循環するようになっていて、まさにCOP10なんです。

【井澤】 名古屋の魅力をできるだけ多くの人々に共有してもらって行動することによって、白い街から面白いまちになるのではないかと思います。ですが、どんな魅力を共有し、それにどういう価値を付ければいいでしょうか。

【井村】 道の空間の使い方をいくつか紹介しましたが、私が一番言いたかったのは、それがどんどん変わってきていませんか？ということに気付いてもらいたかったんです。最初は道を人が通っていた。市電が走るようになったから真ん中を市電に渡した。車が増えてきたから車に渡した。同じ空間を時代に合わせて使い変えてきましたが、これからの時代は何に使ったらいのかということ、私自身は人や自転車ではないかと思っています。なぜかという、名古屋のまちの中にはいろいろな魅力が点在していますが、車で通るとあっという間に過ぎてしまうので見えないからです。歩いたり自転車に乗ったりすることでよく見えるので、その使い方がいいと思うんです。

【井澤】 人の移動のスピードとまちの景観は関係していて、バロックの都市というのは、馬車で走ると非常きれいに見える景観なんです。道の使い方はまちの魅力の付け方と相関があると考えたら、新しい問題提起だと思います。

【古池】 滋賀県の彦根は仏壇のまちで、「彦根仏壇」という立派な仏壇がありますが、最近そこの方々と、仏壇と観光が結び付かないかという調査をやっています。仏壇を作る7人の職人がいて、塗りの職人さんは名刺入れを作るなど、いろいろなものを作っています。工芸というモノを作る技術、あるいは北川先生が言われた少しずつ技術で新しいモノを生み出しながら、まちと共にモノで魅力を付けていくことを彦根でやっていこうと思っていますが、名古屋ならもっとできるのではないかと思います。

【原田】大ナゴヤ大学がやろうとしていることは、まさにそうです。今までは「何とかしてほしい」とどこかに言えば何とかなる時代だったかもしれませんが、私たちは「私たちがやらなくて誰がやる」という思いで活動しています。市民のエネルギーがあればこそ、名古屋のまちは変わると思います。

【井村】名古屋が「白い街」と言われるようになったのは、道路が広くて白いコンクリートが強調されているからという一説があります。その白い道路の部分を楽しく使って、魅力がPRできるのではないかと思います。たとえば、名古屋の道路の碁盤の目を使ったあみだくじウォークラリーや、100m道路を使った横断障害物レースなどを大ナゴヤ大学でやるのもいいと思います。名古屋のまちの資産を上手く使おうということです。

【井澤】



今日のテーマは「白い街から面白いまちへ」ということですが、「面（おも）」というのは顔のことです。顔に光が当たっているさまが面白いというのが本来の意味ですので、影を見ているわけではなく、明るい方に向かってにこっとしているのが面白いまちということです。今日お話にあったように、まちづくりや仕掛けをすることでみなさんの顔が笑顔になる、それが面白いまちになるということだと思います。名古屋の魅力はいっぱいあるので、これを機会に、みなさんにも名古屋の魅力をいろいろな場所で

発信し合い、学び合うことによって、世界に通じていくのではないかと思います。

【古池】名古屋は、昨年10月に「クリエイティブ・シティズ・ネットワーク（デザイン分野）」に加盟が認定されました。クリエイティブというのは、ちょっとずらしたり、ちょっと探したり、ちょっと遊んだりという中から生まれてきます。今日は名古屋のまちを新しくクリエイティブしていこうということを確認できた、非常にいい機会だったと思います。ありがとうございました。

第10回 全国まちづくりカレッジ in 名古屋

どえりゃ～地域とつながるまちづくり

- 日 時：2009年11月14日(土) 13時30分～20時、15日(日) 9時～16時30分
 ■場 所：名古屋学院大学名古屋キャンパス、名古屋国際会議場
 ■参加者：174名（教職員26名、学生122名、一般26名）
 ■主 催：名古屋学院大学地域連携センター、全国まちづくりカレッジ2009 in 名古屋
 ■後 援：名古屋市
 ■協 力：日比野商店街振興組合、日比野ひとまちネット

全国まちづくりカレッジは、2002年に関西学院大学で開催されたのを皮切りに、これまで9回の交流が行われてきた。節目となる10回目を迎える今回は、本学の名古屋キャンパスを中心に開催され、全国各地で学生主体のまちづくり活動を実施している大学や高校など14団体、174名が参加した。事例報告やフィールドワークなどを通して、学生同士の情報交換や交流が図られたことで、各自が自分達の活動を見つめ直すとともに、今後の活動のモチベーション向上につなげることができた。



11月14日(土) 1日目

1日目は各大学等が過去の取組事例や今後の課題、活動予定を発表した。トークセッションも行われ、日頃は難しい大学間の意見交換も実現した。

第1部

事例発表	
参加団体	岐阜大学 岐阜経済大学 758でまえワークショッパーズ 星城大学 豊橋創造大学 皇學館大学 名古屋学院大学
トークセッション	
参加団体	岐阜大学 岐阜経済大学 758でまえワークショッパーズ 星城大学 豊橋創造大学 皇學館大学 名古屋学院大学
講 評	
	片寄俊秀氏(大阪人間科学大学教授)

第2部

事例発表	
参加団体	東海大学 京都文教大学 大阪人間科学大学 和歌山大学 香川大学 佐賀大学 岐阜県立飛騨高山高等学校
トークセッション	
参加団体	東海大学 京都文教大学 大阪人間科学大学 和歌山大学 香川大学 佐賀大学 岐阜県立飛騨高山高等学校
講 評	
	鈴木誠氏(岐阜経済大学教授)

11月15日(日) 2日目

2日目は参加大学が6つのグループに分かれ、「あつたまちなか散策」「あつたまちづくり発表会」を行った。全国から集まった学生が、新しい視点であつたのまちを散策し、ワークショップでまとめた意見を発表した。

どの参加者にとっても、他大学の参加者と共に行動し、真剣になって意見を言い合える、貴重な経験となった。

ーあつたまちなか散策ー

熱田区の主要なスポット（熱田神宮、白鳥庭園、堀川）へのフィールドワークを通して、地元住民でない視点からまちづくりの問題点を提起し、その解決策までを考えた。

ーあつたまちづくり発表会ー

スポットを訪れる順序によって、熱田神宮コース、白鳥庭園コース、堀川コースの3つに分け、担当スポットについてまちの現状と問題点、散策場所の活かし方、行いたいこと、経費の調達方法、効果をまとめ、発表した。

「堀川とまちの調和」	
発 表	堀川コース・グループ1
講 評	水野晶夫 (名古屋学院大学経済学部教授)
「熱田神宮にいかに若者を取り込むか」	
発 表	熱田神宮コース・グループ1
講 評	柿澤修一氏 (名古屋市市民経済局地域商業化商店街係主事)
「白鳥庭園ビフォーアフター大計画」	
発 表	白鳥庭園コース・グループ1
講 評	佐藤朋枝氏 (白鳥庭園ボランティアガイド)

「地域に愛される緑の堀川」	
発 表	堀川コース・グループ2
講 評	高森桂三氏 (日比野ひとまちネット会長)
「熱田めぐり」	
発 表	熱田神宮コース・グループ2
講 評	吉田明美氏 (熱田史跡ガイドの会)
「白鳥庭園から知る鳥庭園」	
発 表	白鳥庭園コース・グループ2
講 評	近藤一磨氏 (日比野商店街振興組合副理事長)



文部科学省GP採択シンポジウム

「現代の若者気質を活かす教育」

■日 時：7月26日（土） 13：30～16：40

■場 所：名古屋学院大学 名古屋キャンパス 白鳥学舎

■入場者：161名（大学・短大等関係36名、中学・高等学校関係2名、一般36名、本学教職員44名、本学学生43名）

プログラム

■基調講演1 「大学教育の行方－変貌する若者・高校と求められる能力の狭間で」

お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 教授 耳塚寛明 氏

■基調講演2 「『就職』から見た現代の大学生の課題」

独立行政法人労働政策研究・研修機構 統括研究員

小杉玲子 氏

■トークセッション

概 要

基調講演1では、お茶の水女子大学大学院の耳塚寛明氏より、高校と大学の接続という「入口」の視点から講演をしていただいた。耳塚氏は、日本の高校教育の質を維持する上で貢献してきた「学習指導要領」と「大学入試」という両輪はもはや機能していないので、高校教育の質を保証する第3のシステムをうまくつくらなければ、大学教育はその入口部分で大きな困難を抱え続けることになろう、と述べられた。また、大学初年時教育においては、「生徒（知の効率的受容者）」から「学生（知の生産者）」への変身を促すことが重要だと課題を挙げられた。

基調講演2は、独立行政法人労働政策研究・研修機構の小杉玲子氏より、大学生の就職という「出口」の視点からの報告であった。小杉氏は、現代の大学生の就職活動は、インターネット情報に頼りすぎである一方、企業が採用したい人物像は、行動力、協調性、バランス感覚のある学生で以前と変化がない。つまり、課題解決能力やコミュニケーション能力が重視されるが、それらは自ら動く経験で身につくものであ

る。実際に動くことが大切で、それが就職にも影響するということを学生には認識してほしい、と述べられた。

トークセッションでは、現代の若者気質を活かす教育はどうあるべきかについて、耳塚氏、小杉氏と担当教員との間で議論を行った。現代の大学生に身につけてほしいものも多くある中で、失ってほしくないものもある。本学の取組が学生生活でどのように効果的に影響するか、さまざまな意見が飛び交った。

ポスターセッションも同時開催され、本学のGP採択取組への理解を深めていただくことができたと考える。



2007年度現代GP（文部科学省）選定記念キックオフシンポジウム 名古屋大都市圏の交流・連携の将来を展望する －大学の役割 地域の役割－

■日 時：2007年12月22日（土） 13時30分～16時20分

■場 所：名古屋学院大学 名古屋キャンパス 白鳥学舎 201教室

■入場者：124名（大学関係4名、一般67名、学生53名）

■後 援：名古屋市

プログラム

■基調講演 「広域都市圏レベルでまちづくり連携を考える」

大阪市立大学大学院 創造都市研究科教授 矢作 弘 氏

■名古屋学院大学の地域貢献の提案 名古屋学院大学 経済学部長 木船 久雄

■トークセッション

・第1部 まちづくり×ものづくり

(株)都市研究所スぺーシア代表取締役 井澤 知旦 氏

名古屋工業大学 建築・デザイン工学科教授 藤岡 伸子 氏

●モデレーター 名古屋学院大学 経済学部教授 古池 嘉和

・第2部 まちづくり×ひとづくり

大阪人間科学大学 環境・建築デザイン学科教授 片寄 俊秀 氏

熱田区役所 区民生活部長 日比野辰也 氏

名古屋市民経済局産業部地域商業課長 一柳 良直 氏

●モデレーター 名古屋学院大学 経済学部教授 水野 晶夫

■概 要

基調講演では、大阪市立大学大学院創造都市研究科教授の矢作弘氏より、テーマに対し、競争よりはむしろ、連携、補完し合うことで都市圏全体としての福利厚生を大きくすることが重要であるというご意見をいただいた。また、名古屋都市圏において名古屋は「観光」と「ものづくり」でもってどのようなイニシアチブを取るのかという課題に対し、観光では名古屋がイニシアチブを取ること、「ものづくり」では地域の知・技をネットワーク化し、新しい名古屋ブランドの創出をすることが重要だと述べられた。次に、本学経済学部長の木船より、現代GPに選定された本学取組は地域貢献と学生教育の2つの成果をねらいとし、地域と大学が互いにメリットのある関係を構築すべく、努力するとの説明があった。

トークセッション第1部では、名古屋で産業や文化が栄えたのは、周辺地域との連携が不可欠だったという歴史が語られ、ものづくりに関し、車以外の産業に関しても生産と消費のイメージをつなげることが重要だという意見も出た。また、ものづくりを通して学生がどのように地域と連携していくかについても討議された。第2部では、まず大阪人間科学大学の片寄氏から関西学院大学で教鞭をとっていた際の「ほんまちラボ」の活動についてお話いただいた後、名古屋市および熱田区のまちづくり担当者を変えて議論が行われた。地域と大学が協働することにより、従来とは違う企画も可能になることや、大学や学生の目から見た、新たな地域の資産や課題をまちづくりに生かすことの重要性について意見交換が行われた。

補助事業の評価、改善、 次年度以降の方向性

補助事業の評価



全体評価及び改善点の提示



地域創成プログラム次年度以降の方向性

■補助事業の評価

1. 学生の学習成果－「社会人基礎力」調査結果から

現代GP事業の実践活動に関わっている3団体（地域活性化研究A、地域活性化研究B、マイルポストクラブ）の学生に対して、2008年度末、2009年度末に実施した「社会人基礎力調査アンケート」の集計結果について以下にまとめる。

社会人基礎力とは、考え抜く力（シンキング）、チームワークで働く力（チームワーク）、前に踏み出す力（アクション）の3つの能力から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、経済産業省が2006年から提唱している概念である。

ここでは、考え抜く力について「問題解決力」「企画力」、チームワークで働く力について「思いやり・助け合うことの大切さ」「コミュニケーション能力」、前に踏み出す力について「実行力・行動力」「社会への関心」を代理変数にして、活動を通じて何を学び、何を得たかを調査した。詳細は下記の評価アンケート集計表を参照のこと。

（1）年度間比較

地域活性化研究では、2009年度のほうが全体的に「非常に学べた」との回答が増加している。特に、前に踏み出す力（実行力・行動力、社会への関心）が顕著に伸びている。これは年度を重ねるにつれて、関心の高まりとともに実行する楽しさを学ぶことが出来るようプログラムが充実してきた現れであるといえる。

一方、マイルポストクラブでは大きく成果が後退している。これは、店舗立ち上げ世代が卒業し、2008年度が3、4年中心であったのが、2009年度は1、2年生が中心になったこと、そして、事業が継続していくなかで、意義を見失ってきたことが要因としてあげられる。

現在、幹部を中心として、その反省点を全員で話し合い、改善に向けての努力を始めたところである。

（2）実践事業（地域活性化研究）と課外活動（マイルポスト）との比較

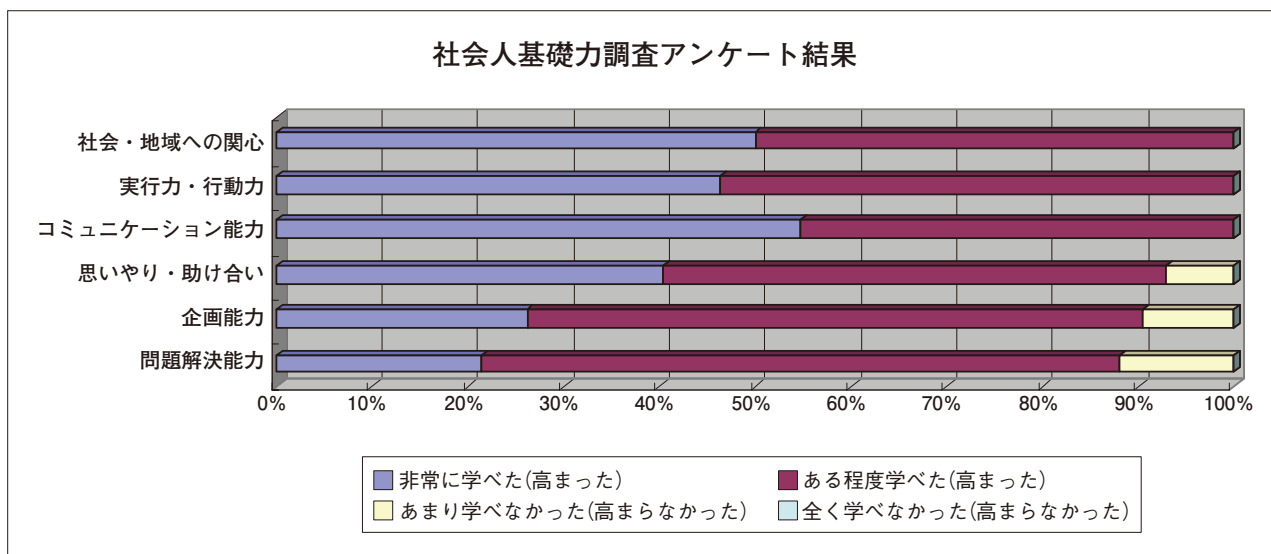
2008年度で比較すると、課外活動であるマイルポストは、特に、チームワークで働く力（思いやり・助け合うことの大切さ、コミュニケーション能力）と前に踏み出す力（実行力・行動力、社会への関心）が活動を通じて、非常に高めたことが伺える。

一方、実践授業では、あまり高まらなかったと答える学生が一部存在していたことがわかる。

2009年度は、マイルポストが全体的に数字を落としている中で、思いやり・助け合うことの大切さが非常に高まったとの回答が多く、主体的な活動のよさがチームワーク力を高める形として表れたといえる。

一方、実践授業では、社会への関心やコミュニケーション力が高まったと答える学生が多く、これは、実践を通じて知識を得たことで、学ぶ喜びを得たともに、プレゼン等説明する機会が多いため、これによってコミュニケーション力を高めたといえる。

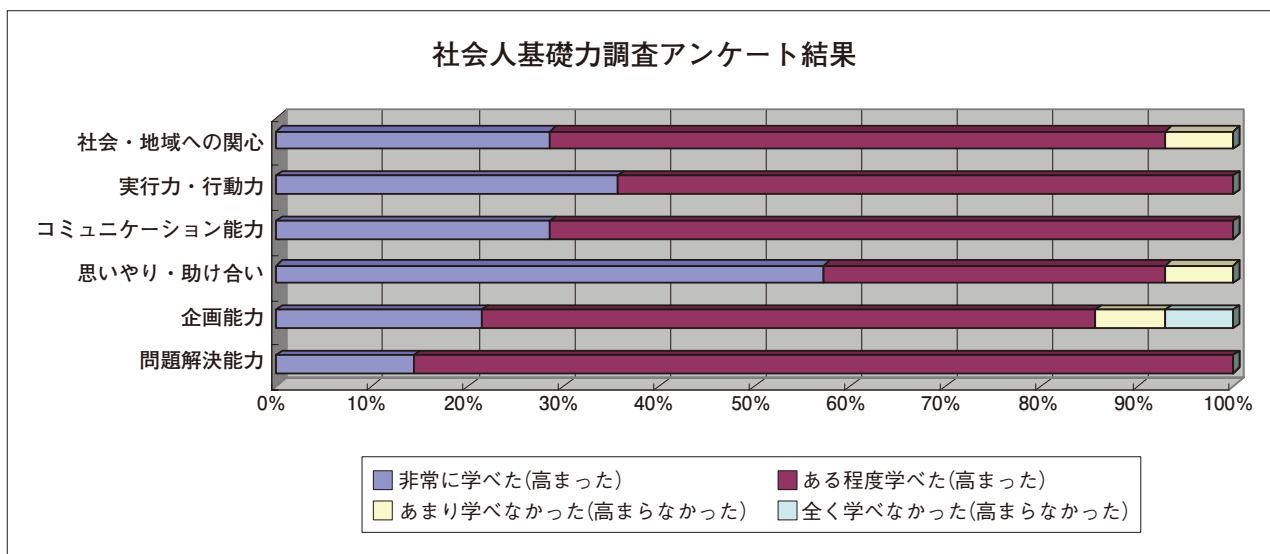
■2009年度 地域活性化研究（A+B）



《具体的な成果》

- ・多くの学校が集まり自分たちが考える企画をしたプレゼンは、非常に興味を持った。学習意欲が高まった。
- ・地域の人々の地域への関心度の高さにびっくりし、また、自分も自分の地域に関心を持てた。
- ・人に説明したり、一人で話さねばならない機会が多く、コミュニケーション能力は高まったと思う。
- ・大学の授業で一番ためになったと思う。就職活動で、この授業や水野先生の授業で学んだことを言えるので、とても自分のためになる授業だった。
- ・普段の授業とは違い、フィールドワークだったので、達成感というか、「大学に入って勉強をしている」という実感をよりもてたと思う。もっと掘り下げていったら、就職の強みにもできそう。
- ・知らない人に説明したり、会話したりするのが、少しだけ上達した。
- ・自分たちでツアーを企画するということは、はじめての経験で最初は自分たちに本当に務まるのかと思っていただけ、ツアー自体も大きな問題もなく終わらせることができたので、いい経験でこれからの自信にもなった。
- ・焼きものなど普段気にしてなかったことだけど、非常に深い意味があると感じた。
- ・普段でできないことが学べて、特にコミュニケーション能力が高まったと思う。
- ・地域に密着し、何かを行うことの大切さやおもしろさを学べた。こういったことはしたくてもあまりできない体験なので、大変貴重な体験となった。
- ・イベントなどで何かをするときは、事前の練習がとても大切だと思った。こういうことを、これからも生かしていきたい。
- ・この授業は、ただ座って授業を聞いているだけのとは違って、とても楽しかったし、ボランティアやガイドという経験ができたので、本当に良かった。この経験を社会に出ても生かしていきたいと思った。
- ・今までの実習系の授業は受講してなくて、初めての経験だったのでよかったと思う。地域のイベントにも参加できて学校周辺のことをよく知れたと思う。
- ・2年間熱田区にいても、地域のことも堀川のことも全く分からなかったので、この授業を通してよい勉強ができた。今までは何も感じなかったけど、これからは、堀川の水質だったり、工夫だったり、ふとしたときに見ていけたらなと思った。

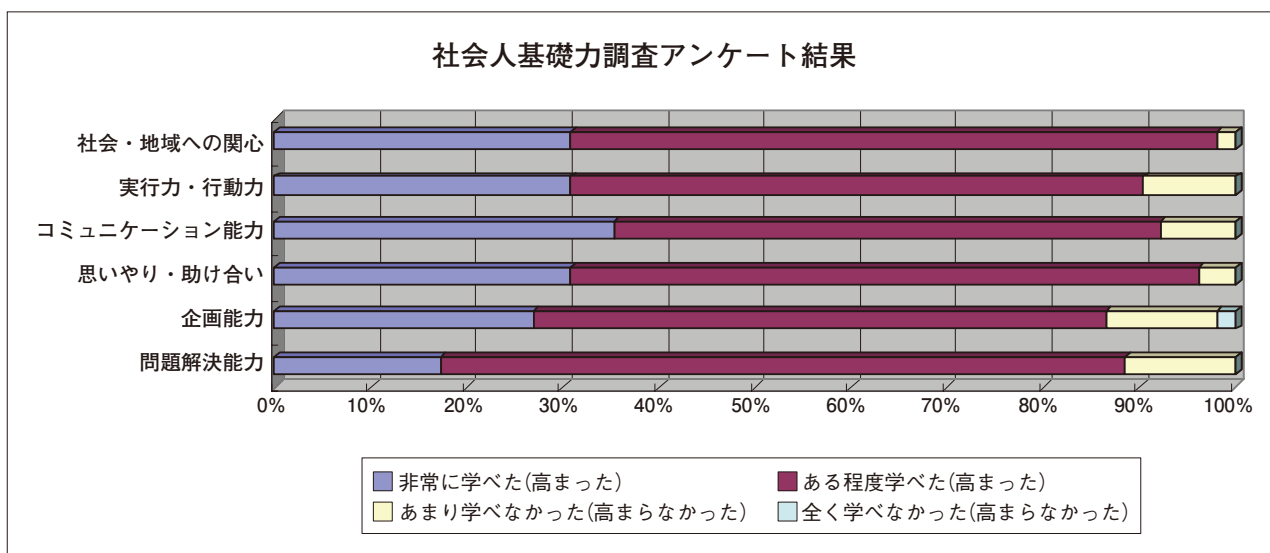
■2009年度 マイルポストクラブ



《具体的な成果》

- ・一年生だけど、自分のイベントなどをやれるのがすごく楽しい。
- ・サークルの輪に少しずつ溶け込めているような感じがして、入る前とは大きな違いが出たような感じがした。
- ・本音で話し合うことの大切さを知った。

■2008年度 地域活性化研究（A+B）



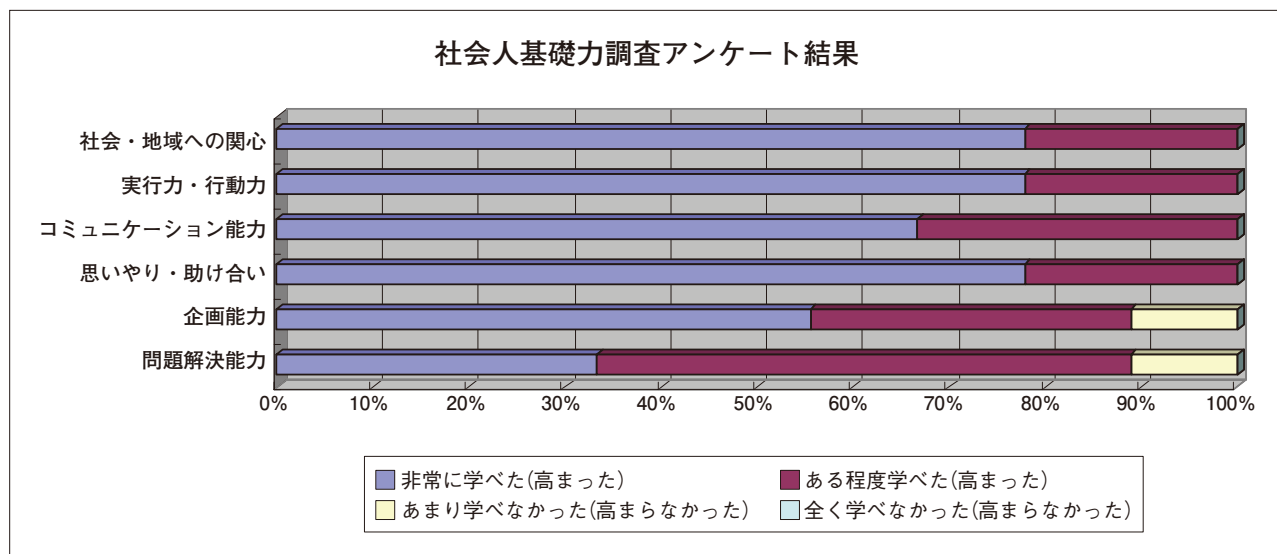
《具体的な成果》

- ・地域の人との関わり合いやコミュニケーションでうまくやっていけたと思う。普段の生活では気付かないような所で地域の人が積極的に自分の地域を活性化させるために日々努力していることを知った
- ・地域の人々と関わる機会や専門の方々の話を聞く場があり、そういう場を開催できることがすばらしいと思った。また来年も個人的に陶街道交流フェスティバルに参加したい。
- ・大学を通して交流を深めたりイベントなどをすることで地域全体が一つになることはいいことだと思った。「今年はこんな感じか」というものだったので、来年はもっといいものを作っていけるよ

う期待しています。

- ・あまり自分のコミュニケーション能力は高くなかったが、今回の授業でプラスになるものを得ることができた。
- ・コミュニケーションは必ず必要になっていくことが改めて理解できた。問題も話し合い解決することで、協力して理解をしていくことができた。
- ・地域の活性化には地域の人々との関係が重要であり、地域の人々の活動意識の向上が活性化につながっていくことがわかった
- ・問題解決能力がある程度学べ、実践にうつすこと、また問題を解決するためにどのようなことをしたらよいのかという考える力が養えた
- ・みんなで助け合うということを学んだ。協力し合って一つのものができる達成感。
- ・町には全く関心がなかったけど、いろいろしていくうちにたくさんの人が陰ながら頑張っていることなどわかって関心をもつようになった。
- ・チームのみんなで協力して一つの企画を組み立てるということが難しいながらも楽しくできることがわかり、それを達成したとき一息つくような安心感が生まれたのでやってよかった。
- ・ただイベントに参加するだけでなく、ゼミ活動のレポートの題材としても活用していたのでうまくまとめることができた。

■2008年度 マイルポストクラブ



《具体的な成果》

- ・個人的な成果というのかはわかりませんが、マイルポストに関わって、たくさんの人と知り合って（たくさんの年齢層それぞれ先輩から後輩、20代から50・60代まで）多くの考え方も学んだし、いろんな生き方・価値観を学べた。自分の世界観が広がった。さらに、いろんな企画を自分たちで起こすことができ、楽しみながらいろんなものを身につけていっている。そんな感覚です。
- ・個人的には、現在かなり忙しいのだが、それが有意義な時間となっていて楽しい。（入る前は暇な時間が多く、グダグダした生活になってしまっていたので）
- ・意見の違いや、価値観の違い上、起こる問題もとことん話し合い意見を交わす、その課程が大切だと感じた。地域の方とかかわり、社会に参加することで少しずつコミュニケーション能力が向上した。
- ・大学生活の楽しみが増えました。また、他の大学の学生さんとの交流や地域活動の取組を少しでも

知ることができてよかったです。

- ・このサークルに入るまで、全くしゃべることができませんでした。少しずつ枠の中に入っていくことができ、とてもよかったと思っています。
- ・ゼロからはじめ、自分たちで協力して物事をやりぬいていく力と、助け合う力、自分で考える力を付けることができたと思います。4年間ある大学生活の中で大切なことを学んでこれたと思います。マイルポストで出会えた人たちとの関係も自分の財産です。
- ・マイルポストの活動を通して、自分の学部以外の人をはじめ、他学部生、先生方、地域の方々と知り合うことができました。たくさんの友人ができて、大学生活がとても楽しくなりました。先生・先輩から人生のアドバイスなどももらいました。私は、人前に出ることが苦手でしたが、区民のつどいなどに出るチャンスをもらい、何か自分自身の中で少しずつ苦手意識もなくなった気がします。活動内容を通じて自分の欠点に気づくこともできて、意識して動くようにと心がけできるようになりました。
- ・地域の人がどんな人があるのか（例えば隣に住んでいる人がどんな人か）など、いざとなったら協働できる体制を作っておくことは重要だと感じた。また、自分が動くことであり、自分が最大限でできることを行うことが重要である点。

2. 行政・地域からの現代G P 事業評価

これまで3年間の本学現代G P 事業について、連携パートナーの行政関係者（名古屋市5名／多治見市1名）、N P O等関係者（4名）、商店街関係者（3名）からアンケート記入という形で評価をして頂いた（2010年2月実施／回答数13）。詳細は下記の評価アンケート集計表を参照のこと。

（1）名古屋学院大学との連携事業の総合評価

総合評価、大学・教職員の関わり、学生の関わりについては100%の評価を頂いており、それぞれ高く評価するとの回答は、85%、77%、62%にものぼる。学生の評価が相対的に低い要因として、実践授業（地域活性化研究）の場合、教職員が調整等で重要な働きをする一方で、多数いる学生の参加意欲には温度差があり、それが数字として反映されたと考えられる。

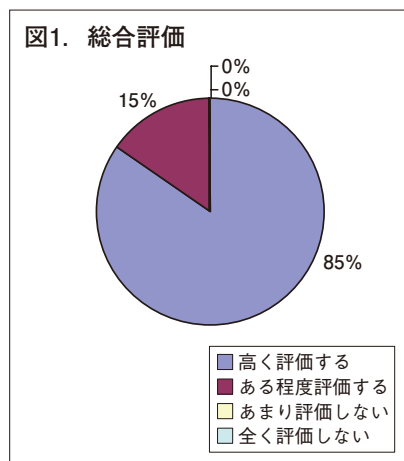
（2）具体的評価・改善点

全体的に、これまで出来なかった事業や新規事業の立ち上げ、そしてその事業成果に対する評価・感謝の言葉が綴られている。熱田区区民まつりやあったか交流カフェサロンなどの熱田区との連携事業、熱田生涯学習センターにおける名古屋学院大学連携講座やその後の活動、また、学生発案で継続・発展してきた熱田区社会福祉協議会との連携事業「あったかミニミニ福祉フェスタ」や「日比野タウンズ」などの日比野商店街活性化事業など、成果を出してきた活動に高い評価を頂いている。

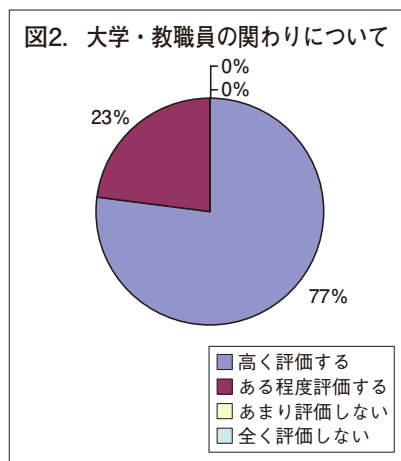
一方、改善すべき点として、十分な成果が得られなかった事業に対する改善点や事業前後の打ち合わせ、振り返りへの取組に対する配慮などの記述が見られる。これらの意見に対してはすぐに対応し、改善に努めている。

(3) 評価アンケート集計表

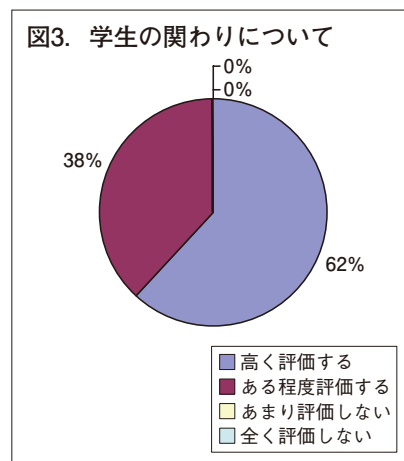
問1. あなたは名古屋学院大学との連携事業について総合的に見てどのように評価しますか。



問2. あなたは名古屋学院大学との連携事業における大学（主に地域連携センター）および教職員の関わりについてどのように評価しますか。



問3. あなたは名古屋学院大学との連携事業における学生の関わりについてどのように評価しますか。



問4. あなたが関わった連携事業について、良かった点を記入して下さい。

- ・シンポジウムに2回、地域活動に1回参加させていただきましたが、いずれも想像していた以上の規模で驚きました。地域との関わりを学生時代から関わることができ、またそれについて考え工夫する機会があるということは、彼らにとってとても大切な経験になっただろうと感じました。そして、この取組が社会へ出てから大いに役立つであろうことを、それぞれの発表から感じ取ることができました。自分の生まれ育ったふるさととはまた違った「根」を張ることができたのではないのでしょうか。今後もこういった活動の継続を願います。逆にいろいろ勉強させていただきました。ありがとうございました。
- ・河村名古屋市長と幸兵衛氏のトークショーの中で、JR名古屋が中部の玄関口であり、そこから中部の情報発信をしたい、という幸兵衛氏の意見に対し、河村市長にうなずいてもらえた事など。
- ・「あったか人まちづくり専門委員会」として協働させていただきましたが、まちづくりNPO日比野ひとまちネットとともに、名古屋学院大学日比野学舎のマイルポストであったか交流カフェサロン（行政出前講座）をほぼ毎月実施しました。熱田区民が名古屋市の行政について知る講座を、身近な場所で開催できたメリットは大きかったと思います。また、大学生と一緒にスポーツをする「夏休みこどもスポーツ体験教室」や、「熱田区区民まつりへのブース出展や堀川クルーズ」についても、学生ボランティアで参加いただきましたが、学生たちが積極的に参加することは、区民に大変好評でした。名古屋学マイスター講座、親子パン作り教室、学区広報紙編集委員交流会など、区民の学ぶ場を多く提供していただきましたし、熱田区周遊サイクリングロードも基本コースを決定することができました。どうもありがとうございました。
- ・名古屋学院大学、熱田区役所まちづくり推進室、熱田生涯学習センター、名古屋都市センター、日比野商店街振興組合など、行政と地域の連携にはじめて参加できたことで、地域とのつながりの第一歩になりました。
- ・大学がこの街に来てからは、大学・地域・行政との連携で、商店街などの活性化が少しずつ進んでいるように思われます。マイルポストでの「あったかミニミニ福祉フェスタ」は、地域の方と接する機会もでき、評価もしていただいたと思います。産業観光資源発掘では、国際会議場や中央卸売

市場の見学ができ、施設の裏側も見ることができました。学生企画の「長浜・黒壁スクエア」へのまちづくり研修旅行は良い思い出となり、さらに交流が深まりました。

- ・商店街の窓口のような存在となって、始めのうちは若干じゃま感がありましたが、現在は学生諸君と結構楽しくやっています。個々の事業についてはかなりの部分で関係させていただいてますが、学生さん発案になるひびのタウンズは、永く続けている非常に良い事業だと思います。
- ・ひびのタウンズなど学生の皆様、水野先生のリードで形となり、1年間いろいろ思いをのせながら、発刊できたことがよかった。日比野の街になじみ、期待されるタウンズになればいいと願っています。8の日清掃に積極的に参加していただいて本当に嬉しいです。
- ・「なごや学マイスター講座『熱田の産業を『再発見』しませんか』」について、現地学習も含め専門的な企画となり、受講生も満足し、講座修了後のマイスターの活躍の場として、活動や場所が助かりました。「なごや学『地場産業都市から名古屋を考える』」について、現地学習での交通費を大学側で捻出していただき感謝していますし、瀬戸及び多治見での陶芸家による説明・指導と作陶体験を喜ぶ受講生の声が多く聞かれました。「日比野ひとまちネット共催」について、子ども向けの事業として助かりました。
- ・区民まつり・賑い秋まつりにおいては、「堀川クルーズ」など学生さんの事業への参画、学校施設の提供など大変お世話になりました。今では、熱田区の区民まつりは名古屋学院大学さんなくては成り立たない状況です。また、「区民との協働事業」においても、水野先生、名城先生の多大なるご支援・ご協力により「あったか人まちづくり専門委員会」が活発に事業展開できました。あったか交流カフェサロンなど従来からの事業に加え、平成21年度には、産業観光再発見事業、サイクリングロード設定事業など新規事業にも積極的にお取り組みいただいています。平成21年3月に立ちあがった「まちづくりNPO日比野ひとまちネット」の活動も、水野先生の強力なリーダーシップにより順調に軌道に乗っていると思います。熱田区の協働まちづくりは、名古屋学院大学さんなしには考えられません。今後とも、ご指導・ご協力をよろしくお願いいたします。
- ・地元商店街の振興に関して、学生さん（若い世代）との交流が高齢化の進む商店街の構成員にとっての良い刺激になっています。学生の発案による日比野タウンズの発行などが組合活動への関心を高め、新規会員の獲得等に繋がっている点が特に良いです。市内商店街の商学連携のモデル的な事例になっていると思う。
- ・こい祭りでは前日に沢山のパンを作って販売をしていました。今の若者が自分の儲けにもならない事に、2日間も連続で奉仕している事に感心しました。日比野ひとまちネットでは書記をしてくれたり、部屋の後かたづけなど熱心してくれています。
- ・人手と場所、お金が確保できたことです。実施したい計画はありましたが、担い手や開催場所と事業費が無くて（無い無い尽くしですが・・・）頓挫していた事業が立ち上がり、軌道に乗りつつあります。福祉施設の関係者も喜ばれています。先生や学生さんとのパイプができました。そのネットワークが後日役立ちましたし、今後もお互いに助け合っていけると良いと思います。
- ・日比野商店街活性化事業について、名古屋学院大学から商店街に対して連携事業実施の働きかけがあり、また、具体的に事業提案があったことで、商店街が実践活動に取り組み始めた点、さらに、その成果としてこの一年で、商店街組織がずいぶん活性化した点。

問5.あなたが関わった連携事業について、改善すべき点を記入して下さい。

- ・地域住民との関わりが思ったほどできなかった点。コミュニケーション、宣伝等の努力不足か。

- ・ひびのタウンズでは、景品により交換数が多いとき少ないときがあるので、魅力ある景品を考えないといけません。また、参加店がもっと積極的にPRしないといけません。店によりかなりの差ができました。「あったかミニミニ福祉フェスタ」では、イベントにより参加者が少ないときがよくあったので、参加者が求める内容の充実とPRの工夫も必要だと思います。
- ・会合の時間について、次年は19時～19時半から開始にしたいと思います。ひとまちネットの職業体験は、今年度は参加人数が少なく一考を要します。
- ・会議の時間が長く学生の方には申し訳ないと常々考えています。
- ・生涯学習センター（教育委員会）の学習機会提供のねらいと大学側の地域連携のねらいを合わせるために、打合せ等を十分行わなければなりません。センター側の担当者が短い期間で変わっているところで迷惑をかけています。
- ・学生さんの行動が大変おとなしい様に感じます。もっと自信を持って活動されることを期待します。
- ・今後の開催時には、より一層の参加者増を目指し、内容を充実させたいと思います。
- ・大学と商店街との連携のあり方について、連携関係を継続していくためには、学生も商店街も、楽しく自分たちのペースで活動に取り組み、モチベーションが高まるように一つひとつ実績を挙げていくことが大切です。現行の連携のあり方に問題があるわけではないが、いっそう事業が円滑に進むように、一步一步効果的な連携関係を築いていきたいです。

問6.その他、大学に対するご意見・ご要望等を記入して下さい。

- ・ますます地域との連携を深め、地域の活性化の源となる名古屋学院大学となってください。
- ・今後もお世話になりますが、よろしくお願いいたします。
- ・名城先生、水野先生のご指導なくしては、日比野ひとまちネットの立ち上げはありませんでした。商店街との連携を特に高く評価し、引き続きご指導を願いたいです。
- ・マイルポストに参加している学生さんは、素直で好感の持てる学生さんが多く参加していて気軽に会話ができます。大学行事でも、地域や商店街などがもっと参加・見学できる行事が増えるとより一層交流が深まると思います。
- ・マイルポスト内部の人員構成などが良くわからないので、来年度よりできれば名簿がほしいです。5～6月頃に商店街を学生さんとの懇親会を開けたらよいと思います。
- ・地域のコミュニケーション力、ご近所付き合い、ふれ合いのある日比野であってほしいという思いで商店街は何をするのか…と思いながら活動して商売しています。「地域の為」が自分の中にあります。大学も開かれた大学として図書館、イベント、マイルポストなど、いろいろな情報があると思います。商店街を通じて地域の人にも発信してほしいと思います。
- ・今後も連携等はしていきたいです。
- ・現代GP終了後も減速することなくがんばってください。
- ・大学は非常に立派な活動のチラシや雑誌をつくっておられます。関係する人々にはイベントのあることが伝わっているので良いかもしれませんが、一般の人達にも広く活動を知らせることを考えられてはと思いました。それが就職活動のPRになるかも知れません。日比野学舎はとても立地の良い所にあります、カフェサロンもしっかりです。アルバイトを導入して一般の人も対象にして売上を上げる工夫をされては如何でしょうか？
- ・事業終了後の反省会に参加できるとよかったと思います。次回の開催に向けての意見を述べる場がほしいと思いました。

■全体評価および改善点の提示

ここでは(1)「地域創成プログラム」実践授業、(2)もの・まちづくり事業の二つの視点から評価していく。

(1)「地域創成プログラム」実践授業

①企業研究(2007～2008年度)

この実践授業は「もの・まちづくり」に関するプロジェクトを企画し実践することで、「地域創造」ができる人材を育成する科目の一つである。言い方を変えれば、「生き方」や「職業観」を育てる中で主体的にものごとに取り組み、問題発見・解決能力の獲得をはかる「キャリア教育」である。

以上の主旨から、現場の刻々と変化する経済社会を切り取り、ビジネスの舵取りをしている企業家を講師に迎え、2007年度は「流通・金融業界を中心に市場を知る」を、2008年度は「名古屋圏の経済と経営」を講義テーマとし、それぞれ2部14講座の実践授業を行った。

この講座では目的意識を持った学生が聴講するとともに名古屋市民に公開することによって、静かではあるが熱心に聴講し、講義後および授業後でも活発に質疑する姿が見られた。うまく学生と市民が相互に刺激し合う関係づくりができたと評価できる。また、講師陣はまさに現場を動かしている企業家であるため、学生の目線からみて興味を惹くリアリティのあるテーマであるが、08年度に本学OBを登壇させることによって、一層リアリティ感や実現可能性感を増したことからわかるように、より学生が関心を惹くテーマ設定や講師陣を選定する工夫が求められる。

②まちづくり論(2007～2009年度)

この講座は3年間継続してきた実践授業での講座であり、これも「地域創造」ができる人材を育成する科目の一つである。昨年の評価でも指摘したように、現場でまちづくりに創意工夫しながら取り組んでいる専門家(プロフェッショナル)を講師に迎えた。「地域創造」そのものであるまちづくりの実際について、景観・デザイン、文化・イベント、映像・情報、音楽・祭りなどの多面的な視点でアプローチしている。特に3ヶ年連続しての講座であったので、多面性だけでなく、学生の興味のあり様や反応の程度を踏まえて、マーケティングしながら講師の選定(継続や新規)を行っているのは、大いに評価できる。実際に、学生の声(内容の評価)は、面白く、緊迫感があり、知らない状況を知る知的興奮に満ち、多いに関心事を刺激する講座あったと、学生のまなざしや聴講後の興奮(ある講座では拍手が起こる)、学生レポート内容などから明白である。

学生への迎合ではなく、学生目線に立った興味の導入口を設定しながら、「キャリア教育」することの重要性がここに見ることができる。その意味では、教員そのものが「学」として理論研究することは重要なテーマであるが、一方でまちづくり現場を重視する「実践」が重要であると言える。そのことを通じて教員自身が学生に対するリアリティを講義することができるとともに、現場「実践」を通じて、多くの人材と出会うことに繋がり、人材ネットワークを構築することができる。つまり、企業研究やまちづくり論のような実践授業にとって外部講師陣の活用は不可欠であり、そういう努力が一層大学に求められる。

(2)もの・まちづくり事業

もの・まちづくり事業は、大きく①地域間交流事業(地域活性化研究A)と②地域交流拠点活性

化事業（地域活性化研究B）、③地域連携センター事業とに分けることができる。これらについてそれぞれ評価していく。

①地域間交流事業（地域活性化研究A／2008～2009年度）

名古屋圏は消費・文化都市である名古屋市を中心にして、それを取り囲むように陶磁器、木材、繊維、自動車、環境などの地場産業や近代産業が立地している。そこで、瀬戸キャンパスのある瀬戸や美濃（多治見等）と名古屋キャンパスのある名古屋（熱田）は、かつて「やきもの」で地域連携があったという史実にもとづき、「東海道」ならぬ「陶街道」を通じて生産と消費を結ぶ事業を展開してきた。

交流であるからには相互の行き来がなければならない。2008年度には消費地名古屋で産地瀬戸及び多治見（美濃）の紹介を行う「陶街道交流フェスティバル」を開催し、2009年度には消費地名古屋から生産地瀬戸及び多治見（美濃）を訪問する「産地バスツアー」を開催した。

■「陶街道交流フェスティバル」（2008）は第一に「器の感じ方・楽しみ方」を陶芸家、美術館支配人、空間デザイナーといった実践家3人によるトークセッションであり、その講話内容によってやきものの奥行きを学ぶことができた。第二は「陶磁器ブランドのこれから」をテーマにブランドづくりの専門家と陶磁器企業の職人、同時に学生の参加という大変興味をもたらし組み合わせのセッションが展開された。学生の素朴な評価は、出来合いでなく、鮮度の高い評価になっていたのが効果的であった。また職人とブランドづくり専門家とのコラボレーションによる製品開発が現在進行形であったがゆえに、聴講者の興味をそそった。それとあわせて講話だけでなく陶磁器を「こしかた ゆくすえ」のテーマで展示することや陶磁器の展示販売によって、より説得力を増すことにつながっていた。

■「産地バスツアー」（2009）は熱田生涯学習センターとの連携講座であり、学生が中心となって企画・運営するバスツアーにその受講生が参加するものである。学生自身がやきもの産地の見どころや魅力を事前に学習・調査したうえで、受講生を案内し産地との交流を深めるものであり、学生の力量が問われる事業である。産地バスツアーは瀬戸ツアー（19名の受講生を7人の学生が案内）と多治見ツアー（23名の受講生を8名の学生が案内）の2種を実施した。この事業を通じて、学生自身がプロジェクトの企画から実践までのプロセスを学ぶことができたうえ、ガイドボランティア（案内）することが地域情報を収集し学んでこそ可能となり、そこに地域への愛着があつてこそ説得力を増すことが理解できるようになった。この過程で収集した情報にさらに2つのやきもの産地（常滑焼と萬古焼）を加えた「陶器産地ガイドブック」を作成したことは、より質の高いガイドができるステップアップ材料になる。

全体を通じて相互交流こそ相互理解に通じることが明らかになった。そのことに学生自身が、積極的に取り組むことが人材育成に大きく繋がったと評価される。

②地域交流拠点活性化事業（地域活性化研究B／2007～2009年度）

■地域交流拠点とは学生運営のまちづくりカフェである「マイルポスト」である。ここでは地域活性化を図る「まちづくり」と自己成長を図る「自分づくり」をテーマに、様々な事業を展開してきた。

具体的にはa) あったか交流サロンであり、熱田区役所とNPO日比野ひとまちネットと連携して、「パンづくり教室」や「行政出前講座カフェサロン」（月1回のペース）を実施してきている。もう一つはb) あったかミニミニ福祉フェスタであり、熱田区社会福祉協議会と連携して、障がい者福祉施設と地域交流イベント（例えば福祉施設の自作製品の逸品販売など）を行ってきている。さらに一

つはc) 日比野商店街活性化事業であり、日比野商店街振興組合と連携して、商店街情報紙「ひびのタウンズ」の発行や「8の日清掃」(10余~20名の参加)などを実践している。最後にd) フェアトレードの推進であり、NPOシャブラーニル等との連携であり、店内でフェアトレードコーヒーや雑貨を販売するとともに、「フェアトレードフェスタ2009」のイベントも実施された。

これらの展開にあたっては、第一に行政との連携が仕組みとして確立され、具体的にはベースに大学と名古屋市との連携協力に関する協定があり、熱田区役所にまちづくり部署となるプラットフォームがあること、第二に地域の様々な組織・機関(熱田生涯学習センター、日比野商店街、NPO 日比野ひとまちネット、熱田区社会福祉協議会など)ともうまく連携ができていること、第三にマイルポストおよび大学としてのサポート組織である地域連携センターがそれらの要の役割を担っていること、といった交流ネットワークのシステムがきちっと組み込まれていることが評価できる。

これら事業に係わった役所・組織・団体の代表者は大学との連携事業についてはすべての人が「総合的にみて高く評価する」としている。とりわけ商店街にとっては連携事業を始める時点での組合員数は40店舗であったのが、現時点では69店舗と72.5%増加となっていることから、マイルポストと商店街の連携事業が商店街活性化に貢献していると評価できる。

この現代GPの事業が終了しても、これらの活動を継続するだけでなく、一層活発化させていくことが課題である。また広報にあたっては様々な事業に関係者だけでなく、広く市民に周知させる方法を確立することも課題である。

■次に地域観光マップの役割を担う熱田区情報誌「なんじゃもんじゃ通信」がある。この情報誌はまちづくりの基本である、地域を「知る」→「伝える」→「行動する」プロセスを後押しするものである。学生の取材による情報収集と情報誌による情報発信、熱田生涯学習センターの講座を通しての住民への情報提供といった取り組みは大学と地域住民と区役所等の連携強化と協働促進をはかるうえで重要であるので、これらの活動は評価できる。

課題として、継続しながら学生の地域を見る視点の多様性や表現方法のレベルアップを図るとともに、住民自身も講座といった受け身的情報収集だけでなく、学生と一緒にタウノウォッチングをした成果をなんじゃもんじゃ通信に投稿してもらうなど、名実とも学・民・公の一体的取組に展開していくことがあげられる。

■最後に堀川にぎわいプロジェクトがある。これは名古屋市と堀川NPOと連携して、水上バス観光ボランティアガイドを実施するものである。きっかけは2006年に実施された「堀川ウォーターマジックフェスティバル」に参加して、堀川水上バス体験に対するアンケートを実施し、その要望のなかに「観光ガイド」があったからである。参加学生はガイドのために様々な情報を集め、学習し、それをもってガイド実践する、さらに勉強不足を補い、発言訓練などを行うなど、資質向上の正のスパイラルを実現していこうとしていることは評価できる。またその活動の副産物として、一般向け「堀川検定」に発展したり、「木曽川堀川交流イベント」に参加したりするなどの広がりがみられたことも評価できる。

③地域連携センター事業(2007~2009年度)

2007年4月の名古屋キャンパスの開設にあわせて、地域貢献を目的に設置されたのが地域連携センターである。大学として上記の活動をバックアップしてきた。いわば諸活動のインフラ部分を担う組織である。すでに述べたように、名古屋市との包括的な連携協力協定を締結して、まちづくりに係わる専門委員会を立ち上げ、教員や事務職員、学生をメンバーとして送り出している。また、マイルポストを日比野学舎に移転することによって活動の継続性を担保していることは評価できる。

これまで述べてきたあつたの魅力向上・魅力発信にかかわる事業に教員・職員が参加・協力している。

とくに全国まちづくりカレッジ2009in名古屋の主催者となって事務局を担い、成功裏に終了したことは特筆できる。これは大学等教育と地域社会を連動させて、まちづくりを通して学生教育と実践を結び付けている大学関係者と学生による大会である。大学・高校など14団体と約120名の参加者を得て行われた。全国の取り組みを通じて、本大学の活動のポジショニング（立ち位置）を測ることができ、何が弱みで何が強みかを客観的に知ることができる。また本大学の活動を全国にPRすることも可能となる。

（３）全体を通じて

第一に、この現代GPを実践する３年間を通じて、地域理解・地域貢献を教材とした学生参加・実践型の教育プログラムを遂行する組織体制（連携システムを含む）が確立したことが評価される。大学内での地域連携センターの設置、名古屋市との包括的連携協力協定の締結とそれをベースにした地域の諸団体との連携事業の展開、マイルポスの大学内施設への移転などがそれである。多くの関係者が懸念するのは現代GPが終了すれば、これまで積み上げてきた活動が停滞するのではないかということである。すなわち教育プログラムの遂行継続とそれを担保する地域連携システムの確固たる構築が求められているが、それへの体制作りはできているが、活動の資金的担保を含め一層の継続体制が求められる。

第二に、まちづくり（地域創造）は短期でなく、長期にわたる事業である。今回の取り組みの一つに地域間交流事業が展開されてきたが、「土の系譜（陶磁器）」を中心に行き来の交流がすすめられ、その質的なレベルアップが求められる一方で、「木の系譜（木材）」や「糸の系譜（繊維）」などについての新しい分野への取り組みが課題として残る。

第三に、これまでの取り組みを大学内外に情報発信するためのシンポジウムやサミットを積極的に開催してきたことは評価しうる。2007年のキックオフシンポジウムをスタートに2009年の現代GP総括シンポジウムまで5つのシンポジウム等を開催している。情報発信すれば情報受信しやすくなるので、学生参加・実践型の教育プログラムの質を高め、地域連携を強化し、関わる学生や教員の自信を深めることになる。そして対外的評価を得ることで改善点を明確にすることもできる。よって今後もシンポジウム開催によって、成果報告とその情報発信を継続していくことが課題である。

第四に、学生参加・実践型の教育プログラムに対する学生の評価を計測するモノサシ（指標）を明確にする必要がある。これまで試行錯誤でアンケート調査を実施してその評価を得てきたが、同一指標で継続計測していくことが、次の展開を明確にすることができる。地域連携・地域貢献に対する評価指標も同様である。商店街活性化の取り組み評価が組合員数の店舗数で測ることができたように、新聞掲載の件数を測ることができるよう、数値的は指標があれば望ましい。

最後に、教員や職員が幅広くこのプログラムに関わっていくように促していくことが課題である。とくに教員の裾野を広げていくことであろう。多くの教員が関わるほど地域とのネットワークや情報を持っている人々とのネットワークが強固に構築され、大学全体のレベルアップにつながってくる。

（評価者：株式会社都市研究所スペースア 代表取締役 井澤知旦）

■地域創成プログラムの次年度以降の方向性

経済学部長 木船久雄

経済学部教授 古池嘉和

経済学部教授 水野晶夫



【木船】 現代GPの総括をしながら、今後の展開を検討していきたいと思います。水野先生から拠点活性化事業について、古池先生から地域間交流事業について振り返ってください。

【水野】 名古屋市との連携協定に基づいて熱田区とのプラットフォームを築いて、さまざまな活動を行ってきたのが大きいですね。マイルポストを拠点に、日比野商店街と連携した商店街活性化から始まり、熱田区役所、社会福祉協議会、NPOと連携し、活動を発展させてきました。

【古池】 名古屋という一大消費地と瀬戸という陶磁器生産地との関係を、学生教育を絡めながら交流していくというのが取組の大きな目的です。実際には、瀬戸・美濃の製品を紹介する「陶街道交流フェスティバル」、名古屋の方々を瀬戸や多治見に案内するという「産地ツアー」を、2カ年の中で実践してきたのが現代GPとしての成果です。

【木船】 他にも、シンポジウムや全国まちづくりカレッジなどを開催しましたし、「企業研

究」では経営者等を招いた講義を行いました。教育上の成果という視点から、このプログラムを通じて学生はどのように成長していったのでしょうか。

【水野】 社会人基礎力といわれるチームワーク、自己効力感、課題解決力など、それぞれ良い学びができました。面白いのは、実践授業（地域活性化研究）の受講生と、マイルポストのように課外活動に参加した学生とでは学び方が違うことです。前者では、座学で学んだことを実践し、その後振り返りをていねいに行っている分、社会への関心度が高まっているようです。マイルポストは助け合いや思いやり、コミュニケーション能力などが高まっています。

【古池】 座学の「まちづくり論」では、実践者を呼んでいろいろお話をさせていただきました。学生のレポートを読み返した感じでは、社会でどうつながっていくかを強く意識してくれたと思います。一方、アウトプット学習では「地域活性化研究A」の中で、座学の受講者から我こそはという学生が受講してくれました。彼／彼女たちには、熱田生涯学習センターとの連携講座（産地ツアー）の中で、報告をしてもらいましたが、陶磁器についての必ずしも十分でない知識を発表する過程において、地域の方とうまくやりとりをしていました。コミュニケーション能力の修得という面でも有効であったと思います。

【木船】 次に、地域貢献という視点から、この取組は地域に本当に受け入れられたのか、人的ネットワークは形成されてきたのか、さらに良い教材を生み出すきっかけになっているのか、という問題を考えてみたいと思います。

【古池】 経済学部なので、地場産業の活性化につなげたいという理想はあります。だが、そのためにはある程度、年数を積み重ねていくことが必要です。現代GPでの取組をいかに続けていくかが大事な視点です。

また、学生が夏休みに交流事業をするために、瀬戸・多治見だけでなく、四日市の萬古焼や常滑焼も含めて陶磁器産地にバスで取材に回りました。東海地区の陶磁器産地の取材で得られた、現地の人や場所の情報を冊子にして、各産地や他の地区へ配布することで、ネットワーク形成のきっかけにしたいと思います。



【水野】 日比野商店街は、名古屋市の中で3年連続組合数が飛躍的に増加している唯一の商店街です。2006年末に41店舗だったのが、2009年末には69店舗にまでになりました。2007年4月に本学（経済学部、商学部、外国語学部）が移転してきたことが大きいですが、学生の企画で「ひびのタウンズ」というスタンプラリー形式のパンフレットを配布するなど、商店街活性化事業が進むにつれて、組合に入りたいという店が増えてきました。

【古池】 熱田生涯学習センターとの連携講座では、座学に加えてフィールドワークも行い、アウトプットを目指したものもありました。2008年度に私が担当した「わたしたちで『あつたの情報誌』を創っていこう！」では、地域情報誌の編集を講座の中で進め、材料集めを市民と学生が一緒に取り組んだり、あるいは一部文

章はブログを使って発表してもらったりしました。その成果物として地域情報誌「なんじゃもんじゃ通信vol.1」を発行しました。

【水野】 古池先生に続いて、2009年度には「熱田の産業を『再発見』しませんか-熱田・産業観光を学ぼう-」を私が担当し、講座後受講生の有志の皆さんと「なんじゃもんじゃ通信vol.2」を発行しました。それと、大きいのはまちづくりNPOですね。2008年度に、熱田生涯学習センターと名古屋都市センター共催・本学連携講座「地域の“まちづくりびと”養成講座」を開講して、講座後に、まちづくりNPO“日比野ひとまちネット”を立ち上げることにつながりました。ちょうど1年を迎える頃です。10数名のメンバーで、地域交流イベントなど、熱田区や名古屋学院大学と連携して実施しています。

【木船】 地域創成プログラムの今後について、教材としてどのような発展性が考えられますか。

【水野】 先ほど言ったように、課外活動と実践授業では学び方が違いますので、それぞれの良さをもう少し相互に加味できないかなと思っています。課外活動においても、自分たちの成果を振り返ることで学習効果を高めることが1つです。授業では、教員がリードせざるを得ない面もありますが、自主的に実践できる部分も作っていかれると思っています。

マイルポスの活動では、障害者福祉や商店街、環境問題などのイベントの企画運営に関わってはじめて、その分野の関心が高まるようです。それはすごく面白いと感じています。環境や福祉などの啓発事業を実施する主体は、大体は関心がある人の集まりですよね。マイルポスはそうではなく、普通の学生が入ってきて、活動を通じて啓発されていくんですね。これを実践授業でも関わられるようにすると、教育的な

成果としてはより多くの学生たちを対象にできていると思っています。

【古池】 「まちづくり論」という外部講師を招いた座学では、いろいろなトライアルをしてきました。1年目は60分話を聞いてその後レポートを書くようにしました。2年目は私が前後のサポートをして、講師に話してもらってまとめるというスタイルをとりました。今年度からは20分をひとつのユニットとして、例えば、講師の方の話を40分（20分×2）、私との対談形式（20分）、学生をサポートしながらの質問時間を20分などと、細切れにしながら、実践者の橋渡しをしました。そういった学生と講師との橋渡しをしないと、講師の方と学生の情報の差や、実体験の差、モチベーションの差などにより溝ができてしまう。そのためのアウトリーチを、いろんなパターンでやってみましたが、その前後で、学生の反応が違いましたね。

現場学習でも同じようなことで、現場の受け皿となる方と教材開発の段階からコミュニケーションを深めていこうと考えています。名古屋市港区のまちづくり協議会に本学OBがいますので、次の地域活性化研究では港区と熱田区の交流について、今から議論して4月から動かしていこうと思っています。

【木船】 では地域貢献という視点から、この取組をどのように発展させていけばよいでしょうか。

【水野】 地域連携の協働ネットワークの関係ができたので、これを維持・継続することが最大の地域貢献だと思っています。マイルポストに参加する学生は、2007年度に発足してから今は3代目まで世代交代が進み、初代の学生がいません。先輩から継続する事業も多いので、私も加わる形で趣旨をていねいに説明して、地域とのネットワークを学生が意識していくことが一番大切かなと思います。

また、熱田区には歴史文化だけでなく産業もたくさんあるということを地域の方々に理解していただくために、3月末にあつた産業再発見ツアーを実施して、名古屋市中心卸売市場と名古屋国際会議場を回ります。両施設は、COP10（生物多様性条約締約国会議）にも関係があるため、COP10パートナーシップ事業として実施します。

さらに、「名古屋まちづくり縁（えん）・カレッジ」への参画です。これは、大学・大学人・学生が連携し、専門的な知見、そしてフレッシュなアイデアや活力を活用しながら名古屋のまちづくり活動を推進するためのネットワークで、2月にキックオフイベントが開催されました。まちづくりといっても、建築系やデザイン、環境系などで活躍していたりと、いろんな分野の方がいます。本学の学生たちが良い刺激を受けて、交流の場を広げていくことも、発展の方向性と考えています。



【古池】 今回の現代GPは、名古屋大都市圏における「土の系譜」という切り口で、陶磁器産地（瀬戸・多治見）と消費地（名古屋）の交流を意図したのですが、ようやくスタートラインに立っただけであり、今後の継続性が大切です。また、大学は様々な切り口で地域貢献が可能だと思いますが、本学の場合、地域連携センターの役割が大事になります。現代GPの補助事業が終了した以降は、地域連携センターが中部圏を視野に入れた実践機能などをコアとして担い、そこと教学が連携して事業と授業を融合

していれば理想ですね。そういう意味では、地域連携の分野において、大学として、あるいは経済学部として、中部圏でいかに存在意義を発揮していけるかということだと思います。

【木船】 これまでつくり上げてきたネットワークを継続・発展させるには、体制整備が重要ですね。大学または学部のカリキュラムとして取り組むべきことについて意見を聞かせてください。

【古池】 現在、キャリアセンター委員を務めてきて、企業との接点で感じるがあります。キャリアセンターで主催するインターンシップは、学部横断で募集し、事前事後指導を含めて単位認定を行います。それとは別に、例えばOBが一生懸命やっている会社と連携して、経済学部の専門カリキュラムの中でもっとインターンシップ的な取組ができると思います。自治体もそうですし、地域の企業などもっといろんなプレイヤーとつないでいこうとすると良いですね。企業連携のバラエティを広げてその中で個別に関連を持つという、場づくりを学部カリキュラムが提供できるのではないのでしょうか。

【木船】 経済学部ではこれまで、企業との連携という視点で「企業研究」を実施してきました。現実的には圧倒的な学生が企業に就職していくわけですから、企業との接点をより深めるような教材があっていいと思いますね。

【水野】 現代GPの取組とは別に、個人的なつながりで文具メーカーと少し関わりを持っています。参加するには少人数でプロジェクトチームをつかって、ていねいに指導する必要があるって、授業で実施していくには、教員一人ではとても回せないんですよね。そこで体制について考えると、プロジェクト学習の専属職員がいて、企業との調整や学生の支援もていねいにできていくと、企業との関係も継続できると思います。

【木船】 例えば、京都文教大学のフィールドリサーチオフィスの取組は参考になります。教員が窓口でなくても、学生が困ったときはすぐ相談できて指導できる場所が常にあるわけです。また、社会への窓口としてクッションにもなってくれるわけです。現行の地域連携センターの機能に加えて、プロジェクト学習を支援する専属の部署がほしいですね。

【古池】 本学の地域連携センターは2007年に発足し、これから発言力や存在意義を発揮できるよう、大きくなる可能性を持っています。そのためには実績は積み重ねていかなければいけませんね。

【木船】 地域創成プログラムが学生教育の面でも、地域貢献の面でも有効であったことがあらためて確認できました。私たち教員が取組の推進に努力するのはもちろんですが、今後の成果をより大きなものとするためには、大学側の支援体制の整備・充実が大きな課題であることも認識できました。本日はありがとうございました。



発 行 日 2010年3月31日

編集・発行 名古屋学院大学 経済学部 現代GP推進委員会

連 絡 先 〒456-8612 名古屋市熱田区熱田西町1番25号
TEL: 052-678-4080(代) FAX: 052-682-6811
URL <http://ngugp.jp/gendai>

印 刷 株式会社 鈴活印刷



名古屋学院大学

<http://www.ngu.jp/>